読書科学

第11巻 第 3 号（通巻 第 41 号）　昭和43年3月10日 発行（季刊）

児童漫画「のらくろ」の作品分析	阪本 一郎
大学生に行なった速読訓練の効果(1)	佐藤 泰正
漢字における読字の困難点の研究(1)	福沢 周亮
非行少年の読書療法による治療例(9)	大神 貞男
幼児のお話の能力の発達(1)	阪本・今井・篠原
実践報告	横溝・金子・阿部
読書療法の事例研究	半田 茂雄

41

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原　著

児童漫画「のらくろ」の作品分析	阪本一郎	1
大学生に行なった速読訓練の効果(1)	佐藤泰正	12
漢字における読字の困難点に関する発達的研究(1)	福沢周亮	16
非行少年の読書療法による治療例〔第9報告〕	大神貞男	22
幼児のお話の能力の発達(1)	阪本一郎　今井路子　篠原寛子	29

実践報告

学級における矯正的読書指導の実践	横溝昭平	34
国語教室における読書指導	金子百合子	39
読書指導の問題点とその対策	阿部敏子	44

資　料

読書療法の事例研究	半田茂雄	49
会　報		54

日本読書学会会則（抄）

1. 本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。
2. 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
   1) 会員の研究促進を目的とする大会の開催。
   2) 会員の共同研究を目的とする部会の開催。
   3) 会員の日常の研究，実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
   4) 読書及びその指導に関する内外諸文献の調査並びにその紹介。
   5) 内外における関係諸団体との緊密な連絡。……下略。
3. 本会の正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み会費を納入したものとする。
4. 会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物の無料または優先的配布をうけることができる。
5. 会費は当分の間年額1000円とし，毎年3月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

児童漫画「のらくろ」の作品分析*

日本女子大学

阪　本　一　郎**

1　「のらくろ」の生涯

長編漫画「のらくろ」が「少年倶楽部」に登場したのは昭和6年の新年号で，それから毎号に欠かさず掲載され，昭和16年の10月号を最後に姿を消している。足かけ11年にわたり，編数にして134編（全集に収載のもの）に及んでおり，長編記録では戦前のトップである。

作者の田河水泡（本名高見沢仲太郎。筆名はタカミザワをもじったもの）は，かつて前衛美術家を志したアナーキストだそうで，内職に「面白倶楽部」に新作落語を書いていた。のちに「少年倶楽部」にも少年落語を書くようになり，それが絵もかけるということで，漫画の執筆を依頼されることになったのだといわれる。

昭和4年の新年号から連載された彼の「目玉のチビちゃん」が，のらくろを生むきっかけになったのだそうで，その産婆役の編集者西村俊成の話によると，その中で名犬ジャン公の活躍が目立っていたので，“こんどはひとつ，犬でもっていこうじゃないか，子どもは犬が好きだ，その犬に軍隊生活をさせたらおもしろいぞ”ということになって，田河にその趣向を持ちかけたのだという。

「のらくろ」は野良犬のクロの略称である。頭の両方に黒いところが割れているのを「ハチ割れ」といい，また黒犬で四つ肢の先の白いのを「四つ白」といって，いずれも縁起がよくないというので捨てられる。のらくろはそういう運命に生まれて，親を知らない。「のらくろ小犬時代」（昭10—7月）によると，彼の思い出せる最初は，箱のふたに載せて川に流されているところからだという。それをある少年に拾われたが，家人の反対でまた捨てられ，やがてある家に飼われることになるが，その幸運を同じ身の上の捨て猫にゆずって，これからは人の世話にならず自分の力で生きていくという意気を示す。

その小犬が，ひょっこりと猛犬連隊の衛門に現われて，入営を志願するところから話は始まる。読者からの評判がよいので，翌年1月には一等兵に，6月には上等兵に進級し，それからは毎年進級を重ねていく。その間，粗骨による失敗と思いがけない手柄とで読者に愛せられ，山猿軍・ゴリラ軍・チンパンジー軍等との実戦にも参加して戦功を立てる。

昭和11年に士官学校にはいり，少尉に任官してからも熊軍・野豚軍・山猿軍等と戦い，満洲の守備隊長として活躍するが，昭和14年4月大尉で依願退官する。

すぐに彼は満洲の開発に渡る。探険隊を組織し，金鉱を発見して，のらくろ金山を経営する。これは成功したが，16年の10月，突如として「おわり」となり，姿を消してしまったのである。

むしろ中断という形である。ここで急に切れてしまった理由として，この作品は皇軍を犬に見立てて侮辱するものであり，友邦の中国を豚としたり，ロシアを熊としたりして敵視するのは国策にもとるものだなどといって，軍の情報局から執筆を禁止されたのだと伝えられる。そういうことも口実にされたのであろうが，昭和13年10月に内務省が出版物の統制に乗り出し，赤本漫画を

---

* Psychological analysis of the children's comic, “Norakuro”

** SAKAMOTO, Ichiro (Japan Women's University)

発禁したり，雑誌の長編漫画の量を減らす指令を出していることとの関連も見のがせない。この前後には他にも多くの連載漫画が終わっているのである。官僚の思想的統制弾圧と，物資の不足に追いつめられてきた事態とが，重なってのらくろの命を短めたのだと言えよう。

だがその上に，作者の疲労も見のがせない。だれもが言うように，「のらくろ」は，主人公が将校になるまでの間がおもしろい。彼は作者の落語的発想の面目を発揮して活躍するが，将校になると，そうふざけてばかりはおれなくなる。ついに少尉から大佐への進級の時期が来たが，これを思いとどまって退官させ，満洲開発の浪人に転身させている。最後にはもとのブル連隊長が経営している開発会社の重役に迎えられるが，それを拒んで，一技師として働くと申し出ている。あるいはこれを転機として新しい兵卒的場面に立ち戻ろうとしたのかもしれないが，彼はもはや精神的に成長しすぎていた。

彼が猛犬連隊に入営した昭和6年は，満洲事変の勃発した年である。すでに済南事件が起きており，翌年には上海事変が起きた。昭和8年には日本が国際連盟から脱退し，戦雲がこくなるのを偽装するために翌年には戦争挑発出版物取締の基準を作っている。このような気運の中で，のらくろが稚気にあふれた兵隊ごっこや戦争ごっこをしているのは，当時の子どもの夢に合っていたと言える。しかし漫画だからそれでよかったのであって，そのころの「少年倶楽部」の読み物には，山中峯太郎の「敵中横断三百里」「亜細亜の曙」等をはじめとする戦争ものがはんらんしていた。それらに引きずられて「のらくろ」も単なるごっこ遊びからはずれていった。たとえば彼が少尉になった昭和11年には，裏山に現われた怪獣と戦っているという空想的なものだが，日支事変の勃発した12年には熊軍との実戦が，あるいは豚の便衣隊や山猿軍との実戦が，あきらかに中国やロシアを敵国に見立てた構想になってきている。そして14年にははっきりと満洲国境の守備隊長となっている。かように空想の世界から現実の戦場へと降りてきてしまった。したがってのらくろも，へまをやってしくじってばかりはおれない。彼も忠勇無比な日本将校として自覚せざるをえなくなったのである。

こうしたのらくろの精神的成長が，彼自身の命を短めたのだとも言えなくはない。彼の中には落語と講談とが同居するようになり，回帰性症状が高じて，自同性を維持することがもはや困難な状態になっていたのである。

2 「のらくろ」の説話形式

「のらくろ」は雑誌の4ページのスペースを与えられ，各ページを5～6コマに割って，全体で20～23コマで物語る形式をとっている。ときに増ページもあり，別冊付録になったときは30ページに近くなっているが，各編ごとに読み切りで，少数の例外を除いては，テーマを1編ごとに変えている。

したがって1編ごとに物語がいちおう完結するわけだが，全体としてはのらくろの猛犬連隊での軍隊生活がえんえんとして語り続けられることになる。このような説話形式はすでに大正時代に岡本一平によって試みられており，輸入の「親爺教育」や「マットとジェフ」などで一つの定型をなしていた。しかしこれら中編連続形式では，物語がいつも同じ平面にあって，事件が立体的に展開しない。それがこの形式の長所でもあり，また短所でもある。長所というのは，同じ平面の上でのあらゆる可能性を探求することができるという点である。この点では，後に現われる「フクちゃん」や「サザエさん」がその長所を発揮するのだが，これらは4コマ形式である。20コマを越す中編形式では，かなり詳細に事件の展開を描かなければならないから，連続の中に新奇性をもることがたいへんめんどうになる。この困難が克服されないと，内容がしだいに同じことの反復になり，読者に飽きられてくる。同じ平面での中編連続形式が長く続かないのは，このためだと思われる。

これに対して「鉄腕アトム」や「少年ケニヤ」などは，各編ごとに平面が異なり，いわば段階式に物語が積み重ねられていく。しかもその断層はほとんど重要ではなく，次の段階では，主役と脇役とが同じであるだけで，

舞台が変わり，敵役も変わり，まったく別の物語になる。これだと作者のプロッティングの力の続くかぎり，いつまでも新奇性を保つことができる。

「のらくろ」では，明けても暮れても同じ兵営の中で，連隊長や中隊長とのトラブルが起きるだけ，たとえ野外に出ても，やはり同じ平面での事件が生ずるだけである。この平板を破るために，ときどき敵軍との戦闘が挿入されるが，それも毎回同じプロットで，またかの感をいだかせる。それに軍隊生活の平面の問題のさぐりかたも粗雑である。筆者はおそらく軍隊生活の経験がないのだろう。それはとにかくとして，愚直なのら犬に兵隊ごっこをさせるという発想では，この程度で当時の読者に訴えることができたのであろう。

だが1年間で終結しないという事情から，のらくろを一等兵に進級させた。この着想は成功した。読者には主人公の進級の期待が加わったのだ。これによって物語は段階式に展開するかと思われた。しかしそれは肩（首）章の星が一つふえただけのことで，彼の生活の平面は変わらなかった。いちばん大事なことは，彼の下位に新兵がはいってきて，彼の社会的地位や役割りが変化することであるはずだが，あいかわらず彼は同じ平面をはいまわっているのである。

のちに下士官となり，将校となるにつれて，彼の生活の平面はいくらかの傾斜を登ってはいる。しかし作者は，のらくろが二等兵時代のイメージに固執した。それはそれでよいのだが，そのイメージを別の平面に移して，新しい事件の渦中に投ずることをしなかった。いつのまにか舞台が満洲に移り，国境守備隊となっていても，読者には気が付かないほどであった。

最後に満洲へ出なおし，地下資源の探険を始める。ここでやっとのらくろに新生面が開けるかに見えたが，これは少佐の階級とのらくろのイメージとの融合に術を見いだせなかったために過ぎず，兵営生活の平面からは脱却しきれていないうらみがある。

このように見てくると，平面的な連続形式で中編漫画を長く持続するのは，たいへん困難な仕事だといえよう。にもかかわらず10年余にわたってこれをかき続けた作者の労は多とすべきであり，このような実験をする者が後にないことを見ても，この作品の史的意義は大きい。

3「のらくろ」の話根

「のらくろ」は20コマあまりの読み切りで，解説の文はなく，絵と登場人物のセリフだけで物語を進めていく。だからコマの連続の初めの部分は物語の発端を物語り，それの展開が続き，終わりの部分で終結を物語るという3段の説話形式をとっている。1例をあげよう。

(1) 歩哨演習でのらくろが単哨に立たされる。（2コマ）
(2) 立哨中，虎が出たので急ぎ報告する。（4コマ）
(3) これを聞いてブル連隊長が立ち向かうが，一撃でやられる。（6コマ）
(4) 大砲を撃つが虎はびくともしない。（5コマ）
(5) のらくろは虎の子に変装して奇計で虎を捕える。（6コマ）　（昭6—7月号）

この例で，(1)は(2)の前提にすぎないから，一つの話根にまとめられ，この物語の発端を成していると見てよい。(3)と(4)とは展開であるが，実は同じ事態の反復にすぎない。そこで(5)がヤマとなり，物語の終結になっている。このように分析すると，1編の物語は5～6コマを単位とする話根が数個配列されて成り立っており，第1の話根は発端を，最後の話根は終結を，そしてその中間にいくつかの話根が展開を物語っているという基本形式が見られるのである。

「のらくろ」はだいたいみなこのような形式をとっているが，作者のモチーフはむろん終結の話根に投入されていることが多く，それに次いで展開の段階の話根に入れられていることも時にはある。あるいは主たるモチーフのほかに副次的なモチーフを挿入している例もある。これらの主及び副のモチーフを含む話根を抽出すると全体の中から215点が得られた。（ただし説話形式の異なっている編を除く。）平均すると1編に1.6のモチーフが用いられていることになる。

さて，これらの話根は，登場人物の行動の成功と失敗

とに大別することができる。さらに，その結末にいたる行動の様式は，

① 努力——目標に向かって正面から接近する。

② 稚拙——その接近が拙劣・不注意・誤認などで失敗に終わる。

③ 機知——その接近に機知を用いる。

④ 偶然——本人以外の原因に左右される。

の4種に分類された。これらを，のらくろの兵卒・下士官時代，将校時代，および大陸開発時代に分けて，出現度数を示すと，表1のようになった。

表1 「のらくろ」の話根分析 （縦に合計100%）

	兵卒	将校	大陸	全体
成功（小計）	**43.4**	**41.0**	**31.6**	**40.5**
努力成功	13.1	10.3	2.6	10.2
機知成功	27.3	24.4	10.5	23.3
偶然成功	3.0	6.3	18.5	7.0
失敗（小計）	**56.6**	**59.0**	**68.4**	**59.5**
努力失敗	12.1	2.3	—	6.5
稚拙失敗	31.3	48.0	60.6	42.4
機知失敗	8.1	6.4	2.5	6.5
偶然失敗	5.1	2.3	5.3	4.1
努力－成功失敗	25.2	12.6	2.6	16.7
稚拙－失敗	31.3	48.0	60.6	42.4
機知－成功失敗	35.4	30.8	13.0	29.8
偶然－成功失敗	8.1	8.6	23.8	11.1

これを見ると，全体として成功が4割，失敗が6割で，失敗のほうがやや多くなっている。それにしても「サザエさん」には成功がほとんど無いのに比べると，『のらくろ」には成功がかなり多いことが目立つ。のらくろは，失敗ばかりしてはいないのである。このことは，一方ではのらくろを冷笑の対象としながらも，他方では一個の英雄として押し立てていく作者の意図のあらわれであろう。彼はしばしば軍功を立て，勲章をもらうのである。笑いのなかに少年の夢を織りまぜた作品と言えよう。

だが，のらくろの成長過程に沿って段階別に見ると，ふしぎなことが発見される。すなわち成功は，成長するにつれて減少し，その代わりに失敗がふえていっている。つまり「のらくろ」は後になるほど失敗漫画に近付いていく傾向をたどっているのである。このことは子どもの夢の補償的満足に役立たなくなることを意味するわけで，この作品がしだいに飽きられてきたことと関係がありそうに思える。

次に成功の要因について見よう。もっとも多いのは機知による成功で，全体の約4分の1を占めている。のらくろはしばしば変装をして敵を捕えたり，楠木戦法をまねて敵をあざむいたり，新兵器を発明したりする。ところが，これが成長するにつれて減っている。また努力をして自力で成功する話根も減少して，大陸時代のそれがもっとも要求されるはずの段階ではほとんど用いられなくなっている。それに代わってふえているのが自力によらない偶然の成功である。自動車が崖にぶっつかったらそこが偶然に鉱脈だったというような持っていき方である。

次に失敗のほうはどうか。もっとも多いのは稚拙による失敗で，全体の4割以上を占めている。登場者はみな能力低格者で，正常な常識のある者ならしないようなへまをさかんにやる。それが笑いの種になることはユーモアの技術の基本であるが，それが初期に比べてしだいにふえ，大陸時代には全体の6割に達している。こうなると「のらくろ」は単なるユーモア漫画になってしまうのである。兵卒時代には，一生懸命に努力をするが敵のほうが優勢で思うように行かなかったり，機知を用いるがかえって失敗したりするいじらしさがあり，読者の自己投入をうながすのであるが，それらはしだいに減って，単なる道化役者になってしまっている。

表1の下段は成功失敗の要因別に合算したものである。ここでいっそう明らかになっているように，全体としては稚拙失敗をモチーフするものがもっとも多く，つぎが機知，努力，偶然の順になっている。このうち稚拙と偶然とは初期に少なく，後期になるにつれて増していくのに対して，機知と努力とは初期に多くて，後期になるにつれて減っていっている。

このように分析してみると，「のらくろ」は，兵卒時代から将校時代を経て大陸時代へと，そのモチーフが変

化していっているのがわかる。すなわち兵卒時代の「のらくろ」は，機知をもっとも多く用い，また正攻法での努力もするが，ほんらいばかで，おっちょこちょいで，粗骨者という両面をそなえており，その結果，成功と失敗とはほぼあいなかばしている。したがって読者には自己を投入するに足る愛すべきパースナリティの面が優位であるが，しかし他のスーパー・ヒーロー漫画とは違って，エクセントリックな面を持っていて失敗が多く，まずは，愚直な小犬の性格が躍如としているように思われる。

だが将校になると，得意な機知を用いることも減り，まじめに努力することも少なくなって，常規を逸した性格が強調されてくる。そして大陸時代になると，この傾向はいっそういちじるしくなって，無能で，偶然に支配されることが多く，自主的に機知や努力で問題を解決することがほとんどなくなる。もはや少年たちの愛玩する愚直な小犬の面目は消えて，他のイディオットを主役とするナンセンス漫画（「おそ松くん」のたぐい）に近付いてしまう。

愚直な小犬が，成長してたんなる駄犬になる。それが新兵から中隊長に進級するまでの軍隊生活においてであるというのは，作者の軍隊批判の皮肉であったのだろうか。

4 「のらくろ」のテーマ

野良犬黒吉はもともと「兵隊になって大いに活動したいのです」と言って猛犬連隊の衛門にあらわれた小犬である。この最初の1コマのセリフは，彼の入隊の動機を示す上で重要である。すなわち彼は帝国軍人になって尽忠報国の活躍をしたいなどと考えたわけではなく，ただ兵隊になって，漫画的な「活動」をしたいというだけの望みであったにすぎない。だから連隊長の「軍人精神」の講話が始まるとすぐ眠ってしまうし，何かをやらされても「これも忠勇なる軍人のつとめだ」ぐらいの口先の意識で「活動」している（昭6—3月号）。彼が上等兵になって最初の密輸団退治にも「のらくろは常に正義の味方だ」と自分で言っている（昭7—6月号）。「黄金バット」的な自覚に等しい。彼が「一身をなげうっても連隊のためにご奉公します」と言えるようになるのは軍曹になってからで（昭9—6月号），それからは「連隊長どののために一命をすてることはふだんから覚悟をしている」「いのちは軽くつとめは重い」などと言うようになる（昭9—6月）。このあたりから，「のらくろ」は帝国軍人めいてくるのである。

戦闘の場面はこれより前にもしばしば物語られている。砲撃・爆撃のすさまじさ，鉄条網を破壊しての突撃・白兵戦の壮烈さなどが続々とえがかれているが，それらは一つのスペクタクルに過ぎず，ただ少年の血を一時的に沸かせるテクニックであって，この作品のテーマではない。少年たちが戦争ごっこをしながら胸中にみずから描くスリリングな情景を絵にしたというだけのものである。試みにのらくろが活動した実戦の原因を摘記してみよう。

(1) 山猿事変（昭7—1月～5月）——試験飛行中不時着をして連隊長が山猿軍の捕虜となる。その奪還。

(2) ゴリラ事変（昭8—1月）——山猿にたのまれたゴリラ軍が来襲。その撃退。

(3) チンパンジー事変（昭9—12月～昭10—1月）——連隊長の愛刀をチンパンジー軍に奪われる。その奪還。

(4) 蛙事変（昭11—8月）——蛙軍のスパイを捕えたので敵が抗議し，応戦。

(5) 熊事変（昭12—1月）——熊軍に弾薬と軍旗を奪われる。その奪還。

(6) 山猿事変（昭13—1月）——山猿軍が度々の敗戦を根にもって来襲。その撃退。

このように毎年正月の別冊付録ごとに実戦が勃発するのだが，それぞれの戦因は「演習の想定」のようなもので，結局，戦争ごっこの域を出ていない。真の戦争にはもっと深刻な目的があるはずである。それには無関心で，ただ読者を戦争ごっこに参加させ，スリルの要求を満足させているだけである。だからのらくろが軍人精神を体得したようなセリフを吐くようになったり，現実の

非常事態がにおってくる後半になっても，彼は依然としてごっこ遊びに夢中になっている。このことは，彼が士官学校に在学中，裏山に出た怪獣（恐竜のような形）を退治する（昭11—1月）ことによっても知られる。

「のらくろ」の中心テーマはあくまで「兵隊になって活動する」ことであって，ていねいに言えば，小犬が兵隊になったつもりで活動する遊び（make-believe）である。だが彼は猛犬連隊という強そうな名の軍隊の一員に加えられるから，彼の活動はその社会集団の条件に支配され，それに対する適応活動の形をとる。換言すると，自分のいだく要求と，連隊の働きかける場的要求とのコンフリクトの調和ある解決を求めて活動するのである。かかる活動において彼は40%の成功と60%の失敗を喫することは前に見たごとくである。

場的要求の代弁者はブル連隊長である。したがってのらくろの活動は，手柄を立てて連隊長に承認されることの要求に集中している。第2回めの終末が，のらくろの「連隊長殿はきっと僕を勇敢だとほめてくれるぞ，えへん」に対してブル連隊長の「大切な銃をこんなにひんまげてしまってすむと思うかっ。りっぱな手がらを立ててすぐこの不名誉を取りかえさなければ承知せんぞ！」となっているように，各編の結びはつねに連隊長の是認か否認かを明示している。成功したときは，「のらくろでかした。あっぱれであるぞ。」（昭6—9月）のようで，失敗のときは，「……勝手な行動をとったことは軍律上ゆるされぬからぶんなぐるぞ。」と棒で頭をなぐられる（昭6—11月）といったぐあいである。

ほめられると照れ，叱られてもしょげないのらくろだが，作者は彼に優越感を与えるために，しばしば競争の機会を用意している。銃剣術・剣道・射撃などの試合はもとより，サーカスの拳闘に飛び入りをしたり，ハイキングに行ってカニと亀とカブト虫とを競走させたり，軍隊生活とはあまり関係のない脱線ゲームがたびたび挿入される。これまた社会的承認の要求にもとずく適応活動の側面にほかならない。

その中には，頓知くらべ・慰問袋の趣向くらべ・新兵器の発明くらべなど，知的なゲームもある。とくに新兵器の発明は，当時の世上の話題にも多かったことと思うが，のらくろも水陸両用戦車飛行機・時限爆弾・飛行戦車・戦車防禦装置などを発明して敵をなやます。科学的というほどのものではなく，頓知のおもちゃに類するものだが，これらはおもに彼の将校時代に多く，彼の用兵に機知を発揮させるための産物で，やはりこれも彼の優越ぶりを示そうとした作意と思われる。

このようにのらくろは失敗も多いが成功も少くなく，一生懸命に軍隊に適応しようとしている。勲章をもらって階級が進んでいくあたり，立身出世主義のにおいがないでもないが，彼自身にはそのような夢はほとんどなく，いつも現段階にあまんじて現在の適応課題を嗅ぎまわっているという態度である。

ところで，おもしろいのは，彼の兵卒時代に見られる反権威主義の態度である。軍隊という徹底した権威主義の組織にはいって彼は上官を度々侮辱するような活動を演ずる。過失でそうなることもあるが，意図的に直属上官をからかうこともある。一等兵になったばかりの軍旗祭には，師団長そっくりの飾り物でおどろかせ，「師団長が逃げ出すとは諸君滑稽ですなあ」とやる。翌年の軍旗祭には紙芝居を作り，自分と連隊長とを入れかえた筋で連隊長をからかい，「わがはいを侮辱するか」と怒らせる。また翌年は足をけがして連隊長の背に乗せてもらい，馬上悠々と衛門をはいり，「えへへへ，ちょっといい気持ちだなあ」とそりかえる。このたぐいの反権威行動がざっと数えて15回ほどある。のちに上官侮辱と評されたのはこのような点なのだろうが，これは子どもに潜在するいわゆる巨人征服の願望を描いただけの無邪気ないたずらと解すべきであろう。すべて兵隊ごっこの遊びの中でのたわむれなので，作者のアナーキズムが顔を出したとまで気を回す必要はあるまい。

むしろ「のらくろ」の猛犬連隊は，始めから権威主義の組織ではなく想定されているのだと言うほうが妥当である。みんな友だちどうしの兵隊ごっこなのだ。だから登場人物の相互間に憎悪とか敵意とかいったものは少し

もない。みな友情の中で安心してなんでもやってのけている。この作品が直接に愛情の要求を扱っているのは，のらくろの身の上話の所（昭10—7月）ぐらいであるけれども，その他の全体に親和の友情があふれているのが，読者の心をあたためている。

それに「のらくろ」が犬なのである。もっと犬の習性を分析して登場者を性格づけるとおもしろくなったと思われるが，作者はそれを食欲と睡眠欲とにしぼって話題に拾っている。のらくろは焼き鳥を好物としている。そして飽くなき食欲をみたそうとしては失敗する。また彼は，任務を忘れてよく眠る。これは犬らしくはないが，一般に本能的な欲求に弱い動物ということで，読者の共感や劣等視をうながしたのであろう。全編を通じて，食欲による失敗が23回ほど，睡眠による失敗が9回ほど出ている。

さて，のらくろが退役して満洲へ渡る段になると，テーマは一変する。初めは渡満の目的すら自覚しない状態だが，行ってみると地下資源が豊富なことを知り，それからは明確な目的を持って活動するようになる。こうなるとごっこ遊びではなくなり，今までのふざけたムードとは合わなくなっている。

もうひとつ書き添えておきたい。それは「のらくろ」が兵隊ごっこや満洲開発の仕事にいつも専念しているのではなく，その間に，それらの主テーマとは関係のない活動がしばしば挿入されることである。毎年の軍旗祭などにはめをはずしてふざけちらすのは別としても，タコを生捕ったり，タコに吸いつかれて困ったり，飛魚をつかまえて乗ったり，あるいは，子どもを連れて海水浴に行ったり，ハイキングに行ったり，サーカスの見物に行ったりし，大陸時代にも休日だからとてボート遊びをしたりする。このほか上記の脱線ゲームもさかんに挿入される。そのたびに主テーマから離れて，ドタバタ喜劇が演じられる。

ドタバタはこの作品の全体を通じてくりかえされるのだが，それをときに子どもの生活と共通の場面を設定して，そこにも及ぼしているのは，作者が主テーマの展開の中にトピックを見いだしかねたためとも思われる。しかしこのことは作品の初めからたび多く見られるので，むしろこれは，のらくろを猛犬連隊の中に閉じこめないで，読者といっしょに遊ばせようとする作者の意図の現われだと解すべきであろう。

第1回の入営志願の巻でも，試みに炊事当番をやらされるが，料理をしようとした魚がみんな池の中へ逃げてしまう。ワニが現われて魚を食い，のらくろも呑まれてしまう。ところがワニの腹に穴をあけてぬけ出し，魚を取り返すという手柄話の段は，空想の冒険談であって，それと入営を許されるという劇的現実とが統合されてしまっている。このように初めから空想と現実との未分化な構想で始まっており，したがった劇的現実から離れた世界への移行はまったく自由なのである。

5 「のらくろ」のモラール

のらくろが入営した猛犬連隊は，彼のごっこ遊びの場として構想された仮空の軍隊ではあるが，その下敷には日本の陸軍が置かれていることは否めない。隊内の教育には軍人勅諭が採用され，昭和7年5月には「御国のため名誉の戦死をとげ」た爆弾三勇士のことも出てくる。しかし初期ののらくろは，そういう軍人精神からは浮きあがっている。たとえば彼は「すべからく大胆になれ」と書いてある本を読んで発奮するが，仲間におどかされるとたちまちちぢみあがる（昭8—11月）。外出の前に中隊長から質素を教わり，「自分は軍人でありますからぜいたくはしないであります。」と誓っておきながら，高級料理店へ行って豚の上肉をあつらえ，見つかって叱られても，ぬけ出して特別上等豚饅頭を食いに行っている（昭9—3月）。いざ戦闘となると「忠勇無比」の活動をするが，裏面にはこのように軍人としての陶冶性のない野犬の野放途さを発揮している。彼は下敷になっている日本陸軍の下士官にはなれないし，なる気もないのである。

ところが前述のように昭和10年あたりから，「非常時」ということばも見え，彼は帝国軍人の理想像を身につけ

はじめる。彼が少尉の時，連隊長が大和魂とはどんな形のものかという問題を提起する。おりから火薬庫の土手が火事になり，のらくろが炎の中にとびこんで消しとめる。大やけどを負うが，「あの姿こそ大和魂を形であらわしたもの」ということになる（昭11—5月）。中尉の時，ハンブルと二人で海底の宝物を捜しにいく。初めは競争をするが，難にあってたがいに助けあう。連隊長はそれをほめ「協力一致の心掛こそ我々が一刻も忘れてはならぬことだ」とさとす（昭12—8月）。大尉の時，度胸だめしの試胆会をやるが，のらくろは次つぎにトリックに引っかかって笑われる。連隊長は，笑われるのがいやで手を出さないのは勇気がないのだ，のらくろには度胸がある，と教える(昭13—8月)。

こうして「のらくろ」には修身教育の徳目の解説みたいなものがまじってきて，のんきな兵隊ごっこのイメージと現実の戦時体制の緊張とが混線していっている。

大陸時代になると，「偉大なる日本の使命」，「平和建設」，「興亜の力」，「ぜいたくは敵」，「国債を買おう」などのセリフがとび出し，「のらくろ」をまったく国策のＰＲに使ってしまっている。漫画も国策に協力するよう要請される時期だったから，やむをえないことではあるが。

6　「のらくろ」の語りくち

「のらくろ」作品が物語を語るのにどんなテクニックを用いているか。そのおもな特色を拾ってみる。

第1に，のらくろはしばしば口上（こうじょう。興行物で襲名披露や興行物の仕組などを述べること）を述べるのが目立つ。襲名披露に当たるものは，階級の昇ったことを申告する場合で，彼は読者のほうに向かって，「御挨拶致します。のらくろ少尉は昭和12年1月付をもって中尉に進級致しました。これを光栄として今年はますます軍務にはげみます。」（昭12年—1月）のように挨拶をする。また興行物の仕組には，たとえば「のらくろ軍事探偵」の冒頭で，連隊長・中隊長・のらくろ・デカの4名が，1ページにわたって事変の経緯を解説する形式を用いている（昭10年—1月付録）のが相当する。

これらには「全国の愛読者諸君，明けましておめでとうございます。」のようなただの挨拶もあり，日ごろの「御声援のおかげ」を感謝し，また「どうぞあいかわらずかわいがっていただきたい」とひいきを懇願するなどのことばも出る。この種のテクニックは，この作品の独創ではないが，努めて読者に接近しようとする態度がいちじるしいことを示している。

第2に，モノローグ（ひとりごと）的なセリフが多いのが目立つ。中には前の口上とのあいの子もある。事がうまくいったあと，「諸君！　どうです。僕の頭のよいのには驚いたでしょう。」と読者に呼びかける（昭6—6月）などがその例である。

モノローグは，ほんらい登場者の内面過程を描くのに用いられるテクニックであって，そのように用いられている場合もある（昭14—5月の冒頭）が，多くは事態の説明に用いられている。⑭たとえば「軍用パンと見せかけて，中身はのらくろ二等卒，あばよこの自動車は分捕りだ。⑮これは思いがけない手柄をしたぞ。急げや急げ。⑯だが運転を知らないでむちゃくちゃ走りだ。⑰走るには走るが止めかたがわからない。⑱沼でも田んぼでもおかまいなしだ。勇敢に進めずぶずぶ進め。⑲ひゃあ危いな。一体この自動車はどこまで進むんだろう(昭6——10月）といった調子。このコマはこびで現代の作家がセリフを入れるなら，⑭あばよ。⑮ビューッ。⑯ガタガタ。⑰だれか止めてくれえ。⑱ズブズブ。⑲おっと危ない。——とでもいったことになるだろう。絵がちゃんとかいてあって，その上にセリフで絵を解説しているのである。この点で「のらくろ」は，絵と説明文との両方で物語を語る段階の作品からあまり前進していない。セリフのように吹き出しの中に入れてあるが，じつは自分で解説をさせているのである。後期にはナレーション付きの作品も出てきている（昭13—8月，昭14—1月）。

軍隊が舞台だから，大勢の登場者が出るモッブ・シーンが多いのだが，そのような場面でも口ぐちにセリフを言わせている。一人で代表させてもすむ場合でも，いく

つもの吹き出しが並ぶ。だから物語の展開はのろく，それだけにわかりやすいとも言える。例えば剣道試合の1編は16コマで語られるが，のらくろが試合に出るまでに9コマを費している。その間に吹き出しの数は合計27で，そのうち五つはいっているのが2コマある。試みに字数を計算してみると，1コマに平均47字がはいっている)。手塚治虫の「火の鳥」だと，もっと漢字の率が少なくて1コマ平均約15字である。最近は読む漫画から見る漫画に移行していることがわかる。)さて試合が始まると，4コマで片が付いてしまう。そのあとの3コマはまとめの話で，主題の4コマに対して前後に12コマのおしゃべりが付いているという具合である(昭8—12月)。のんびりした語りかたで，主題の展開に直接必要でないセリフが，モノローグもしくは集団的独語（対話をするのが目的ではなく，仲間がいることが刺激になって発するモノローグ）の形で，書きつづけられているのである。

第3は，上のことと関連して，セリフがなまのままではなく，文章体であることが目立っている。猛犬連隊に狼が銃剣術の試合にくる。⑭「わがはいは連隊長である。」「おれは猛狼無敵之助だ。他流試合に来たのだ。」⑭「お手やわらかに願う。」「覚悟しろ。」⑮「不意打ちとは卑怯だ。待て。」「戦場に待ったもへちまもあるものか。」……⑱……「やあやあ言わせておけば悪口雑言。われこそはのらくろ二等卒なりい。」⑲「おやっ，目かくしをした変な奴。」「目が見えないからめくらめっぽうなりい。」⑳「危ない。おい無茶するな。」「戦場で無茶もへちまもあるものか。」㉑……「連隊長殿のかあたあきいっ。」(昭6—9月)。

まさに講談の口調である。セリフの文体だけではなく，発想そのものが古めかしく，連隊長の子供を水死させたと早合点して，「この責任は切腹しておわびいたします。」と，剣を腹に当て「死ぬる命は惜しくはないが，思えばはかない浮き世じゃなあ。」(昭10—8月))という具合で，昭和9年の正月には連隊総出で忠臣蔵の芝居を演じてみせてくれる。

第4は，落語的なテクニック。まずセリフの中にはしばしば地口（しゃれ）がとびだす。上掲の「めくらめっぽう」もそうだし，そのほか，日本刀を二本に改造して二本刀，太鼓のバチでたたかれて神罰，中尉の肩章をまちがえて不チュウイといったことばの遊びが多い。

話の仕組が落語的なのは，前に述べた稚拙失敗や機知失敗の話根をふくむ場合がおおかたである。それを「落ち」に仕組んだ例をひろってみる。模型飛行機を標的にして歩兵砲の実弾を射撃する。兵営から黒煙が立ちのぼるので砲弾から火事になったとさわぐ。その煙はごみを焼いているのであった（昭11—11月）のような間抜け落ち。連隊長が飛行機をいじっているうちに飛び上ってしまう。のらくろが機知でこれを救う。そして連隊長を叱りつける（昭9—8月）のようなさかさ落ち。耐熱行軍で飲み水に窮する。のらくろが清水の滝を見つける。それは岩の上でデカのやった小便だった（昭11—8月）の尾籠落ち。将校3人でハイキングに行く。途中いろいろあって関所の趾に来ると，工事中・通行止の立札が立っている。「昔も今も関所はすらすら通れませんね」で終わる（昭12—6月）考え落ち。このような例は枚挙にいとまがないほどである。

第5には，描画上の特色を一括しておこう。まずのらくろの容姿だが，彼の顔付が後のように図案化されてくるのは下士官に進級するころからであって，始めて登場したときはもっと口のまわりの白い部分が小さく，耳が長く，からだ全体も痩せて小さくて，いかにも野良犬のように貧弱な格好だった。それが2年ほどのちにはからだも太り，首が短くなるとともに，人間のように後脚だけで立って行動するようになっている。

セリフを囲む吹き出しの線を丸くかくのは初めからの特色だが，その吹き口は初めは尖っていた。のちにはホースの切り口のように尖らなくなる。このことは走行を示す土煙の描きかたにも現われている。しかもこれは空中での移動—飛行機が飛ぶような場合にも用いられ，ただの土煙ではなくなってくる。このような技術の定着も下士官時代にはいってからで，兵卒時代をかきつづけるうちに，登場者の擬人化と図案化とが進んだものと見ら

れる。

また主人公だけを黒で塗りつぶし，ほかに一ぴきも黒犬を出していない。この技法は後の「凸凹黒兵衛」にも引きつがれる。主人公を際立せるための着意であろう。

コマは普通1ページを六つに割り，各コマに順序を示す番号が打ってある。しかし昭和7年4月からは，横の線を太くして，縦に続くのではないことを示している。こうすればコマ番号はいらないのだが，これを最物まで墨守しているのはせっかくの名案に対してむだなことだった。（手塚治虫の「鉄腕アトム」では，コマの切り方を工夫して縦には読みつづけられないようにし，コマ番号を入れていない。）これにたよって読みすすめるのはスピード感の妨げとなるのだが，そのような配慮はまだ必要がなかったのであろう。

だが5.5センチ平方の四角いコマを場面の1視野に当てるだけでなく，ときに横に2コマ，縦に3コマを合わせ，あるいは1ページを1コマに用いるいわゆるワイドの視野を開発したのは，この作者だといわれる。（のちにはコマの大きさをもっと小さく，あるいは大小自由に混成する技術も生まれてくるが，この作品では5.5センチ平方の大きさが単位になっている。）ところが，場面がワイドになっても，視界の深さは固定している。遠近さまざまなレンズが開発される以前の映画のように，登場者の行動はすべて左右・上下に限られていて，遠近の方向には動かない。したがって演劇の舞台と同じで，観客はつねに同じ焦点距離で人物を見ることになる。換言すると，読者はつねに身長2～3センチののらくろの全身像を見ることになって，彼の姿が遠景の中に小さくなっていったり，あるいは近景にクローズアップされるというようなことはない。（このような演劇的表現方式から，今日のような映画的表現形式に進めたのは戦後の手塚治虫である。）

7 むすび

「のらくろの漫画全集」の序で，作者は，「のらくろは，子犬の時に捨てられた身寄り頼りのない孤児ののら犬ですから……どんな逆境に育っても，自分で自分を見限ったりするものではない，ということを，私はこの漫画の中に盛り込みたいと思っていました」と書いている。また彼の義兄に当たる小林秀雄は後記に，彼から「のらくろというのは，実は，兄貴，ありゃ，みんな俺の事を書いたものだ」という述懐を聞いたと書いている。作者は「家庭にめぐまれぬ，苦労の多い，孤独な少年期を過した」男なのだそうだ。漫画のような作品にも，かきあげてからかえりみると，自我が投映されていることに気付くとは，貴重なことばだと思う。

だがこの作品がかくも評判になり長期にわたって持続しえたのには，講談社の雑誌の編集方針とくに少年倶楽部の担当編集者の「飼育」方針が大きく影響していることは見のがせないであろう。「のらくろ」が発足したころの少年倶楽部は，いわゆる大衆児童文学を開発して，質実剛健・国威宣揚を旗じるしに奔放な空想物語を掲載していた。佐藤忠男のいう「少年の理想主義」がもっともはなやかに展開していた時期である。その渦中に投入される漫画の役割は，全体から規制されたはずである。思うに，全体の教化性の波にゆられながら，その中に1点の笑いを促すことであったろう。しかし教化性に同調していては笑いは生じない。どうしても脱線させる必要がある。だが脱線のどたばた騒ぎばかりでは教化性から遠ざかる。そこで正規の路線にもどる機知や努力が要求される。こうして稚拙と機知との矛盾した性格が，のらくろに付与されることになったのであろう。

その後，日中戦争の前後から，『少年倶楽部』は軍国主義の編集態勢に転ずる。のらくろには住みにくい世界になって，稚拙でしくじるか，偶然の成功待ちという消極的な性格に変わっていった。もはや空想の遊びの世界で笑ってはおれない，国策をなまかじりして試行錯誤をくりかえす性格に同調していった。したがって笑いが少くなった。笑いは上記のように矛盾する性格から生ずるのである。

同じ雑誌で活躍した「冒険ダン吉」は，「のらくろ」より遅れて，軍国主義への編集の転換期にスタートを切

っている。この転換より前にすでに前半生を終わり，なおこの新しい環境に適応していくのは「のらくろ」にはかなりの重荷であったに違いない。

にもかかわらず「のらくろ」は10年余の生命を保った。その苦しい後半生に生きぬいたばかりでなく，児童漫画の技術にさまざまの新機軸を開発しつづけた功績は大きい。これらは戦後の新興漫画の噴進筒のはたらきをするのである。

参 考 文 献

○田河水泡　のらくろ漫画全集　講談社　昭42
○小林秀雄　漫画　同上収載
○手塚治虫　"のらくろ" の魅力　同上収載
○加藤謙一　"のらくろ" 覚えがき　同上収載
○福田清人　児童雑誌変遷史　少年倶楽部名作選1収載　講談社　昭41
○佐藤忠男　「少年倶楽部」の意義　同上2収載　講談社　昭41
○鳥越信　少年倶楽部の短編作品　同上3収載　講談社　昭41
○佐藤忠男　漫画と付録　同上収載
○作田啓一他　マンガの主人公　至誠堂　昭40

SUMMARY

"Norakuro", one of the most popular comics for children, first appeared in the January issue of "Shōnen-Kurabu" (a boy's magazine) 1931, and lasted for more than ten years in pre-war Japan.

"Norakuro" is the name of a stray black dog. At the beginning of the story, he drops in at the gate of a fictional dog's regiment, and is allowed to be enlisted in the army. His energetic, hasty and clumsy nature causes various accidents in the army life.

He often insults his seniors and shows some anti-authoritalianism. He is promoted year by year, but the higher his rank, the more contradictions appear between his rank and ignorant personality. In this way the story bogs down.

After the time when he becomes an officer, real Manchurian incidents enter the story. He changes into patriotic militarist. Reality and fantasy are mixed, so innocent laughs fade away.

Mr. Tagawa, the cartoonist, seems to have endeavoured to be in line with the national policy, but the military board of information became dissatisfied and prohibited its continuation, in 1941.

大学生に行なった速読訓練の効果 (1)*

東京教育大学

佐　藤　泰　正**

§1. 目　的

本研究は成人の読書力開発に関する研究の一環として，大学生を対象に行なった速読訓練の効果に関する研究を報告する。

ところで，速読訓練の方法としてはこれまで読書練習機のような機械を利用して行なうものと，時間をはかって読書材料を読ませる時間測定読書に大別される。本研究はその両者を総合的に検討しようとするものであるが，まずはじめに後者の方法，すなわち読書材料を時間をはかって読ませ，速読訓練を行なう方法を用いた。

具体的には，大学生を対象に毎日一定時間（約30分）ずつ速読の練習を行ない，4週間の効果をみようとするものである。読ませる読材料としては，フィクションものとノンフィクションもの二種が考えられるが，本研究では後者のノンフィクションをあたえることにした。

§2. 被　験　者

被験者は東京都内の大学生である。これを大きく，速読の訓練を行なう実験群と，速読訓練を行なわない統制群にわけた。なお，被験者の所属する大学は，立正女子短期大学，玉川大学，順天堂大学，東京教育大学である。被験者のうちわけは実験群31名，うち男10名，女21名，統制群27名，うち男16名，女11名である。

§3. 実験の計画と準備

上述したように，大学生を対象に時間をはかりながら本を読ませ速読の効果をみるという目的のもとに実験計画をたてることにした。そこで実験順序は，まず前テスト（Pre-test）を行ない，訓練前の読速度を求め，次いで訓練を行ない，訓練終了後に後テスト（Post-test）を行ない，速読の進歩をみることにした。それらと平行して，各被験者（実験群のみ）について，速読訓練との関係をみるためいろいろの調査を行なうことにした。つぎにその各々についてもう少し詳しくのべよう。

1. 前テストと後テスト

速読訓練の効果をみるためのテストであるので，前テストと後テストは同種のものを必要とする。そとでテスト作成にあたり，一つは単行本の一定の節を前後にわけ，前半を前テストに，後半を後テストに用いることにした。そして，この種のものを二種類作り，それぞれが前半と後半にわかれる。具体的には講談社発行単行本羽仁説子著「青春をどう生きるか」のうち「醜より美へ」と「個性という名のいのち」という二つの節を選び，それぞれ前半・後半にわけた。それから，前テストも後テストもただ文章を読ませて時間をはかるだけでなく，理解テストの問題を作った。

訓練に用いられる文章がノンフィクションであるので，前・後テストにノンフィクションものを選んだが，他方，いわゆる普通の速読テストを作って，訓練の前後に行なうことにした。これはいわゆる読書力テストの速読の部にあるようなものである。

---

* Effect of training rate of reading in college students.

** SATO, Yasumasa (Tokyo University of Education)

理解テストの1例

青春をどう生きるか　　醜より美へ

1　若い人達が迷うことを著者はどのように見ているか。
(1)みにくい　(2)美しい　(3)たくましい　(4)かなしい

2　著者が選んだ子犬は，きようだいの中では，いちばんどのような犬だったか
(1)大きかった　(2)小さかった　(3)みにくかった　(4)美しかった

3　成長の途上にあるものは，どのように見えるといっているか
(1)みにくい　(2)美しい　(3)たくましい　(4)かなしい

速読テストの形式

つぎの例題を見なさいみじかい，文があって，そのひだりに4つのことばがならべてあります。文をはやくよんで，そのこたえとして，1ばんよくあてはまることばを1つだけえらんで，そのことばの番号をマルでかこむのです。

1　なつのお日さまは，大そうあつい。子どもは水およぎをする。あつい日のあるのは，
1は　る　②な　つ　3あ　き　4ふ　ゆ

2　おとうさんは，ふろをたくために，ものおきからあきばこをとり出して，なたでたたいてこわしていました。ふろをたいたのは
1紙くず　2木　3石たん　4れんたん

つぎに同じような問題がたくさんあります。まちがえないように，できるだけ早くやりなさい。

2. 速読訓練用の読材料

速読訓練の読材料として，ノンフィクションものを用いることはすでにのべた。どのようなものを選ぶかということについては，後になって読書練習機による実験を行なうのでそれにも利用できることなどを考慮し，岩波新書のなかから選ぶことにした。実際に単行本のなかから練習用の文章を選ぶ基準として，つぎのいくつかをあげた。①字数は5000～15000字位，②理解テストの問題が作り易い，③まとまっている文章であること，④見出しなどが少なく，文章を全部目を通さないと読めないもの，⑤一行当りの字数が大体近いこと，絵のないところ。

実験は4週（20日）間を予定していたので，そのうち2日は前テストと後テストにとられるので，正味18日の訓練ができることが必要であった。このために下記の18の文章を選んだ。練習の順序も以下のようである。できるだけ興味深く面白そうで抵抗の少ないのをはじめの方にもってきた。

井伏鱒二「川釣り」から釣魚記(4673字)　釣魚余談(3272字)私の膝小僧(4298字)　白毛(9461字)　掛けもち(12191字)

松田道雄著「私の幼児教育論」から保育園をよくするために(10789字)　ルソーと今日の幼児教育(10353字)　幼児にとって道徳教育とは何か(10288字)

清水幾太郎編「私の読書法」から主観主義的読書法(4381字)　1日1万ページ(5295字)　両棲類的読書法(5420字)　読書遍歴は独り旅で(5397字)　読書浪人(6412字)

野村謙二著「人間シュヴァイツェル」から患者の労働(4683字)　黒人患者の診療(6838字)　ライ村(6230字)　黒人の風習(4806字)　サンスーシーの人に(6217字)

つぎは文章を読ませたあと理解を調べるためのテストの作成にかかる。これは正しく読んでいるかどうかを調べるもので，それほど難かしいことは要求しない。全部できなくてもよいので，一通り読めば大体わかる問題にした。〔具体例省略〕

3. 付帯調査等

これらと併行して，速読訓練の効果との関係をみるために次の付帯調査を行なった。①読書力検査(村石昭三・佐藤泰正著　読書力診断検査中学校用　日本文化科学社)　②性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）　③その他視力・聴力・訓練期間全体を通じての内省などを調べる個人調査表。

そのほか，毎日の読速度変化を被験者自身につけさせる進歩図表や毎日の内省を記録してもらう用紙も準備した。〔具体例省略〕

§4. 実験の実施

実験は実験群と統制群それぞれ別々に教示などを行なった。

実験群への教示は次のようである。

「これから週5日4週間にわたって20回，速読の訓練を行ないます。これまでの研究では，被験者はかなり本を読む速度が速くなっています。多分，あなたもこの訓練を終ったときには訓練前にくらべて進歩があるでしょう。

訓練は毎日30分間位です。指定した箇所を読んでもら

います。あとで内容についての質問がありますが，これは，ただ時間的に速く読むだけでは駄目だからです。しかし大雑把に内容をつかんでいるかをみるので，こまかいことを注意して読んでないとわからない問題はありません。普通に読んでいればわかる簡単なものです。また，このテストに満点をとれなくてもかまいません。70%位できれば合格です。

今日は訓練をはじめる前にあなたの現在の読速度をはかっておきましょう。そうすれば，訓練の終了後にどれほど進歩したかをしるめやすになります。」

以上の教示ののち，①前テストA，②前テストB，③前テスト速読テストを行なう。

前テストAは前述したように羽仁説子著「青春をどう生きるか」のうち“醜より美へ”のはじめから18ページ11行目までで，読ませる時の教示は「ふだんこの種の本を読むときと同じ速さで読んで下さい。あとで内容について質問がありますがこまかいことを聞くのではありません。文章を大雑把に理解しているかをみるもので，こまかい質問はありません。70点位とれれば満点です」という。その後，本を読ませ，時間を測定し，理解テストを行なう。

続いて，前テストBを行なうが，これも同じ本の“個性という名のいのち”という章のはじめから56ページ11行目まで読ませる。教示その他はAの場合と同様である。後に理解テストを行なう。

さらに前テストの三番目，速読テストを行なうのであるが，これはできるだけ速く間違えないようにといって，練習をやらせてからテストを行なう。

3つのテスト終了後，つぎの教示をあたえた。「訓練は次回から行ないますが，今日は速読法の基礎になる点について読んでもらいます」といって，つぎの点を強調している原稿を読ませた。すなわち，訓練中①速く読もうという態度で読む　②黙読が音読よりはやいこと　③眼球の停留数を少なくし，一停留で多く把握するようにする　④行間運動に時間をかけない，逆行運動をできるだけなくす　⑤指で指したり，頭を動かしたりして読まない　⑥読書は集中するのがよい。

以上で第1日は終り，2日目から訓練にはいる。

第2日目の教示はつぎの通りである。

「今日から訓練にはいります。ふだん本を読んでいるときと同じように読めばよいのですが，少しでも速く読もうという気持ちで読んで下さい。速読法の基本の一つは本を速く読もうとする態度が必要だからです。」

教示の後，2日目の訓練材料を読ませ，時間をはかり，理解テストを行ない，結果はチャートに自身で記入させる。さらに内省をきいておく。

18日間18単位の練習が終ったのちに20日目に後テストにはいるわけであるが，一番はじめの日に行なったテストの続きをやってもらいますという教示をあたえて，後テスト種類を行なう。すなわち，後テストA「醜より美へ」ののこりを読ませ，時間測定と理解テストを行なう。つづいて，後テストB「個性という名のいのち」ののこりを読ませ，時間測定と理解テストを行なう。最後に後テストの3番目速読テストを行なう。

以上のようにして，前テストと後テストの読速度の差を実験群とコントロール群について求めたのが以下の結果の一部である。

統制群への教示

「私どもは速読訓練の実験を行なっています。この実験には速読の訓練をするグループと訓練をしないグループが必要です。皆さんは訓練をしないグループになっていただきます。

仕事は本を読んでもらいますが，ふだん読んでいるときと同じ速さで読んで下さい。あとで内容について質問がありますが，こまかいことを聞くのではありません。文章を大雑把に理解しているかをみるものでこまかい質問はありません。70%位できれば満点です。では，読んでもらいます」といって，前テストA，を読ませ，読み終ったところで時間をはかり，理解テストを行なう。同様にして，前テストBを行なう。つぎに前テストの速読テストを行なうのであるがこれは，できるだけ速く読ま

せる。練習をやらせてからテストにはいる。

以上の3つの前テストが終ったら，「訓練をするグループは4週間訓練を行なっていますが，皆さんは訓練をしないグループですから，4週間後にもう一度やっていただきます」といって，その日は終わる。

そして，4週間後に後テストをテストA・テストB・速読テストの種類について行なう。

§5.結　果

以上のようにして行なった実験の結果はつぎのようになる。本報告では実験結果の一部のみを報告し，残りは次回にまわす。

まず，実験群と統制群について，前テストと後テストの比較を行なってみた。

Book テストA（醜より美へ）の結果は第1表のようになる。これによると，実験群の毎分読字数は訓練前631字であったものが，訓練後には916字になった。これに対し，統制群は訓練前623字だったものが，訓練後は615字になった。すなわち，読字数の増加は実験群285字に対し，統制群は−8字で，明らかに実験群の進歩がみられる。有意差検定の結果も実験群のみが有意差がみられ，統制群は有意差がみられなかった。

第1表　Book Test A　毎分読字数

		練習前	練習後	進歩字数	t
実験群	M	631	916	285	
N＝31	S.D	168	335		4.17
統制群	M	623	615	−8	0.08
N＝27	S.D	291	385		

Book テストB（個性という名のいのち）の結果は第2表のようになる。これによると，実験群の毎分読字数は訓練前625字であったのが，訓練後は930字になった。これに対し，統制群は訓練前527字であったものが，訓練後は600字になった。すなわち，読字数の増加は実験群305字に対し，統制群73字になり，明らかに実験群の進歩が著しい。有意差検定の結果も実験群のみが有意差がみられた。

第2表　Book Test B　毎分読字数

		練習前	練習後	進歩字数	t
実験群	M	625	930	305	5.093
N＝31	S.D	164	284		
統制群	M	527	600	73	1.187
N＝27	S.D	145	278		

つぎに，速読テストの結果は第3表のようになる。これによると，所要時間は実験群は訓練前280秒だったものが，訓練後は177秒となった。これに対して，統制群は訓練前280秒だったものが，訓練後257秒となる。進歩秒数は実験群103秒に対し，統制群は23秒であり，明らかに実験群の進歩が著しい。有意差検定の結果も実験群のみが有意差がみられた。

第3表　Speed Test　所要時間（秒）

		練習前	練習後	進歩字数	t
実験群	M	280	177	103	3.888
N＝31	S.D.	137	48		
統制群	M	280	258	23	1.070
N＝27	S.D.	83	70		

(To be continued)

漢字における読字の困難点に関する発達的研究（I）*

東京教育大学

福　沢　周　亮**

目　的

漢字の読みを困難にしている要因は何なのか，先の報告(福沢)と関連して，それを発達的に検討しようとするのが本稿の目的である。

単に，同一漢字を異なる学年に示した読みの調査では，もちろんそれなりの意味はあるにしても，直接，困難点を引き出すことは難しい。現に，その漢字の示し方で，結果が異なってくるのである。(福沢，1963)。

そこで先の報告(福沢1968(b))と同様，読字を困難にしていると思われる要因をとり出し，それらを組み合わせて条件を作った。そして，その条件に合った漢字を選んで対象とすることによって，目的を達しようとしたのである。

方　法

被験者：栃木県足利市立Y小学校の3年生136人（男子: 65，女子: 71），5年生126人（男子: 64，女子: 62），および栃木県足利市立K中学校の1年生134人（男子：71，女子：63），合計396人（男子：200，女子：196）。

調査した時：1967年10月

対象になった漢字：つぎの3要因を組み合わせて，Table 1のような8条件をつくり，それに合わせてTable 2の漢字を選んだ。

Table　1　要因とその組み合わせ

字　画	頻　度	こ と ば	条　件
少	小（当）	f	A
少	大（教）	f	B
少	小（当）	uf	C
少	大（教）	uf	D
多	小（当）	f	E
多	大（教）	f	F
多	小（当）	uf	G
多	大（教）	uf	H

要因――(1)字画：対象にする漢字の字画の多少で，字の複雑さを現わしている。本研究では，8画以下（「少」）と9画以上（「多」）とに分けた。

(2)頻度：対象になる漢字の教科書などにおける出現程度で，本研究では，頻度が「小」の漢字として当用漢字（「当」）を，「大」の漢字として教育漢字（「教」）を選んだ。

(3)ことば：対象になる漢字が用いられることばについての熟知程度で，「f」は，familiar word（熟知語）を現わし，「uf」は，その反対（unfamiliar）を現わしている。ことばは，「教育基本語彙」(阪本1958)から採り，「f」と「uf」は，その配当段階から決めた。ちなみに，福沢による熟知語彙の検討では，その熟知語彙表を構成していることばの大部分が，「教育基本語彙」の小学校低学年配当の語彙と一致する，と指摘されている（福沢1968(a)）。

---

* Developmental study on the factors of the difficulty in reading "kanji" (ideographs in Japan) (I)

** FUKUZAWA, Shūsuke (Tokyo University of Education)

もちろんこの場合，漢字を示すのに，本研究のように，ことばの中へ入れてしまう方法もあれば，一字ずつ出す方法もあるわけで，どのような示し方をするかということは，「漢字の読み」をどのように考えるかということへ通じる問題で，大変重要な問題である。

本研究では，漢字は，たとえ単独で出されていても，真空の中にあるのではなく，何らかの意味で，文脈の中にある（例えば，看板に一つの字が書いてある場合，それは当然その看板の持っている条件から規定されてくるのであり，その意味での文脈の中にあると言える），と考え，ことばに入れて出す方法，つまり推読を認める方法を採った。

Table 2 選択した漢字とことば

条件	漢字	漢字の段階	漢字の画数	ことば	ことばの段階
A	丸	（当用漢字）	3	まるた	A1
	尺		4	しゃくはち	A2
	幻		4	げんとう	A1
	冗		4	じょうだん	A1
	片		4	かたがわ	A2
	甘		5	あまざけ	A2
	幼		5	ようちえん	A2
	尻		5	しりとり	A2
	乱		7	らんぼう	A1
	昔		8	むかしばなし	A2
B	川	1	3	かわぞこ	A2
	火	1	4	ひばち	A1
	日	1	4	ひでり	A2
	心	2	4	しんぱい	A1
	元	2	4	げんき	A1
	石	1	5	いしけり	A2
	母	2	5	ははおや	A2
	正	1	5	しょうがつ	A1
	作	2	7	さくぶん	A1
	国	2	8	こくご	A1
C	丸	（当用漢字）	3	まるまげ	C4
	尺		4	しゃくどり	C3
	幻		4	げんめつ	C2
	冗		4	じょうひ	C2
	片		4	かたいじ	C2
	甘		5	あまくち	C4
	幼		5	ようめい	C4
	尻		5	しりめ	C4
	乱		7	らんりつ	C2
	昔		8	むかしかたぎ	C4
D	川	1	3	かわどこ	C2
	火	1	4	ひぶた	C2
	日	1	4	ひやとい	C1
	心	2	4	しんぷく	C1
	元	2	4	げんそ	C2
	石	1	5	いしだたみ	C2
	母	2	5	ははかた	C2
	正	1	5	しょうふだ	C1
	作	2	7	さくふう	C2
	国	2	8	こくさく	C1
E	威	（当用漢字）	9	いせい	A2
	映		9	えいが	A1
	封		9	ふうとう	A1
	座		10	ざしき	A1
	掛		11	かけぶとん	A2
	頂		11	ちょうじょう	A1
	粘		11	ねんど	A1
	腕		12	うでぐみ	A2
	晩		12	ばんがた	A2
	漫		14	まんが	A1
F	海	2	9	うみべ	A2
	草	2	9	くさはら	A2
	秋	2	9	あきばれ	A2
	時	2	10	じかん	A1
	黒	2	11	くろくも	A2
	鳥	2	11	とりごや	A2
	組	2	11	くみたて	A2
	朝	2	12	あさおき	A2
	道	2	12	みちばた	A2
	読	2	14	よみかた	A1
G	威	（当用漢字）	9	いしん	C4
	映		9	えいぞう	C2
	封		9	ふうにゅう	C4
	座		10	ざぜん	C2
	掛		11	かけはし	C3
	頂		11	ちょうかく	C4
	粘		11	ねんまく	C2
	腕		12	うでききき	C3
	晩		12	ばんがく	C4
	漫		14	まんぽ	C4
H	海	2	9	うみなり	C4
	草	2	9	くさわけ	C4

条件	漢字	漢字の段階	漢字の画数	ことば	ことばの段階
H	秋	2	9	あきさく	C2
	時	2	10	じせい	C3
	黒	2	11	くろじ	C3
	鳥	2	11	とりめ	C4
	組	2	11	くみきょく	C4
	朝	2	12	あさまだき	C4
	道	2	12	みちすがら	C2
	読	2	14	よみきり	C2

注）「漢字の段階」は，文部省による配当段階で学年を示す．
「ことばの段階」は，教育基本語彙（阪本一郎）による配当段階．

Table 2に見るように，選択した漢字は40（当用漢字20，教育漢字20），選択したことばは80で，AとC，BとD，EとG，FとHは，それぞれ同じ漢字を使用している。

調査方法：同じ漢字を二つのことばに使っているため，調査は2回に分け，1回目にB・C・E・Hを，2回目にA・D・F・Gを行なった。いずれも，つぎのような形で出し，漢字に読みがなをつけさせたのである。両回の間に10日をおき，第1回の影響が第2回に及ばないようにした。

例：川ぞこ

結果および考察

本稿では，目的に従い発達的な観点からのみ扱う。5年生の個々の結果については，先の報告(福沢1968(b))を参照されたい。3年生と中学1年生の個々の結果については，稿をあらためて報告する予定である。

1. 学年別，条件別の結果および全体の分散分析

Table 3として，学年別，条件別の結果を示す。得点は，正答1つを1点として出した。従って，満点は，両回とも40点，条件別では，いずれも10点が満点である。※

まず，全体として，Table 4のように分散分析を行なった(岩原，1957)。

条件についても，個体についても，有意な差が認められる。

Table 3　学年別，条件別の結果

学年	3（136人）			5（126人）			中1（134人）		
条件	得点	平均	標準偏差	得点	平均	標準偏差	得点	平均	標準偏差
A	318	2.34	1.13	600	4.76	2.11	827	6.17	1.97
B	1258	9.25	1.21	1189	9.44	0.79	1287	9.60	0.10
C	144	1.06	0.82	427	3.39	2.10	694	5.18	2.06
D	975	7.17	1.92	1006	7.98	1.56	1168	8.72	1.40
E	120	0.88	1.12	513	4.07	2.45	865	6.46	2.88
F	1267	9.32	1.07	1200	9.52	0.76	1291	9.63	0.82
G	52	0.38	0.89	406	3.22	2.19	763	5.69	2.79
H	1062	7.81	1.88	1071	8.50	1.35	1199	8.95	1.17

注）得点は，それぞれの学年全員の合計である。

Table 4　全体の分散分析

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
条件	22582.676	8−1=7	3226.097	1274.03**
個体	8411.719	396−1=395	21.295	8.41**
残差	7001.574	(7)(395)=2765	2.532	
全体	37995.969	(8)(396)−1 =3167		

** $P < .01$

さて，Table 3から，学年と共に読字率が良くなっていることは認められよう。これは，意図的，無意図的の関係なく，学習量が増加していくことを考えれば当然と言える。が，それにしても，BとかFとかでは，3年生で満点に近くなってしまっていて，その後の変化が認められないようである（Table 5参照）。つまり，要因の組み合わせ方によっては，低学年でも，かなり読める漢字があることを示している。

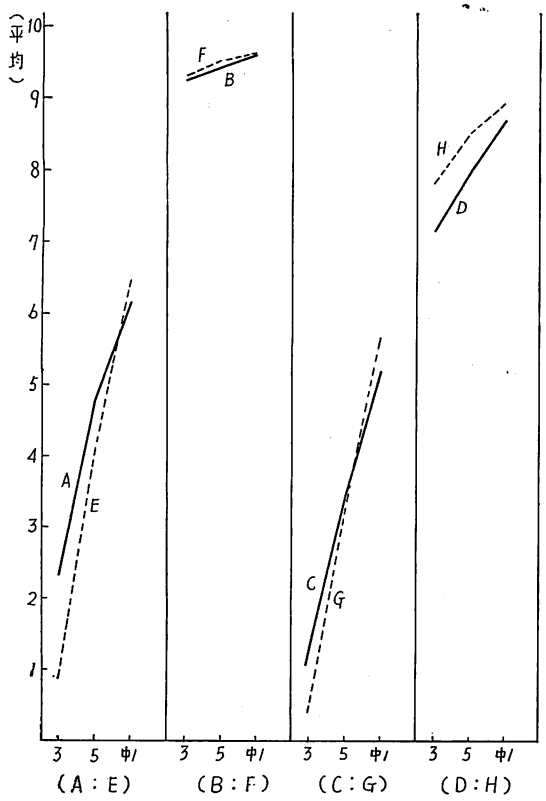
2. 要因別の検討

（1） 字画を中心にして

「頻度」と「ことば」の要因はほぼ同じであるが，「字画」において大きな違いがあるという条件を比較してみよう。Fig，1は，Table 3の平均を図示したもので，それぞれの対は，字画に大きな違いがある。実線が「少」の方で，点線が「多」の方である。

大変，似た線を描き，全体として，実線（「少」）と点線（「多」）との間に差が認められない（各対について，それぞれの対応点をサインテスト(岩原，1955)で比較し

Fig. 1　字画を中心にした条件の比較



てみると，対応点12のうち，点線の方が低い位置にあるのが4ケ所（A：Eの3と5，C：Gの3と5）で，m＝4。従って，10%でも有意差は認められない)。すなわち，字画の多少は，全体としては関係がない，と言えるようである。

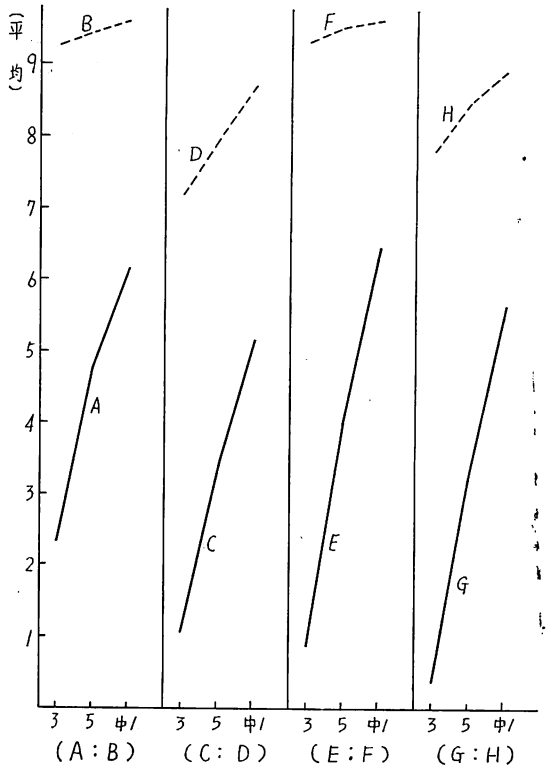
しかしながら，中学1年生については，どのばあいも，点線の方が高い位置にある，ということは注目されてよいであろう。

（2） 頻度を中心にして

前記と同じように，Fig, 2として，各条件の比較を示そう。「字画」は，同じ数で，「ことば」の要因はほぼ同じである。それぞれの対は，漢字の頻度に大きな差異があり，実線が「小」（「当」）で点線が「大」（「教」）である。

結果は，大変はっきりしている（サインテストでは，m＝0。従って，1%以下で有意である)。すなわち，頻

Fig. 2　頻度を中心にした条件の比較



度が大きい方がよく読める。大きく差が開いたのは，用いた教育漢字が，小学校1・2年の配当漢字で，かなり，学習をする機会の多い漢字だったからであろう。

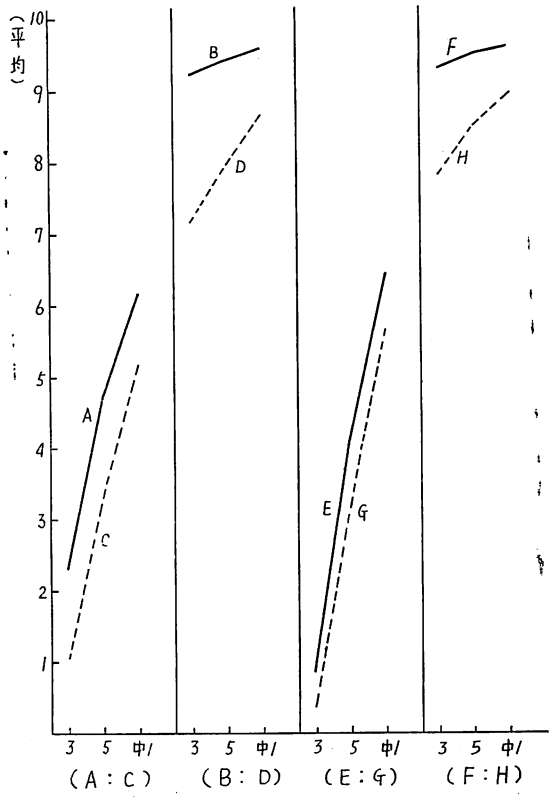
しかしながら，ここで特に注目したいのは，BとD，FとHとの間に差があるということである。同じ漢字を使っていながら，同じように読めていないのは，他の重要な要因が入っている，と考えられるのである。すなわち，「ことば」の要因である。

（3） ことばを中心にして

Fig, 3は，「ことば」が「f」か「uf」かで比較している。漢字は同じものを使っているため，「画数」と「頻度」は全く同じである。実線が「f」で，点線が「uf」である。

結果は，明確に，「f」の方が読めている（サインテストでは，m＝0。従って，1%以下で有意)。つまり，同じ漢字でも，それを読ませる際の「ことば」が熟知したものであると，そうでないばあいよりも，読めるのであ

Fig. 3　ことばを中心にした条件の比較



る。ここに，読字の際の「ことば」の重要性が，とくに指摘される。

3. 条件別の検討

ここでは，条件別に学年間を比較してみよう。Table 5は，Table 3を基にｔ検定を行なった結果である。

Table 5　条件別による学年間の比較（t 検定）

A	3と5	11.64**	C	3と5	11.94**
	3と中1	14.41**		3と中1	21.50**
	5と中1	5.55**		5と中1	6.91**
B	3と5	1.49	D	3と5	3.71**
	3と中1	3.31**		3と中1	7.52**
	5と中1	2.32*		5と中1	4.02**
E	3と5	13.66**	G	3と5	13.87**
	3と中1	20.90**		3と中1	21.00**
	5と中1	7.16**		5と中1	7.88**
F	3と5	1.72	H	3と5	3.38**
	3と中1	2.65**		3と中1	5.93**
	5と中1	1.12		5と中1	2.87**

** P<.01　　* P<.05

全体としては，学年が増すとともに読字率も増す，と言える。しかし，Bの「3年生と5年生」，Fの「3年生と5年生」および「5年生と中学1年生」のばあいは，有意差が認められないのであって，ここに注目すべき点がある。

すなわち，いずれも教育漢字である。その意味で，出現頻度は重要であることが認められる。が，同じ漢字を用いたDとHでは，同じような結果が見られないように，単に，漢字だけの問題ではない，と言えるのである。

選ぶ漢字，その示し方のいかんによって，3年生でも，多くの児童が読めるのである。ことばの重要性が，あらためて指摘されよう。

討　論

「読字力の発達」という形で調査研究が行なわれているばあい，ともすると，どの字は何年生で何%読める，といった結果で済ませてしまっているようなばあいが，多かったのではないだろうか。確かに，同一漢字について学年を追っていけば，その読字率は増加する，と考えられる。

ところが，漢字によっては，またそれを示す時のことばによっては，そうした原則が崩れることがある，ということをまず強調しておきたい。極端な言い方をすれば，単純な読字調査の結果からは，一般的な方向を出すことは困難であり，それでもって読字の難易を論じても，あまり意味がない，ということである。

本稿の結果では，どの学年においても，読字の困難点は同じところにある，というのが結論的なことがらであり，その困難点は，第一に漢字をどのようなことばで示すかということ，第二に漢字の頻度である。

したがって，漢字における読字の指導を考える際には，回数多く出すということも重要であるが，文字の指導ではなくことばの指導である，という方向が大切なのである。ここに漢字を指導する際の基本語彙の問題が出

てくる。

要　約

1. 漢字における読字の困難点を発達的に検討するため，栃木県足利市立Y小学校の3年生136人，5年生126人，同市立K中学校の1年生134人，合計396人（男子：200，女子：196）を対象に，「字画」「頻度」「ことば」の3要因を組み合わせて8条件をつくり，それによって選んだ漢字40を，ことばを違えて2回与え，読みがなをつけさせた。

2. 結果をまとめると，——

（1） 全体としては，学年の増加とともに読字率も増している。

（2） 読字の困難点は，どの学年についても同じと言える。

（3） 困難点としては，漢字を示す際のことばの熟知程度が重要で，熟知しているばあいの方がよく読める。

（4） 漢字の出現程度も，困難点の一つで，頻度が大きい方がよく読める。

（5） 字画は，読字のばあいは，影響がないようである。

※ 条件Dに含まれる「元そ」は，「げんそ」も「がんそ」も正答とした。詳細は，個々の資料を見られたい。

引用および参考文献

福沢周亮　1963　国語学習の心理学的研究(3)——言葉と文字との関係——日本心理学会第27回大会発表論文集，318。

福沢周亮　1968(a)　連想法による小学校児童の熟知語に関する研究(Ⅱ)——熟知語彙表の作製とその検討——，東京教育大学教育学部紀要，第14巻(印刷中)。

福沢周亮　1968(b)　漢字における読字の困難点（未発表)。

岩原信九郎　1955　ノンパラメトリック法　日本文化科学社

岩原信九郎　1957　教育と心理のための推計学(新版)　日本文化科学社。

阪本一郎　1958　教育基本語彙　牧書店。

〔付記〕 本研究は，昭和41年度文部省科学研究費による総合研究「読書能力の開発に関する基礎的研究」（代表者：阪本一郎）の一部として行なわれた「読書能力の発達に関する研究」（研究者：大内茂男，藤原喜悦，岡田明，福沢周亮，河井芳文，天野清，阪依田多鶴子，河井英子）の一環として行なわれたものである。

SUMMARY

The purpose of this study is to investigate the difficult developmental factors in reading "Kanji". The Ss are 396 children (136 3rd graders, 126 5th graders of the same school, and 134 7th graders) in Ashikaga city. They are instructed to read "Kanji".

40 "Kanji" are selected in accordance with 8 conditions, each consisting of 3 factors (complexity of characters, frequency of "Kanji" in books, the ideomatic meaning of the characters).

The results are as follows :

1. The percentage of Ss who are able to read "Kanji" increases by grade.
2. The factors of the difficulty in readig "kanji" are same in every grade.
3. The most defficult factor is the familiarity of the word meaning.
4. The frequency of "Kanji" in books is another difficult factor.
5. The complexity of characters has no affect on the reading of "Kanji". 〔To be continued〕

非行少年の読書療法による治療例*

〔症例第九報告〕

千葉家庭裁判所

大　神　　貞　男**

（Ⅰ）ま　え　が　き

私は昭和42年４月福岡家庭裁判所より千葉家庭裁判所に転任し本報告は千葉家庭裁判所で実施した第一回の治療報告である。研究上の課題は第四報告に引続き

(1) 本療法の治療的人格変化を Rorschach 法によって分析し読書療法の治療効果の一般を解明する端緒を得んとした事.

(2) 次いで又症例分析の結果から本療法に於ける治療目標や治療機制の一般的な解明に接近せんとした事である。

（Ⅱ）ケースの概要

(1) 少年（17才０月　♂　中卒，人夫）

(2) 家庭　父（47才，家具大工，小卒，S31年５月窃盗罪にて徴役10ヶ月，執行猶予３ケ年）母（47才，小卒，人夫）他に姉１人（洋裁生徒）弟１人（中３）があり家計は苦しく準保護家庭である。住居は純農村地帯で家屋は木造平家建２間（6, 8 , 台所）。父は桶屋の三男で酒好きで５年前位までは晩酌に焼酎を三合位飲み酔っては暴力を振い家族の者を殴打していた。仕事にも熱意乏しく家族全員から疎外されている。母は態度も明るく家族の者によく気を遣って献身的に働き家庭を守っている。

(3) 生活史概要：S25年５月５日安産出生。発育順調で健康優良児として表彰された事がある。S31年４月T小学校入学。この頃火災にあい家屋全焼し生活難から父は窃盗行為あり。S38年４月A中学校入学。中学時代の生活行動は積極性に乏しく自己中心的で且つ怠惰で注意力は極めて乏しかった。S41年中卒後A市職業訓練所内燃機関科に入所。S42年４月同所を卒業し建設工事人夫となる。仕事振りは真面目であった。

(4) 問題行動：S42年４月４日午後５時頃F市道路上に於て自転車にて通行中の女子高校生（15才）に騒ぐと殺すぞと首を絞めあげ暴行を加えた。◦又S42年１月15日午後２時30分頃F市郊外の畑で遊んでいた小学３年生（♀８才）に対し騒ぐと殺しちゃうぞと脅迫して自己の自転車の荷台にのせ約1.5K 位略取したものである。

(5) 心理テスト結果

◦知能　田中 B′　1Q＝97

◦Rorschach T.　本明集団版　p＝1 (Key—)＝2

M	FM	F	FC	CF	FC′
0	4	10	3	1	2

2.5	2.0	1.5	1.0	0.5	0.0	−0.5	−1.0
1	1	7	8	2	0	0	1

◦原版 Rorschach T.　BRS＝−17　修正 BRS＝−30。

P	R	Rej	T/RH	M	F	FM
2	12	4	±13″	0	6	1

FC	FC′	H	A	Obj	PL	At
3	2	1	6	1	3	1

---

*　A study of bibliotherapy on the delinquent (9th report)

**　OOKAMI, Sadao (Chiba Court of Family Affairs)

∘その他の人格テスト結果は記載省略。

（Ⅲ） 治療の概況

∘治療期間　昭和42年5月19日より昭和42年9月29日まで113日間。∘用いた読物　次郎物語　嵐　にんじん　仔鹿物語　真実一路　家なき少女　やまっ子六代目　美しい暦

(1)　次郎物語感想文

「…次郎は家の人が自分に少し気持を和げて欲しいと思っている様な気がする。だけど次郎を大して気にもせず恭一や俊三郎許り可愛がって居る様に思はれる。そして俊三は自分が皆なに可愛がって貰っているから誰れにでも気がねをせず「御飯を食べないか　馬鹿あ」と僕はこの言葉で俊三が次郎を軽蔑している様な気がする。だけどそれは母や家の者が俊三郎を甘やかすからだと思う。僕は現在でも不公平に育てている父母がいるがこういう事はなくして欲しい。次郎の両親や周りの者の見方は誰れでも反抗したくなる気持にさせている。だけど次郎は偶々父と一緒に砂州か晴れ渡った大川に行った。次郎は父と一緒に行った事は初めての世界に来た様に思えている。僕は父が子供への関心を得て少しでも子供と話し遊ぶ機会をつくって遊び相手になっている事は父はそれだけ子供に親しんでいる。母は恭一に許り優しい言葉をかけたりして居る。僕はこういう事はかえって反感の気持を起させると思う。こういう事は邪魔したいと考える。次郎は今まで母がどう感じて居るか余り世話をしたくない事だろう。そして次郎が道具を穏した事は恭一に許り優しく言葉をかけるから自分にもかけて貰いたい気持になっている。こうした事が次郎を反感させた事だと思う。次郎は自分だけが乳母の家から本田へ，本田の家から正木の家へと移って行かねばならないのだろう。何処が本当の家だろうか。次郎が思い出して居る事は自分が実際に育てて貰った乳母だという事が頭から離れないからだと思う。そしてお祖父さんと此処に何時までもいるの？　次郎が実家から今まで転々と移って居る事で次郎はようやく実家の気風に馴れたのに又移った。そうした気持が次郎を不安にした。次郎は自分の遊びもしなくなった。義務的な気持の方が強かった。彼は母が病気にかかって居る事で遊びを止め今までの次郎とは違った感情が表われて居る。肉を母のために自分の少しのお金で買った。次郎が母を思って買って少しでも食べさせる気持にはひたすら感心さが表われている。僕は祖母は本当に憎らしい。それは次郎に好意を抱いていないのと何事に対しても次郎を悪く決めつけたりする。そして次郎の事になるとどうせ悪い事をしていると思ってそっぽを向いてしまう。僕は次郎が家内の中で皆を用心深く考え自分を可愛がって貰えないと悲観しているのはこういう家中の情勢からだと思う。母と死別して次郎は母が臨終の数日前「私は乳母よりももっと遠い所からきつと次郎を見てあげるよ。だから腹が立ったり悲しかったりしても……」と息を途切らせて云った。言葉がいつまでも力強く彼の心を捕えていた。それは母が病床について次郎が今まで何をしても厳しく叱っていた母が次郎やお浜に対して行動を心から謝まり過去になかった親愛が高まり次郎ひたすら母に好意を抱く様になった。僕は母はこれまで次郎に厳しくしていたのは母の親愛が欠けていたからだ。そして次郎は母の言葉をよく理解している。次郎が母の深い愛情を始めて感じて居る様な気がした。……次郎は考える様になってからは冷静になり何時もの時より冷静さがある。僕は次郎が今まで本当に可愛がってもらう事がないからこういう事をしたとは限らない。だけど今までの事も少し位はあると思う。そして何時もと違った態度で正直になっている。僕は次郎が考えて実行した事だから父に憎まれたって正直を通す所にも意地を感じられた。……次郎が皆を大巻に一緒に行こうと誘うと今までにイザコザがあったのがなくなったみたいに恭一まで次郎にお祖母さんまで返事がかけられうれしく感じて居る。僕は次郎が今までの事を考えないで皆に同じ様に呼びかけてここに次郎の進歩があり皆と一緒に楽しみたいという気持が出ている。

∘同上面接結果

「本は大変面白い。次郎の積極性が面白い。人が言い得ない事でも言って全体の前に自分の正しい事を主張する。又自分の正しい事を実行する。根気のよい性格だ。又次郎の父はよい人だと思う。次郎の相談相手によくなってくれる理解ある父だ。次郎の悪い面を治して反省させている。」

大神「君の父と比べてみてどうでしたか」

少年「積極性は同じだ。ただ自分の父は気が短くよく叱る。自分がこうだと思い込んだ事は絶体に言い通す。次郎の父は言葉でよく分る様に話してくれる。その点がよいと思う。私の父は一方的で私の気持をよく理解してくれない」

(2)　路傍の石の感想文

「貧しい者は学校にも行けず豊かな者は進学させて居る。しかし貧しいといっても才能があれば有効に伸ばして行けないのか？　吾一は自分に貯金を少しでも進学の足しになる様にと，だがこれも父のためになくなってしまった。それを知らないでいる。吾一が行かせてと頼んで居る。僕は吾一が間食をしないで貯金をコツコツ貯めたものを父は少年の心の奥深くある理想をなお一層壊そうとして居る様な気がする。父は告訴の事で何もかも注ぎ込んでしまう。吾一の家は尚一層貧しくなるばかりで母は働き過ぎのため病が少しづつ表われて来ている。母は自

分を犠牲にしても働かなければ一家が倒れてしまう。そうした事は母を過労にし苦労が重々しく感ぜられる。吾一は中学校に行けない事を知るや自暴自棄になって伊勢屋ののれんを潜ってしまった。そして名前も変えられ伊勢屋の小僧としての礼儀を教えられた。だが始めから荒っぽく使われ周りの者が吾一への見方がきつい。酷く扱う。僕は店に小僧として働き酷く扱われる事はその人に我慢さがあっても周囲からの圧迫があったのでは我慢だけでは耐えられないと思う。吾一が自分で思っていた店とガラッ違った印象を受け吾一の悲観的面が現われて居る。……次郎先生と吾一は工場内でバッタリ会ってしまった。併し先生は話をしようとしてもしないで避けて居る。そして小料理屋で話して居る。次郎先生が安吉のなくなった事や安吉から吾一に資金百円を渡してくれと頼まれたものを妻の病気のために治療費に使ってしまった。だが吾一は自分にも知らないとあてにもしていない。なんとも思っていないと言った。僕は吾一は先生の使用した行動を信頼して吾一が本当に人を信じて正しい理解が身についている。人に真似が出来ない純情さがある。

◦同上面接結果「吾一の父は親子でも犠牲にしてまで自分の利益のために父が母や吾一に自分が慾があって少しでもお金をとろうと思っていた。自分の代々の事を考えて平民みたいに仕事をするのを厭がって居る。自分では身分が高いと思ってつつましい暮しは好きではない。吾一はこんな父は好きではない。自分の子供まで犠牲にするのは淋しいと思った。

大神「君の父と比べてどう思いました」

少年「似ている所もある。一本気で勝気でこの点が似ている」

(3) 嵐の感想文

「子供達が大きくなるにつれて母がいない。父の苦労が更に一段と苦しくなる様に思える。そして子供達の無邪気さは父の心を和らげ不安を解消して居る。父と子供達の雰囲気に明朗さがある。父は五十の坂を越した頃病が出て床についた。そして子供達の手を焼いている父の姿が表われてまだ周囲の情勢を知らず抗弁をし父の病にある程度だけ気を使い後は子供の遊戯があってそれ以上の事はまだ考えられない様に思えた。次郎三郎末子達は各々成長が著しい。子供達が新聞を見てもどうしてこんな事をするのだと感傷的な気持が表われて心身共に延びている事に初めて気がついた父に安心さが感じられた。太郎は家中でも長男であるのに父やお徳からみると太郎は温順すぎて次郎達に言い聞かせる事が出来ない。そして父はもっと強くしたい思って農業をさせたか太郎の葉書が来る度に働きよくなったか又は強よくなっているか父が自分の子供の性質を心配して思って居る事を知った。太郎が農業に関心をもって歩んで一人前になって周囲の村の者も太郎自身が今までりっぱに勤務した事が村の者に好かれる様になった。太郎の今まで弱かった心を一層強くして居る。太郎が辛抱出来たのは周囲の人の暖かい心と父の援護があったからだと思う。次郎は太郎の所へ行って働く事になった。次郎は家中の人に規律正しさでは人一倍である。そして誰とでも気軽に話しかけが出来て三郎みたいに自分の好な方ではなかった。良い態度があれば人前に出てもりっぱに社会人になっても自己尊重を正しく言え，又社会の仲間になれると思う。この文章の中に筆者の理想や性質面でも行動面でも良く書き現われて居る。

◦父の生活行動報告「本を読む様になってから落着きが出来て素直になりました。これまでだとちょっと物を言付けてもいやいや言いながら文句を言ってやっていました。返事もせずにスーット出て行ってしまい親を馬鹿にしていた様な所がみえたのですがこの頃は二つ返事ですぐにやってくれる様になりました。本を読んだききめだろうと思います。」

(4) 仔鹿物語の感想文

「バックスタ家は原始林の中で生活をして居る。食物も自然の物を使用し所有な面でも遅れている。そういう生活を遊び相手もなくただ働き大自然と語りあうだけでいる。ジョディーという少年の心に友達欲しさと遊ぶゆとりがあればジョディーの父への親しさを一層強く感じた。ジョディーの父ペニイーの猟に対しての狩りの上手さとそしてジョディーは父が猟へ行けば後からついて行く。まだ猟の心得もないジョディにとって狩りの危険さと経験が身に覚えてジョディーは父の様に上手な猟師になろうと思っている。……ジョディーは働いてばかりで遊びという遊びもない。そして父と釣に行った場所に行って見ると水がはいっていて釣場所が一カ所だけしかなかったそこへ腰を下すと父の方が先に糸を投げたのに後から一生懸命に投げたジョディーの方が先に魚を釣った。父は励ましながらジョディーに釣らせた事は自分よりも子供の遊び相手に少しでもなってやろうとする気持があると思われる。

◦同上面接結果「父は体は小さいがそれにもかかわらず賢い。意地が強くて働き者だ。子供を正直にさせる事を願って子供思いでよいと思った。原始林の中で遊び相手がないので父が仕事を少しさせて遊び相手になってやってよい父と思った。

(5) にんじんの感想文

「父は末の子にんじんが抱擁しようとすると後すざりをして逃げてしまう。どうして我が子が抱擁しようとしているのを逃げてしまうのか？　父は末の子に父性という資格がないと思

う。にんじんが成長すると兄姉よりも優れて来ているのか分かる。レピック氏の考え方も少し違って来ている。これはにんじんは判断力が発達し記憶力が相当伸びている。父がにんじんに近づきかけようとして居るのが分る。にんじんは孤独な老人で魚釣りが大好な名付けの親の所へ行った。老人は仲の良い友達と会えたのがうれしいのか元気な言葉を交わして居る。二人で楽しんでいる時はにんじんにとっても幸せだという風が窺われる。ルピック夫人が「水車小屋まで行ってバターを取って来てくれないか」しかしにんじんは厭だと言って行こうとしない。それは今まで母が子供と思って自分の思う様にさせていたがしかしにんじんは物の考えに反抗出来る年頃に成長したからだ。

。同上面接結果「家族の中で一番年下の子供を区別するので余り可愛想だと思った。父は家族の中で一番理解のある人であった。大変よいと思った。母は末の子にきつく当っていくら自分が臆病で我慢して母の言う事を聞いたってよくないと思った。なんでも母の言う通りになる。にんじんの父はよく子供を理解しているが私の父は余り理解してくれない。それで余り好きになれない。

(6) 真実一路の感想文

「義夫は寄付金を多くした事が原因で他人の金を盗ったと疑いをかけられて居る。そして矢津先生は義夫が盗ったと言うみたいに疑って居る様に見える。義夫が自分のお金で増したと言おうとしても矢津先生は真実の事を言ってくれと話して居る。問題が重なり合っている事から義夫を余計に疑をかけたけどこういう立場で真実を言ってくれと言ったって誰も厭な気持がする。そして先生の子供教育の根本が熟していないと感じた。額をなおしてやろうとしたら花瓶がひっくり返ってしまった。義夫がよい事をしようとして叱られ姉さんの婿になる人に相手にされないで何か教えて貰いに行くと邪魔しにきたみたいに見ている。義夫が誰にも相手にされないという気持が家の中で誰かが遊んでやれば内心の気持にならないと思う。子供の両親のどちらでもいないと不満だと感じ他人に両親がいると羨やましがるのは子供が親への熱慕が急増する時期だからだと思う。義夫は母が生きている事を秘して義夫に一層不安を抱かせて居る。義夫が母を懐しい人で母の尊さが分ったからだと思う。義夫が母が死んでしまった事を聞かされていたが母は生きているらしい事が知ると写真に写っていないが色んな物を引張り出して母を想い浮べている。父が黙っていた方がよいと今まで黙っていたが義夫が余りにも憂えている。それで姉が母を想って居る事と義夫が母を想っている事とは相当の相異がある。

。同上面接結果「義夫は同情心がある。人が困って居る時は助けてやった。義夫から見て父はオセッカイを焼きすぎる。父は義夫が悪い事をすると叱るが一つ一つ叱らないでもよい。煩さすぎる。義夫の父は曲った事が嫌いで自分で言う事にしても正しくて余り人に話さないので普通の人には出来ない。よい事を当り前と思っている。

大神「君の父と比べてどうですか」

少年「間違った事はどちらも嫌いだ。私の父は余り仕事はしない。自分に気が向かないと仕事に行かない。それではいけないと思って居る。私は自分の父が余り好きではない。又は酒を飲む。短気だ。ガミガミ言う。両親はよく喧嘩していた。小学校時代は父が母を殴っていたから父が嫌いだった。今も余り好きではない。それで私は父に怖い様な感じをもっていた。」

大神「こんど本を読みだしてからどんな風に感じていますか」

少年「今まで自分に分らない事が分って来ました。人に使われて居る時は我慢する事が大事な事が分って来ました。次郎物語を読んでそう感じました。又仔鹿物語を読んでジョディーの父は賢くてよく子供の面倒をみて嘘をつかないでよくジョディーを可愛がった。子供の遊び相手になっやった。不平をなくす様に自分の好ききな様にさせた。」

大神「君の父と比べてみてどう思いますか」

少年「仕事に対して熱意が違う。私の父は辛棒強くなく又子供に対して教え方が余りうまくない。もう少し頭からいわないで話をよく聞いてから言ってくれたらよい」

母「父は子供の言う通り余り仕事にも行きませずやかましくて子供達から全部嫌われています。仕事さえすればよいと思っていまして子供の事家庭の事は全部私がやっています。父が仕事に行けば子供達も元気が出ます。父が仕事を休みますと子供もシーンとしています」

(7) 家なき少女の感想文

「一家揃ってロクールへ行く内に父と母を亡くした。そして母が亡くなる前に遺書を残していった。周りから親切にしてくれたがペリーヌは母の遺言どおりにしたペリーヌの正しくりっぱに生きようと思う心がひたすらに感じられた。ペリーヌのマロクールへの道は少女一人では辛く厳しい渡世だと思った。それでパン屋のおかみさんはみすぼらしい少女が五フランという大金を渡すとおかみさんは五フランの金を贋金と言つてボロ服

の娘が五フランのお金を持っているはずがないと言った。商売上での自分の利益しか考えていないパン屋のおかみさんの少女に対しての態度を痛感した。……ペリーヌは工場に入った。仕事はきつくて思ったより骨の折れる仕事だった。しかしそれにも負けず自分の足をかばい精神的にもガンバッている。そして自分の将来パンダボンヌと会える思って一生この工場で働こうと決心して居る。それから自の本当の名前も告けず去った母が遂いてパンダボンヌと会わせてくれる事を願って一人の少女が逞しく生きて行こうとする姿に感動した。

。同上面接結果「ペリーヌは活発でハキハキして居る。礼儀正しい。ペリーヌは母のいう通りにして伯父の所に行って暮しておった。伯父の所に行けば面倒をみてくれると思った。可愛想だと思いました。父母がいなくて可愛想だと思いました。それでもペリーヌは正しく生きて行きました。

(8) やまっ子六代目の感想文

「一人の少年が自分の家の代々の仕事のあとをついで鉱夫になろうと決心をして居る。その父は真面目でよく仕事に熱心であった。又子供思いであった。他人に迷惑をかけないよい父と思った。仕事に精を出して正しく生きて居る。子供にも優しかった。主人公は父のあとをついで将来鉱夫になる事を決めて本当に偉いと思った。」

(9) 美しい歴の面接結果「男女二人の先生はお互に考えが違うがお互に真直に言いたい事を言って居る。女の先生の方がそれに対する答えか論戦し勝ちである様に感じた。好意をよせて居るし双方から好意をよせているが自分の気持と逆の事を言って居る。女の先生が恋愛に近い好意を示して居るが大変新鮮であってよいと思った。

大神「今の人の恋愛態度と違いますか」

少年「いくらか違うと思います。この物語の主人公達の態度は新鮮であって積極的には気持を表現しないで居る。今の人の交際は遊び半分で精神的ではない。この本の先生達の交際の方がよいと思う」

(10) 最終接面（9月29日）：**母**「最近は父も仕事に行って居ます。この項はずっと真面目にやって居ます。父も働いて居ますと家庭も明るいです。又家庭でもよく面倒を見る様になりました。この頃は子供も口を利く様になりました。」

少年「仕事は辛い時もあるけど面白くやっています。この頃は父もやかましく言いません。以前に比べますと父は仕事を熱心にする様になりました。又前よりは父に大分親しみが出て来ました。」

大神「本を大分読んできましたが何か気持の上に変化があったと思いますか」

少年「物事をよく考える様になりました。辛棒強く待って居るといい事がある様に思う様になりました。私は今まで自分をよく知って居る人とは余り口をきかず，又自分をよく知らない人とばかり口をきく様なところがありましたが家の中が活発になりました。皆が努力しだしました。父は酒も少くなって仕事に精を出して冗談を言う様になりました。前よりは大分口を利く様になりました。本を読み出してから仕事も面白く自発的にする様になりましたし，又将来に希望が出て来ました。自分でも偉い人になろうと思います。建築士の免許状をとりたいと思って居ます。

(1) 本明集団版 Rorschach T.

	P	Key—	M	FM	Fm	mF	FK	F	FC	CF	Fc	FC′	2.5	2.0	1.5	1.0	0.5	0.0	−1
初期	1	2	0	4	0	0	0	10	3	1	0	2	1	1	7	8	2	0	1
末期	3	0	1	2	1	1	1	9	2	1	1	2	1	4	6	8	1	0	0

(2) 原 版 Rorschach T.

	修正 BRS	BRS	P	R	Rej	T/RH	M	F	FM	FC	FC′	m	FK	CF	H	A	CR
初期	−30	−17	2	12	4	±13′	0	6	1	3	2	0	0	0	1	6	5
末期	＋3	− 3	4	40	0	±5.8″	2	18	6.5	7	3	2	1	2	2	27	5

(Ⅳ) 治療効果の評価と爾后の考察

治療の初期と末期に下記の如く Rorschach T. を実施し対象少年の人格変化を測定した。

ここで集団版は原版 Rorschach T. 使用のための予診的手続として用いられて居るが，治療の結果から P=1→3 (Key-)=2→0 level=(+2.5～-1)→(+2.5～+o.5)又 M=0→1 FM=4→2と好ましき人格変化のあとを指摘することが出来る。更に之を原版で検討するに，BRS=(−17)→(−3)に，修正 BRS=(−30)→(+3)に，R=12→40，Rej=(4)→(0)，P=(2)→(4)，M=0→2と人格改善のあとを示している。更に又 Card Ⅳ と Ⅶ による象徴仮説法に依る両し親との人間関係なかんずく Oedipus complex 機制の治療的変化を検討するに，

(1) 治療初期：好きなカードⅦ（母親カード）嫌なカードⅣ（父親カード）；「ガツガツしていて嫌いだ。怖ろしい様な感じを受ける。今にもやられそう感じだ。人間の怪物の様に見える」といかにも生々しい Oedipus complex 的心理葛藤を告白して居る。

(2) 治療末期；好なカードⅦ「女だ。年寄りの女という感じだ」「Ⅳは嫌いだ。だが勇ましい逞しい感じを受ける。」と言っているがⅣは治療前後を通じて Dislike Card として選ばれて居るがしかしその内容はそのあり方に可なり変化のあとが見られ，治療初期に於てはいかにも生々しい父親恐怖の Oedipus complex の様を告白しているが末期に於ては嫌いではあるが勇ましい逞しいと変化して父親像は可なり好転を示して居り，Oedipus complex の解消過程と同時に理想自我の強化形成がみられると考えてよいのではなかろうか。

又動物反応と家族内人間関係の内容分析を検討するに，Goldfarb, W. は，Rorschach T. に於ける児童が示す動物反応は家族関係を表わし，大きい動物は成人を，小さい動物は子供（自己や同胞）を表わすとして居る。したがって児童の述べた特殊な動物反応は自分の両親や同胞をいかに眺め又どんな関係をもつかを表わしているとしている。更に Rieti, H. によれば，彼は青年に生ずる動物の型は両親の躾に対する態度を反映するものとして，小さい非攻撃的動物は両親の取扱に対して従順性を表わし，之に反して大な非攻撃的動物は両親との友人的人間関係を示すとして居る。又一般に猿や鷲等の動物反応は父に対する敵意を，鹿は母に対する愛情的態度を示す反応と考えられて居る。以上の如き Rorschach T. に於ける解釈仮説から本例に於ける動物反応を整理分析すると下記の如くである。

(1) 小動物（せみのはら。さなぎ。ふくろう。こいぬ。蜂の頭。蛙。たつの落子。むささび。亀。犬。猿。金魚。かいこ。いそぎんちゃく。かも。孔雀。）の16例で攻撃的なものは蜂の一例である。

(2) 大動物（猪。鷲(2)。馬(2)。鹿(2)。あざらし。象。鰐）の７例であり，このうち攻撃的動物反応は猪・鷲・鰐・馬の４例である。又このうち鷲・猿は父に対する敵意の態度を，又鹿(2)は母に対する愛情的態度を示すものとされるので，少年は母に対しては極めて愛情的であるが，父に対してはなお若干の好ましからざる感情を抱いては居るが，しかし全体的に考察すると小動物反応は大動物反応を遙かに上廻り，少年は両親の取扱に従順性を示し，かつ大動物反応中に於ても攻撃的な動物反応は少く，全般的にみて両親に対する態度は安定化し友人的な態度関係に変化しつつある事が考えられよう。更に又この結果は Card Ⅳ及びⅦに対する象徴仮説法の結果とも大よそ一致して居り，面接時の本人及び両親の報告とも照応的であるので，我々は，治療的人格変化，なかんずく父親への敵意の解消とこれに依る両親に対する人格的愛情関係の自覚による非行性人格の治療的変化改善を認めてよいのではないかと考える。

ここで我々は非行の治療機制や治療目標について一般的考察をしてみたい。我々は非行の心理機制は一般論的に情動不適応の事例に於ては人生初期に於ける家族内人間関係の障害特に Oedipus complex の機制による事を第四報告に於て指摘したが，ここで更に付記するならば，家族内人間関係障害の基本的な関係は母子関係であり，次いで Oedipus compex の機制による父との敵対的人間

関係の解消による父との人的関係の好転と同時に，又これに随伴して母子関係の原始的愛情関係の克服による母子間愛情の人格的愛情水準への自覚成長及びこれに伴う少年の人格内面に於ける理想自我の形成強化が治療機制となるものと考えられる。したがって深層成因療法としての治療目標は，

(1) Oedipus Complex の機制の解消による父子間愛情関係の適応改善

(2) 以上の父子間愛情関係の改善と共に基礎的人間関係たる母子関係の愛情の自覚成長過程

(3) 更に親子関係の愛情好転を中心として一般に家庭内人間関係及び社会生活全般での人間関係の好転と適応改善

(4) 理想自我の形成強化による内面的倫理感の強化

(5) 以上を通じて人格の再統合と適応改善及び人格の内面的深化と自覚生長過程

大よそ以上の事柄が本療法に於ける治療目標と考えられ，かつ従来の我々の症例報告の分析結果から，この事は臨床的証明を得つつあるものと考えている。更に又その上で，個々の事例に於ける非行の類型や特異性に応じた非行者の態度の変容や自覚過程は，第二次的な治療上の目標と考えられ基礎的な非行性治療過程の上に積み重ねられるべきものであろうと思われる。したがって治療は基礎的な人格の治療過程と個々の非行の類型に応じた直接的な対症的な治療過程とに統合さるべきものであろうと考えられる。

（Ⅴ）あ と が き

まことにたどたどしい研究の歩みであり尚本報告に於ても不勉強のため思わざる誤謬もあるのではないかと恐れて居る。何卒忌憚のない御叱正を得て尚この療法の正しい研究の発展と実践活動を念願すると共に，広くこの療法が犯罪・臨床・矯正や教育の領域の人々の間に採り上げられ愛用される日の一日も早からん事を心から祈念してやまない。（S42，11，1）

SUMMARY

1) In this the Rorschach Test was used to analyse the change of personality traits of a delinquent, to whom the bibliotherapy was given, and to inquire into the mechanism of this treatment.

2) The client was a 17 year old construction worker arrested for rape. His I. Q. was 97. His home was poor and his father, a cabinet maker, was a hot tempered drinker, thereby creating difficulties for his family. His mother, a Laborer, was self-sacrificing.

3) During the counseling period from May to September, 1967, he read 8 novels that deal with human family relationships. As a consequence, desirable changes were noted by the Rorschach Test. At the beginning he had a severe Oedypus complex but the hostility against his father gradully disappeared.

4) The disappearance of hostility against his father seems to have made the mother-son relationship more intimate. Also it has improved his attitude toward people in his environment, has reinforced his ethical feeling, and has helped to form his ideal ego.

5) I believe bibliotherapy is effective not only in treating Problem symptoms directly, but also in treating their cause, the inner complex.

幼児のお話の能力の発達*

日本女子大学
阪本一郎
今井路子　篠原寛子**

1 問題

幼児がお話を聞いたり自分で話したりする能力はどのように発達するものであるか。お話は，幼稚園での保育内容としても言語の指導の中で重要な地位を占めているのであるが，これはまた文字を学習してからの読書活動の基礎にもなるという意味で，教育的にいっそう重視されるべきである。しかし従来のお話についての研究はおもに言語の発達という角度からか，あるいはお話の興味の発達という角度から行なわれていて，お話の能力そのものの発達を系統づけたものは少い。われわれはこの問題に正面から接近してみようとした。

お話とここでいうのは，口で話された物語をさす。物語には日常の実用のために使われる談話などはふくまれない。話す者が見聞したことや想像したことについて，その人物・事件などをまとめて筋道をたててことばにしたものである。そして聞く者に，話す者が持っている動的なイメージと同じイメージを伝えるはたらきをするものである。むろんこのような意味でのお話の作用が，幼児に早くから可能だとは考えられない。ではどのようにその能力を習得していくか。それに関連してどのような他の能力が協応するものなのか。この問題をわれわれは次のようにしぼった。

(1) お話を理解する能力の発達
(2) お話を再話する能力の発達
(3) お話を構成する能力の発達

2 方法

個人面接で，教示と反応とをすべてテープに録音した。予備実験で，3歳，4歳および小学校2年の子どもについていろいろの方法を試みた結果，本実験には次の4種を実施した。

(1) 再話
- a 絵本の再話——絵本を見せて物語を読んでやり，その直後，絵を見ながら再話させ，また話し合いをする。これによって，理解・記憶及び再話の能力を見る。
- b 物語の再話——テレビ・絵本などですでに知っている物語を再話させる。ねらいは上と同じだが，ほかに一貫性をも見る。

(2) 作話
- a 絵による作話——一系列の絵を見せ，それにもとずいてお話を作らせる。想像力における連続性，一貫性，統合性などを見る。
- b 物語の完成——お話の冒頭だけを聞かせ，その展開・終結を作話させる。想像力と構成力とを見る。

被験者は3才2か月から6才か2月までの幼児計27名。知能・性別などの個人条件を除外した。すべて中流家庭の普通児と見なされる者である。子どものふだんの生活の場で個別面接をし，ラポートを成立させてから実施した。具体的な方法は各項で述べる。

---

* Development of young children's ability to hear / tell stories.

** SAKAMOTO, Ichirō; IMAI, Michiko; SHINOHARA, Hiroko (Japan Women's Uuiversiy)

3　絵本の再話

素材として中川季枝作・大村百合子画の「そらいろのたね」福音館書店発行を選んだ。見開きの２ページに１面の絵が描かれ，文が添えられているもので，13面より成っている。これを，絵を見せながら１度だけ読んで聞かせた。そのあと，始めにもどって，絵を見ながら話をさせ，テープで録音した。

絵本の画面と物語の話根とは次のようである。

（第１面）　男の子が模型飛行機を飛ばしているのを狐が見ている。
（Ａ１）　ゆうじが模型飛行機を飛ばしている。
（Ａ２）　狐が来て，飛行機をくれと言う。
（Ａ３）　ゆうじはあげないと言う。
（Ａ４）　狐の出した空色の種ととりかえる。
（第２面）　男の子が種を埋めた土に如露で水をやっている。
（Ｂ１）　ゆうじが庭に種を埋めて水をやる。
（第３面）　土の中から生えてきた小さな家に男の子が水をやっている。
（Ｂ２）　種から家が生えてくる。
（第４面）　大きくなつた家の窓にヒヨコがはいっている。
（Ｃ１）　ヒヨコが来て家にはいる。
（第５面）　猫もはいっている。
（Ｃ２）　猫が来て家にはいる。
（第６面）　豚がやってくる。
（Ｃ３）　豚も来て家にはいる。
（第７面）　男の子もはいっているところへ，５人の子がやってくる。
（Ｃ４）　ゆうじとその友だちも家にはいる。
（第８面）　家はますます大きくなり，いろいろの動物がはいっている。
（Ｃ５）　いろいろの動物が来て家にはいる。
（第９面）　お城のように大きくなった家になお動物や子どもがつめかけてくる。
（Ｃ６）　森中の動物と町中の子どもが家にはいる。
（第10面）　狐が来て模型飛行機を差し出している。
（Ｄ１）　狐が来て飛行機を返すから，みんな出ていけという
（第11面）　家にはいっていたものがみんな外に出てしまう。
（Ｄ２）　狐の言うとおりに，みんなが家の外に出る。
（第12面）　窓をしめた家は前よりも大きくなり太陽に届きそうになっている。
（Ｅ１）　狐が家にはいると家はますます大きくなる。
（Ｅ２）　家が崩れはじめる。
（第13面）　家のあった跡に狐が伸びている。
（Ｅ３）　家がなくなり狐が目をまわして伸びてしまう。

(1)　語数の発達

この物語の総語（文節）数は延べ338である。これを再話させた場合，子どもの物語はもっと短くなっている。年齢別に平均してみると表１のようである。

表１　子どもが再話した物語の長さ

歳	人数	平均語数	ＳＤ	再生比	持続度
3	6	88.2	19.6	26%	5
4	8	125.0	34.3	37	7
5	8	157.0	43.9	46	10
6	4	173.7	36.1	51	11

人数が少なくしかも年令が１年間に散っている上，個人差もあるから，SD の値は大きいけれども，大体において年令とともに総語数は増加していっている。原文と比べると３才児は26%で，約４分の１の長さに短縮されてしまうが，６才児では約半分の長さになっている。

ついでに物語の持続度を測定してみた。これは子どもが自主的に物語った語数，つまり検査者が続きをうながすことばを発するまでの間に子どもが自分で物語った語数の平均である。３才児では平均５語ごとにうながしのことばを挿入しなければならなかったが，５～６才児では10語あまり自分で話しつづけることができた。

(2)　話根の再生率

次に前記の話根の再生率を算出してみた。平均すると，３才児54%，４才児86%，５才児98%，６才児99%となり，３才児では約半分の話根しか再生しえていない。とくに３才８か月以下の３人は20%程度であって，ほとんど物語の内容を再現することができなかった。しかし９か月以上の子はだいたい４才児と同じ程度に再生している。画面を見ながらの再話であっても，３才前半の幼児にはまだ物語が理解されていないからであろう。

話根別に見ると，表２のようである。

このように5～6才児は五つの話根のいずれにも100%触れているのであるが，小話根のＡ３とＣ５とを欠く者がすこしいる。これに対して３才児はＣ３に100%触れているだけで，Ａ４は０%である。

そこで小話根について，一般によく再生されているも

表2　話根の再生率（%）

話根	3才	4才	5才	6才	全体
A	50	98	100	100	85
B	67	98	100	100	88
C	100	100	100	100	100
D	50	100	100	100	88
E	67	100	100	100	92

のを見ると，C3が最高で100%，次いでC1，C2がともに96%となっており，「家がしだいに大きくなり，いろいろな者が次々にそこへはいる」ことが，もっとも強く印象に残るらしい。もっとも低いのはA3，A4の各約60%で，「ゆうじが空色の種をどうして手に入れたか」は疎外されがちである。これを画面と照らし合わせてみると，C1，C2，C3は，その内容が絵にそのまま描き表わされているが，A3，A4は，絵になっておらず，物語を理解していなければ再生できないものであることがわかる。

かくて一般的に言えば，絵を見ての話根の再生では，絵が内容を直接に表現しているものは再生されやすく，絵に具体化されていないものは再生されにくいこと，したがって話根として重要なもの（A3A4の如き）も，絵になっていなければ脱落すること，Cの小話根では，主人公のゆうじが家にはいることよりも豚（まだ家の外にいるので目立ちやすいこともある）・ヒヨコ・猫などの動物のほうが再生されていること，こうした脱落・再生の傾向は3才児においてとくにいちじるしく，4才児にも多少あるが，5～6才児ではほとんどなくなることが知られた。（語や文の詳細な分析については省略する。）

(3)　物語の理解度

再話のあとで物語の理解度を見るために，いくつかの質問をした。

〔問1〕ゆうじと狐は，どちらがよい子か。その理由。

狐がおりこうだと答えた者は3才児に1名だけであった。この程度の物語での主役人物の善悪は3才児でも判断できるようである。しかしその理由は，3才児では「飛行機持ってるから」などのように，絵の説明をするだけでそれに代えている。4～5才児は物語の内容に即した説明をするが，「おうちから出ていってくださいって言ったから」，「種からおうちが出てきたから悪いの」というように，物語の断片をあげていて，本質的で総合的な判断は説明できない。中には，狐は始めから悪者と決めている者もあった。6才児はみな物語に即した本質的で総合的な判断をしている。

〔問2〕狐とゆうじは何をとりかえたか。

これは1人の3才児を除いてみな正答をしている。再話の中では脱落した部分であるが，記憶には残っているのである。このことから，子どもの再話は自己中心的で，他人に筋がわかるように話す態度が未熟であることがわかる。

〔問3〕種から何が出てきたか。

3才児に「お花」，4才児に「飛行機」「チューリップ」（これは画面に描いてある）など，物語の中心テーマを理解していない答があった。5才児以上はみな正答だった。

〔問4〕家はどうなったか。

これも5才児以上はみな正答であった。

4　物語の再話

ここでは幼児がどんな話を知っていて成人の求めに応じて話してくれるか，その話し方に記憶の正確さ，関係の理解の程度，物語の一貫性などの発達がどのように現われるかを見ようとした。教示は，「○○ちゃん，どんなお話でもいいからしてくれる。テレビのお話とかお母さんや幼稚園の先生から聞いたことのあるお話とか，○○ちゃんが絵本で読んだお話でもいいわ。」のように言い，その後話し出せない子には，身辺の雑談を交わしているうちに何かを思い付かせるようにした。

被験者がしてくれたのは，次のような物語であった。括弧内は人数，＊印はテレビの話。

3才児　＊　バーマン(3)　　桃太郎(2)
　　＊　木馬座　　七匹の小山羊

	* ウルトラマン	舌切雀
	* オバQ	兎と亀
	* トッポジージョ	
4才児	* ウルトラQ	浦島太郎
	* ウルトラマン(3)	兎と亀
	* バーマン	悟　空
	* マグマ大使	お休みなさいの話
	〔幼稚園のこと〕	三匹の子豚
	〔おばけの話〕	〔作り話〕
	〔プールの話〕	
5才児	* 魔法使サリー(2)	舌切雀
	* 宇宙エース・キャプテン	一寸法師
	* フィリックちゃん	浦島太郎
	〔作り話〕	泣いた赤鬼
	〔幼稚園で聞いた話〕	眠れる森の美女
		白雪姫
6才児	* キャプテンウルトラ	桃色のキリン
	浦島太郎	赤ずきん
	〔生活の話〕	白雪姫

以上採集は46点であった。そのうちテレビをソースとするもの18点，これは低年令の子に比較的多く，上になるにつれて少くなる傾向を見せている。大部分が漫画（動画）である。これに対して絵本等のソースが21点でやや多く，年長ほど相対的に増加している。その多くは昔話で，現代の創作童話は「桃色のキリン」と「お休みなさいの話」の２点に過ぎない。

(1) 物語の長さ

幼児が話す物語がどれほどの内容を盛ることができているかを，ここでは，文の数で計上してみる。話しことばは形式的には連続していて文に区切ることは厳密には困難であるが，筋運びに必要なことば（自立語）は１語文でも文として数え，長いものは主部（省略されていることもある）と述部とが呼応していて一まとまりの意味を形成していると認められるものを１文と見なした。ただし，検査者との会話の挿入されたもの，考えをまとめるために類似の文を反復したもの，「あのね」「それからね」「え―と」などの間投詞に類するものは除外した。その年令別平均は表のようである。

このように３～４才児では平均して５～６文の内容しか物語れないが，５～６才では11～12語文の長さになっている。このうちテレビのお話は，絵本等のお話よりも全般的に見て短い。生活のお話もみな短い。テレビの物語は毎回変わっているから，子どもはその中から主役等の性格や活動の特徴を抽象しなければならないこと，生活のお話も，とくに物語るほどの経験がないこと，などのために短いのだと思われる。

表３　お話の長さ（文数）

才	中間数	最短	最長
3	5	2	25
4	6	3	33
5	11	4	27
6	12	5	25

(2) 絵本等のお話

絵本等の再話は，それがもともと首尾を成した物語であること，反復して聞かされていることなどが，記憶を助けているのであろう。それでも３～４才児は最短２～４文で完結している。５才児の最短は11文，６才児では15文である。１例をあげよう。「兎と亀」の話。

3才（8か月）児

ウサちゃんと亀ちゃんと競走しました。ヨーイドンっていってウサちゃんが負けました。

3才（10か月）児

あのね昔ね亀と兎が来てね「おい亀さん」って言ってね「むこうのとこのお山に行こうよ」って言ってね，来たらね，ここに栗が一つ。そして兎が拾ってね。（検査者：栗が一つ落ちていたの。）そしてまたこっちへ駆けてきてね。そしてね兎と亀がね。山へ登ったの（山へ登ったの。）そしてね狸が来てね，兎の耳を動かしたの。（兎の耳を動かしたの。）兎がね，そしてね，山から転ってけがをしてしまったの。（けがをしちゃったの。）そしてね，亀がね，下を駆けてきたの，そしてね，警察が来てね，狸を殺したの。

4才（5か月）児

あのね，亀さんがね，兎さんと走ってね，亀さんがのろのろ走っているとね，兎がね，居眠りしちゃってね。そしたら亀さんの方が勝っちゃったの。

このように「兎と亀」のような単純な物語でも，３才児にはまだよく理解されていず，最初の子は，兎が油断をするという話根を落としている。また次の子は原話から離れた自由な想像に脱線している。３才児の最長は

「舌切雀」であるが，途中でお爺さんとお婆さんとが混同して，お婆さんに悪い報いが来るという中心のテーマが理解されていない。4才児では大体理解されているようである。

次に「浦島太郎」を引用しよう。

4才（5か月）児

浦島太郎これだけのね。（八つ。）うん，これだけの年になってね，お母さんがいてね，結婚することずっとできないの。（そう。）それでね，それでね，竜宮城までね亀さんが来てね。つれてっちゃったの。（そう，そしたら。）そしたらね。（竜宮城に誰がいたっけ。）お魚やね，タコやね，お姫様がいた。（そう，それで。）それでね，踊りを踊ってくれたの。それでご馳走をね，くれたの。それでね，あんまりうれしいのでね，ずっといちゃったの，それでね，この年をとったお母さんね，もうね，いなくなっちゃったの。（本当。）もうね，道がわかんなくなっちゃったの。（それで。）それでね，浦島太郎さんはね。あのね，箱ん中あけてね，これ，これはね，鏡が写ったの。（本当。）それでね，これはね，白鳥のね。（白鳥がどうしたの。）白鳥のね。（鏡だって言って。明けたら白鳥の。）白鳥のね，羽がうんと出てきたの。もう一つのね，まん中のね，箱をあけるとね，煙が出てきてね。鏡で見ていたらね。髪の毛がまっ白になってね，お爺さんになっていたの。

5才（7か月）児

うんとね，昔ね，子供がね，亀をいじめてたの。それを一寸法師がね，やめてって，うんととめたの。（浦島太郎が。）うん。（やめてってとめたの。）そいで，うんとやめてってとめてね。そいでさ，うんとうんとさ。亀逃げたの。そいでね，浦島太郎んとこにまた来てね。そいでね，亀がまた浦島太郎んとこに行ってね，竜宮城につれていったの。それでね，うんといろんな踊りやらしてね，うんとね，もう帰ったらこの玉手箱をあげてね，それでね，帰ってね，家がね，わかんなくなったの。そいでね，玉手箱をあけたの。そしたらね，浦島太郎がお爺さんになったの。

6才（2か月）児

昔々ね，浦島太郎というね，若者がいました。それで子供たちが小ちゃい亀をいじめていたので，お金ととりかえっこをしていました。それでお金を持って子供たちをうんとうちへ帰っていってしまいました。それで亀を川の所へ逃がしてやると，舟にのって海にでかけました。それで大きな亀が，浦島，大きな亀が出てきて，「浦島太郎さんただいまはよく助けてくれました子供を助けてくれてどうもありがとうございます」と言って竜宮城へつれいいってくれました。それで乙姫様が皆で踊りを見せてくれたり，ご馳走を食べたりしてくれました。それで「私はもう疲れお母さんが心配しているから帰ります」と言って，お土産にツヅラをくれました。「それは絶対あけてはいけませんよ」と言っても，出てみたら家がなくなって，（お家がなかったのね。）そいでねそれは白い煙がモクモク出て，そして浦島太郎はたちまちお爺さんになってしまいました。

このように内容が複雑な物語になると，4才児では，かなりしばしば聞き手が促しのあいづちを入れなければならないが，5才児以上は，それを必要としなくなっている。また4才児では，亀を助ける発端の話根が落ちているし，玉手箱を土産にもらって帰る話根もあいまいになっている。事件の顕型は具体的に物語られているが，因果の関係はよく理解されているとはいえない。

5才児はだいたいよく再話しているが，一つだけ，玉手箱のタブーが脱落している。

6才児では，ほぼ完全に再話されているし，亀・太郎・乙姫のセリフに，それぞれの人物の立場から発言する自他の分化が見られる。その上，書きことばの敬体がうまく使えている。ただしこのことは前掲の3才児の例にも見られるように，絵本を読んでもらって覚えた子どもが，原文に近く再話しようとすることから現れる一般的な傾向だと思われる。5才児には「泣いた赤鬼」を丸暗記している者もあった。このことから，セリフのあとに「と言いました」をかならず付ける傾向も出てくるのであろう。この傾向は，絵を見ながらの再話にもいちじるしく見受けられた。

他の例は省略するがだいたい同じである。

以上から，3才児では断片的な再話しかできないが，4才児ではおよそのアウトラインは再話できるが，主要な話根が落ちたりして，因果の関係の理解がじゅうぶんでないこと，5才児ではかなりよく再話できるが，まだ人によくわかるように話すというよりは自己中心的であり，6才児でほぼ完全に再話できるようになることなどが知られた。〔To by continued〕

学級における矯正的読書指導の実践*

東京都田園調布小学校

横　溝　昭　平**

1　研究の目的

筆者の勤務校では図書館教育の一環として，特設時間を週一時間設け，読書指導と利用指導の二場面を用意している。読書指導時間は，選定図書・必修図書を学年毎に発達段階に即して定め，これに自由読書を加えて成り立っている。

この計画の中で実際指導に当って来た訳だが，もう少し追求せねばならない問題点の存在に気がついた。すなわち，対象児童の個々の能力が相違するのに，同一テーマで同一読書材を，同一指導目標をかかげて児童に与えることが，児童の個々を伸長させるのにどの程度効率があるかという点である。個々にあった指導，特に低能力だとみなされている児童への指導計画をどのように組織的科学的にするかが問題である。

平均的な知的水準に適合し，正常な読書力を持つ児童を対象とした読書指導の組織化は，ある程度満足のいくように準備されているが，低能力児を普通授業の中で，どのように組織的に指導するかはまだ確立されていない。いわゆる発達的指導計画 develapmental program だけでは適切でない。発達的指導計画では，一般的に（児童の読書能力を伸ばすに当って）発達の概念を平均的にとらえている。個々の児童の読書興味や読書力の発達段階を微的にとらえることが必要であろう。実際指導に当って，学級内の児童間にある能力差が問題にされなくてはならない。学年相応の読書材であると指示されたものでも，消化し切れない児童が存在する。このような児童に対する科学的組織的な指導方法の開発が（普通授業の中で）なされなくてはならない。いわゆる矯正的読書指導計画 corrective program である。

このために，部分的読書不振児 partial disabilities（文中の語の認知力に劣るもの，逐語読みで読速におとるもの，読書内容の理解におとるもの）読書不振児 backward readers（知能より読書力のおとるもの，読書力があっても読書に興味がないもの，特に国語成績のひくいもの，音声言語に欠陥のあるもの，情緒的不安定性で読書に根気がとぼしいもの，読書の基礎技能の不足するもの，読書習慣がなく読書環境に恵まれていないもの）読書遅滞児 reading retardation（知能の低いもの，学業成績の低いもの，非社会的であって読書をしないもの，身体的欠陥があって読書をしないもの）などの診断をどのように行ない，整理し，指導計画をたてるのか実際に行なってみた。

さらに，読書治療 remedial reading の対象児（読書困難の重症児）を学校としてどのように処置したらよいかも問題となろう。幸いに担当学級中には対象重症者はいなかったが，連合学習能力，言語記号の把持力，概念形成力などの欠陥が目立つ児童がいたので，特別の場（校内教育相談室：面接室１，遊戯室１）で実験的に試みた。米国のように，社会に読書治療研究所のようなクリニックがないところでは，当然校内で考えなければならないことではあるが，特殊技能のいることで困難な点

---

* A practice of corrective program in classroom.

** YOKOMIZO, Shōhei (Denyenchōfu Primary School)

があろう。

本研究は，室伏武氏，岡田明氏からの激励とご指導があったことを付記して感謝したいと思う。

2 研究方法

対象：大田区立田園調布小学校４年　男32　女19

児童に関する資料の蒐集と整理については下記の方法を使用した。

・岡本的読書能力検査
・知能検査（東大式，鈴木ビネー，WISC）
・国語標準学力検査（東大式）
・ロールシャッハテスト（把握形式を中心に）
・G・A・T
・親子診断検査（日本文化科学社）
・家庭環境調査（自作）
・身体的特徴
・読書興味趣向（読書ノートによる）
・クレペリン精神作業検査（80型）
・読書量とその傾向
・音読観察（添加，脱落，倒置，つっかえ，逆行，置換）
・黙読観察（唇読，眼瞼動揺，逆行，速読字/秒，眼球停留）
・読書感想文分析（綜合型，空想型，批判型，被規定型，無感動型）

結果の記録法は一覧表と，個別指導票を用いた。個別指導票は J. Harris に負うところが多いが，必要項目にしぼった。（表１省略）

矯正的読書指導の体制は，グループを編成して行なった。グループ編成の手続きは，上記の調査・検査によったのだが，主として読書能力，知能，音読黙読時観察結果，感想文分析を用いたのだが，読書成就値に注意した。

・上位グループ

偏差値65以上で評価段階＋2の者11名，＋3の者７名をもって構成した。成就値は全て＋であり，＋10以上の者10名が含まれ，他に問題点は発見されない。

・中位グループ

偏差値55以上の評価段階＋1と偏差値45以上の評価段階０の者，合計28名をもって構成している。＋1段階で成就値－のもの３名，０段階で成就値が－のもの５名を含んでいる。特にブライト・アンダーアチーバーのもの（成就値－12）２名も入っている。ただし，音読黙読観察結果と読書生活の劣なもの３名は，中位グループより除外し，下位グループに入れた。

・下位グループ

偏差値44以下ではあるが，－1の段階と前記の３名を含めて計８名で構成している。このグループは眼球運動においても，音読黙読時の能力においても問題点を多くもっている児童である。

以上の三群法を採って，指導時間は 3〜4 時間を単位とした。J. Harris は１週間の細案を出しているが，国語時間をもって行なうまでには当学級はいっていない。

読書治療は，放課後，教育相談室において，速読訓練内容把握訓練を週２回１時間施行した。

対象児

・男N児

読書偏差値46　知能偏差値32　国語学力偏差値35　眼球停留回数多い　音読観察(添加，つっかえ，置換)　黙読観察（唇読，逆行）速読２字/秒ロールシャッハ把握形式D型－　以前に登校拒否があった。

・男K児

読書偏差値37　知能偏差値37　国語学力偏差値36　眼球停留不規則，眼瞼けいれんがある。音読観察（脱落，つっかえ，置換）黙読観察（唇読，逆行）速読２字/秒ロールシャッハ把握形式W型干

・女M児

読書偏差値53　知能偏差値65　国語学力偏差値55　黙読観察（唇読，視角投射浅い）速読－1　読速＋1　語い＋1　鑑賞０　速読４字/秒

・女T児

読書偏差値55　知能偏差値65　国語学力偏差値55

読書科学（Ⅺ，3）

速読4字/秒　0　読字+2　読い+1　鑑賞0

3　普通授業における矯正的読書指導計画（1時間）

A　作品

金色のあしあと　　椋鳩十著　牧書店

むくどりのゆめ　　浜田広介著　あかね書房

B　作品について

イ　金色のあしあと

動物物語を読むときのたのしさは動物の習性のおもしろさにある。ここでは親ギツネと子ギツネとの愛情の交流がその動物の習性やしぐさによって明白に表現されている。それに加えて主人公正太郎が次第に感動をよびおこされ，キツネに対する愛情となって出てくる。それは読む児童たちにも共感をよびおこすだろう。そして，キツネ親子の愛情は人間にもおとらぬものであるとして反省させてくれる。各節を通して次第に高まる正太郎の感情と同一化することは可能であろうし読書能力の上位児はその本旨をつかみ得て，読書意欲が高まるであろう。読書能力中位者は筋が簡単なので読みを深める訓練にもなろう。

ロ　むくどりのゆめ

母をおもうむくどりの子のやるせない期待感がじりじりと幻想の中にしのびよってくるような作品である。筋の複雑さはなく，もり上りがやわらかで文字の抵抗も少ないことから読書能力の下位者には適当と思われる。速読訓練用としても内容把握，文意把握の指導用として適切であると思われる。なお，原文のままでなく，四年生の下位者にあうように漢字を多くし，三文節程のわかち書きになおして印刷した。

	下位グループ		中位グループ		上位グループ	
	学習活動	留意点	学習活動	留意点	学習活動	留意点
導入展開	本日の学習のやり方や目やすをつかむ（3分）					
	速読練習（5分）	ⓉNo.2を使用する時間測定を個々にする	金色のあしあと4～6章を黙読する（15分）	正太郎の心の動きをつかまえることに課題をしぼる	前時の感想文について話し合う（5分）	グループチエアマンの下に行う
	「むくどりのゆめ」を黙読する（15分）	「むくどりのゆめ」という意味を考えながら読ませる			時間測定読書「むくどりのゆめ」 チエックワークをする（10分）	Ⓣ 各個に計時するが教師も計時してやる。 以前の読速と自分で比較する。
			正太郎の感動場面について話し合う（15分）	Ⓣ 正太郎のことばに注意させて，小グループでグループチエアマンの下に行う。教師は各グループ毎にまわって指導する。	「金色のあしあと」を黙読する（15分）	自分の予想を念頭においてその予想のくずれてくるところに注意をむける。
	理解テスト（10分）	プリント用意				
	小鳥の心の動きやしぐさについて話し合う（10分）	Ⓣ なぜ夢をみたのか，どんな意味があるのかに焦点をあてる				
			感想文をかく（10分）		感想文をかく（10分）	
終末	「金色のあしあと」家庭読書にする。					

C　目標

グループ	基本目標	教材目標
上位グループ	予想をたてながら読書できる	動物の習性やしぐさを眺める正太郎の感動と一体となって親子ギツネの愛情を読みとり，動物物語に対する関心を高める。
中位グループ	読みを深める観点を把握させる	
下位グループ	読書材を数多く与えることによって，イメージ量を豊富にし速読できるようにする	小鳥が母鳥を思う気持ちと，父鳥の気持ちとが悲しくとも美しい幻想的なリズムになっていることを感得する。

D　指導計画（2時間扱い）

イ第一次・上位，中位グループ

「金色のあしあと」前半（1～3章）を読み深める。

・下位グループ

「白いきこりと黒いきこり」を一気に読む

ロ第二次・上位，中位グループ

（本時）「金色のあしあと」後半（4～6章）を読み深める。

・下位グループ

「むくどりのゆめ」を味わって読む。

E　本時の指導

イ　目標

・上位，中位グループ

親ギツネの真剣な行動に対して正太郎が感動し，親ギツネの心を受容するようすを読みとらせる。

自分の予想した内容や結末との関連において読む。

正太郎の心の動きに観点をおいてよみとる。

・下位グループ

むくどりの子の母をまつ心がどんな場面にえがれているかを読みとる。

速読練習をする。

ロ　展開p36の表参照。（Ⓣは教師の個別指導場面）

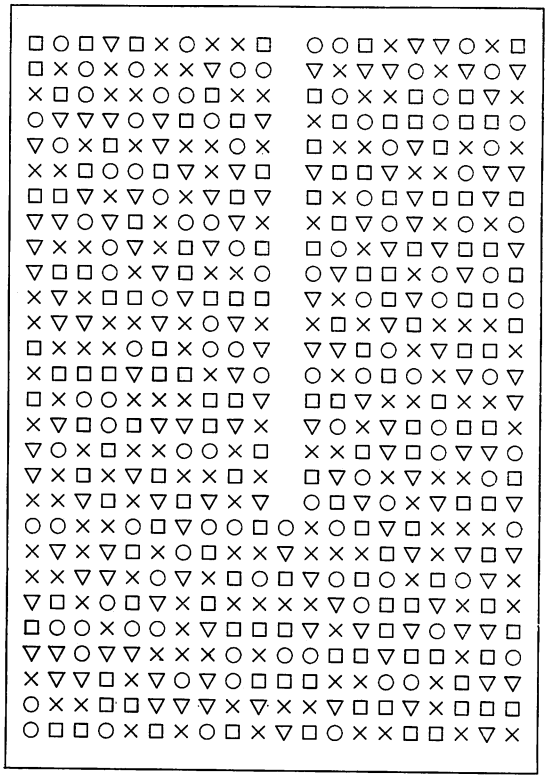
4　読書治療の試み

前述のN，K，T，M児について，以下の訓練を行なった。

①　眼球運動訓練をゲームでおこなう。（N，K，T M児）

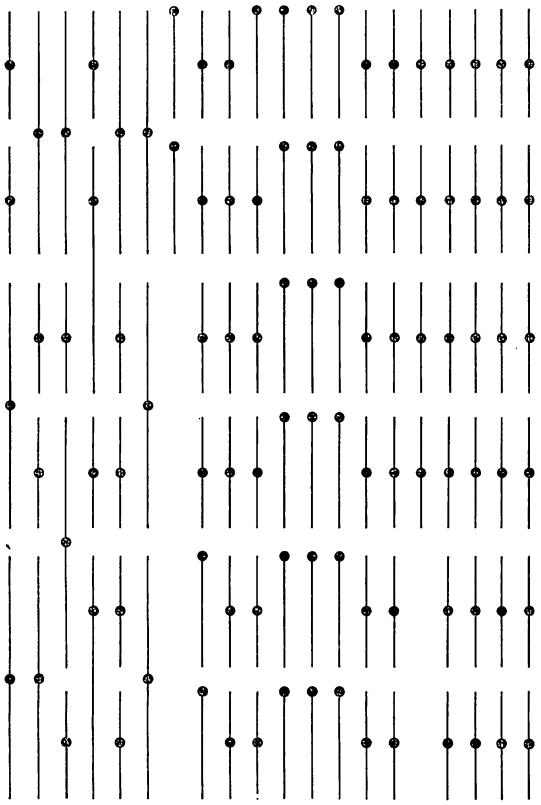
練習シートNo.1は（図1）棒の中央黒点を順次になめていくのであるが，その間隙は後半になるにしたがって変化させてある。練習シートNo.2は○×△□の不規則配列であり，○の数を数えていく課題をもったシートである。（図2）

（図1）



1回で5度行ない，それを1セッションとして，N，K児の7セッションの練習効果は，初期における所要時間には大きな凸凹があって不規則であるが，3セッションあたりより，平均化してきて安定曲線になってきた。安定曲線が見られるころより，他の訓練方法を採り入れてみた。T，M児の練習シートNo.2による結果も次第に安定してきている。（図表省略）

（図2）



さらに，N，K児に対しては3セッションと6セッション終了時に1秒間把握字数テストを行なったところ，N児では2字/秒，K児は同じく2.5字/秒の上達をみることができた。

② 背景と登場人物との関連競争（N，K児）

使用図書：「おおかみ王ロボ」佐藤春夫，槇有恒著（小峰書店）の中の「おおかみ王ロボ」「母グマと子グマ」

③ 再読による確め（N，K児）

一回目の読書で把握したことが，二回目読書で更に修正されていくことを体験させ，自分の読書の仕方の欠点を感得させていく方法である。

④ 言語表象の配列による文章と同一化させる訓練（N，K児）

一読後，文章の背景ならそれを中心にして，文章をカードによって構成させていく。

⑤ 予想の修正（T，M児）

⑥ 時間測定読書（T，M児）

読む範囲を決めておいて計時する。自分でグラフを作っておいて意欲を高める。

この様な訓練をか2月半続けた後，フラッシュカードによって速読を調べたところ表の様に，4名ともほとんど相違がない結果がでた。さらに，読書能力再検査の結果，N児48，K児44，T児60，M児88の偏差値を出し明らかに上昇していることを示してくれた。

フラッシュカードによる読速度完成期

Card No.	T児 1回	T児 2回	M児 1回	M児 2回	N児 1回	N児 2回	K児 1回	K児 2回
1	21秒	8	17	7	17	8	21	8
2	15	12	15	8	15	10	15	10
3	14	8	7	8	7	7	16	8
4	12	8	15	7	12	8	13	8

5 結び

読書治療にしても，矯正的読書指導にしても未開拓の面が多く，実際に一試行であった。低能力児に対する配慮は各教科時間内においてもされたが，特に国語指導の中で考えねばならぬことだ。

どのような指導がどの欠陥矯正に役立つのかの掘りさげがもっとされる必要があろうし，長期計画の樹立もなくてはならない。

さらに，読書能力の伸展を図ることは，人格の変容をも考慮せねば完全でないことを実際指導に当って痛感した。

参考文献

(1) 読書指導事典　阪本・滑川・深川共著　平凡社
(2) 学校図書館事典　阪本他共著　第一法規
(3) 個人差に応じた読書の指導　ガイ・L・ボンド，バーサ・ハンドラン著　阪本一郎訳　牧書店
(4) 児童心理　239，248号　金子書房
(5) 読書問題児の指導　全国学校図書館協議会　明治図書
(6) 読書療法　阪本一郎　室伏武著　牧書店
(7) 読書教育の心理　岡田明著　協同出版
(8) Albert J. Harris : How to increase reading ability
(9) 読書科学　日本読書学会　3巻3号，4巻3号，5巻3号　6巻3号，10巻1号

国語教室における読書指導*

東京都馬込中学校
金子百合子**

この夏，アメリカ育ちの８歳の姪をしばらく手もとに預り，その国語教科書や学習内容をかいま見て，つくづくまた考えさせられた。まず，かねて聞いてはいたものの，その教科書の厚くて立派なこと，一教材の占める頁数の多さ，小学２，３年用の一教材が7.80頁から100頁を越すとは，わが国のそれとあまりにも違う。しかも，その中心教科書に並行させて，おそらくは調べ読みや重ね読みをさせるための本をほかに２冊ばかり使っている。多読と調べ読みの基礎がこのようにして培われつつあるのだ。

たまたま，明治図書「国語教育」本年８月号では，輿水実氏が次のように述べておられる。

——アメリカでは，３種ぐらいの読本を使う。アメリカの中学校の読みの教科書は最近の統計で見ると，平均各学年680頁である。そのほかに自由な読みの学習指導をしている。

——教科書の共同学習指導以外に，めいめい自力で，自由に読ませる時間を設定することはあたりまえのことで，むしろ，それをしないのが，変わっているほうであるようである。

ところで，わが国の中学校では，自由な読書の時間を設定する方が変わっているほうであるようである。そのような変わり者の立場から発言させて頂こうと思う。

1. 読書指導の必須な理由

まず，さきに述べたアメリカの例と比較すれば歴然とする——現在の教科書教材だけでは，すべての生徒に，多読速読の基礎能力を培い得る量を期待できないこと。

文明社会のめざましい進展につれ，増大する新知識を吸収する能力の必要は今後高まる一方であろう。

また，１冊の本を読破することによって，ずっしりと加わる人間的重みを思うとき，どうかすると文庫本１冊でももて余す者さえある現代中学生の実状を放置してはおけないのである。

二つめ。与えられた教材を受動的に切り刻むだけでなく，自己のうちに目的を持ち，自主的に選びとって読み上げていく主体性を持たせたい。適書選択の能力・習慣の形成が必要である。

三つめ。教科書教材によくある，ある種の狭さ，あいまいさを突きぬけて，より深い真実，より広い視点をとらえ得る経験を得させたい。また，同じ主題に迫るとしても，地域や時代の事情，個々の生徒の能力に適合するものが，教科書外の読書領域に求められることも多いと思う。

四つめ。映像文化の氾濫に埋没せず，豊かな思考力・創造力をうちにはぐくんで行ける読書人の成長・増大が，今日切実な要請となっているであろうこと。（もっとも，テレビをよく見る者がみな，思考力を失い，読書をしなくなるとだけ，断定はできない。テレビもかなりよく見ながら読書の質もかなり高いという生徒もいる。要は，何に対しても生き生きとした目を持ち得るということのようであり，その目は，読書をめぐる教師対生徒，生徒どうしの対話・交流で開かれることもまた多い。）

2. 読書指導の目標

以上，読書指導必要の理由を述べて来たけれども，結

---

* Reading guidance in the language room.

** KANEKO Yuriko (Magome Middle School)

局，読書指導究極の目標は，豊かな人格の形成にある。私は，すぐれた図書の持つ高い教育性を信頼し尊敬する。切り縮められたり，骨抜きされたりしていない，かなり長いまとまった作品，年月やどっさり生産される出版仲間での生存競争に耐えて，高い評価を与えられている図書(図書館協会選定のものなどその類と言えよう)，そのようなものと，生徒をじかに対面させ，読みひたらせる読書指導が，本気で計画されて来なければならない。

3. 読書指導の計画

各教科の要求が頭打ちし，国語の時間数も5・4・5の最低が，5・5・5を確保するのがやっとという中で，読書指導の時間をとり入れることは容易ではない。それでもなお私は，その時間をうみ出していきたいと思う。教科書にのみよりかかった，一律的な固定化した指導過程を排除し，創造的な年間計画を推進する努力によって。

年間の国語学習指導計画を，学習活動の面から，次の類に分けている。

(1)読書単元――読書活動を大きくとり入れその能力・習慣を養うことを中心とする。

(2)読解単元――読解能力を高めることを中心とし，集中的に学習する。

(3)作文単元――作文能力養成を中心とする。

(4)聞く・話す単元――聞く・話す能力養成を中心とする。

以上の4類に，教科書の単元をそれぞれ位置づける。

さらに，読書単元の中をまた次の3類に考えわける。

(読書指導計画表の類別)

A．教科書教材の指導過程の最後のところに，発展として読書をする。

B．教科書教材と並行させて読書し，より深く人物・主題などをさぐる。

C．教科書教材はむしろ導入・練習的なものとして，読書活動に比重をかける。

では，今年度の指導計画の実際をお目にかけよう。教科書は光村国語である。1・2年を本年度は担当しているが，現2年生が1年のときの指導者は私ではなかったので，1年で行なうのと同じ内容が2年の計画にも入っている。

＜読書指導の計画＞1年用

*は教科書教材，★は複本が40冊以上あるもの

◎単元「味わって読む」A類　5月

(目標)
- 読書への興味を高める。
- 詩や物語の情景・心情を味わう。
- 図書館の利用のしかたを知る。

(内容)
- 読書習慣・興味・傾向についての実態調査
- *「片耳の大しか」学習ののち，椋鳩十の「栗野岳の主」など朗読紹介。
- 教科書付表「読書案内」解説。
- 特活の時間，学年全体に，図書館利用のしかたを指導。(楽しみのため，調べるため等に応じての)
- 自由読書2時間。

(備考) 自由読書は各人に選ばせるが，後に注するような単元別図書目録を示して推薦する。特に，写真や図版を主としたものにしか手を出さぬような者に注意して個別指導。

◎単元「読む楽しさ」　C類　9月

(目標)
- 伝記や事実物語に親しむ。
- 筋・大意・要点をまとめる力をつける。
- 豊かな感想が持てる。
- 読書記録の書き方を身につける。

(内容)
- *「宮沢賢治」で被伝者の人がらや筆者の心をつかむ。
- *「コンチキ号漂流記」で筋のまとめ方を練習読み進めながらわいてくる感想をメモする習慣をつける。
- 伝記・事実物語の自由読書，3時間。読書記録を書く。(掲示・プリント等で発表し合う。)

(備考) 個々の生徒の興味と能力に応じた本を選ぶよう，観察・指導する。自主選択の姿勢は傷つけないように。
読んでおもしろかった部分の朗読発表もさせる。

◎単元「昔物語を読む」　A類　11月

（目標）◦日本や中国の古典に親しみ，昔の人の生活や知恵を知る。

（内容）◦口語訳や解説づきのやさしいものから，古典への親しみを持つ。

◦グループごとに，ある群の図書を読み，読みとった内容の紹介や感想を発表し合う。（3時間）

（備考）日本神話を読むグループ，地方民話のグループ，中国の故事を読むグループ，説話物語を読むグループ等々に分ける。

◎単元「自分の立場に立って」　B類　12月

（目標）◦人物の心情・情景を深くくみ取り小説の味わい方を知る。

◦読書によって自己を見つめ，真実をさぐりながら感想文を書ける。

（内容）◦*「少年の日の思い出」と並行して・★「一ふさのぶどう」を重ね読みする。（2時間）

◦★「君たちはどう生きるか」の「アブラゲ事件・コペル君の裏切り」を中心に読む。（2時間）

◦作品中の人物の心情・行動について，自己の真実を対置しながら感想文を書く。

（備考）「君たちはどう生きるか」は，その後になるべく全部読み通させ読書記録もまとめさせる。

◎単元「心情にふれて」　C類　2月

（目標）◦物語・小説の主題をつかめる。

◦心情の推移を的確につかめる。

（内容）◦*「魔術」の主人公の心情を表現に即してとらえ，主題をつかむ。

◦「杜子春」「蜘蛛の糸」などにおける主人公の心情の推移・主題をとらえる。（2時間）

◦★「ビルマの竪琴」を読み通し，感想文を書く（家庭で)—(前後に1時間ずつ，導入とまとめの時間を授業で)

＜読書指導の計画＞2年用

◎単元「心情を味わう」　A・B類　5月

（目標）◦小説に親しんで，情景や心情を味わう。

◦主題・人間像をつかめる。

◦読書記録の書き方を身につける。

（内容）◦*「屋根の上のサワン」の情景・心情を鑑賞し「飛び立つカル」を対比して主題をとらえる。

◦*「洪ちゃん」の発展として「しろばんば」また教科書付表の読書案内を紹介する。

◦自由読書3時間

◦読書記録を書く。よいものはプリントして配布。

（備考）個々の読書能力・態度を観察する。また，能力・興味に応じた本を選ばせるよう個別指導。

◦夏休み——（目標）進んで読書し，多角的な視点から感想が持てる。（内容）できるだけ多く読んで記録にまとめ，二学期初めに提出。自由研究と共に，読書経験・感想の発表会を持つ。

◎単元「読みものを選ぶ」　A類　9月

（目標）◦進んで伝記を読み，人間と社会のあり方について考えを深める。

◦事実物語を読み，ものの見方・考え方を広める。

◦感想の交流によってより広い見方ができるようになる。

（内容）◦*「パール・バック」を読んで，被伝者の人間形成の経路や，筆者の感動・意図をつかむ。

◦*「われ宇宙飛行に成功せり」によって大意を正しくまとめる練習をし，感想を豊かに交流し合う。

◦1クラスに5・6種の図書群を示し，同じ群の図書を選んだものどうしで読み合い，感想や疑問を話し合う。（4時間）

◎単元「古典に触れる」　A類　11月

（目標）◦時代・社会とのつながりの中に生み出されたすぐれた古典に親しみ祖先の心をさぐる。

◦注や口語訳・解説との関係をおさえながら少しずつ古文に読み慣れその美しさを味わう。

読書科学（Ⅺ，3）

（内容）◦*「平家物語」*「徒然草」の学習後これらの口語訳・注・解説付きの本を読んで読書感想文を書く。級友相互間で読んだものを紹介し合う。（3時間）
◦美しい，おもしろいと思った原文は，掲示したり朗読したりして発表する。
◦作品を書いた人々の時代や考え方を今日と比べながら話し合う。

◎単元「感想文や意見を持って」　C類　12月

（目標）◦かなり長い小説を読み通し，問題点をとらえて感想や意見を深める。
◦人物の心情を的確に読みとり，人間と社会とのかかわりをつかむ。

（内容）◦*「ミリエル司教」を学習する。
◦「レ・ミゼラブル」「車輪の下」「路傍の石」*「次郎物語第二部」などを読み，お互いの感想や問題点を出し合って討論し，感想文をまとめる。（4時間）

（備考）上記の諸作品はすでにどれかを読んでその記録を書いている者も多いので，それらを参考に問題意識のはっきりした読書に導くようにする。「次郎物語」は第二部だけ四十冊そろえてある，が数冊ずつある前後の部にも読み広げさせたい。

◎単元「生き方を考える」　A・B類　3月

（目標）◦小説や随筆・伝説を読み，人間の価値や自己の生き方を考える。
◦筆者・作者の心をさぐる。
◦自己の読書傾向を反省し，新しい学年での進め方を考える。

（内容）◦*「父の帽子」「父・萩原朔太郎」★「私の履歴書――小泉信三著の一部」を重ね読み，対象とされた人物の人間像と，それを描いた筆者の心とを，とらえ味わう。（4時間）
◦*「走れメロス」の主題・作者の心をとらえる。（3時間）
◦「新樹のことば」★・高瀬舟・山椒大夫」などを読む。（2時間）
◦一年間の読書記録・読書感想文をまとめ，あと書きを書く。（1時間）

＜注記＞本校の図書館蔵書中から各学年単元別に図書目録を作りつつある。たとえば，1年の「味わって読む」の単元では次のようである。

①新日本少年少女文学全集　各1冊（ポプラ社刊）詩・童謡・物語の中短編など多く，表記も平易。この全集の中でも特に次のものは，選択に迷ったり図版写真の多いものにしか手を出さなかったりする生徒に，書架の前で頁を繰ってみせて勧める。文学的香気のある中短編類をしみじみと味わわせられるように。

椋鳩十集（「月の輪グマ」「栗野岳の主」など）・中勘助集（「銀の匙」「鶴の話」など）・宇野浩二集（「ふきの下の神さま」「文章の研究」など）・室生犀星集（詩・「魚介」「乙女抄」など）鈴木三重吉集（「少年駅伝夫」「古事記伝」など――単元「昔物語を読む」でも利用）巌谷小波集（「こがね丸」「なんにも仙人」など）山村暮鳥・北原白秋・豊島与志雄・吉田弦二郎・千葉省三・坪田譲治・青木茂・中西悟堂・木下順二・新美南吉・浜田広介・国分一太郎・火野葦平の各集

②興味を持って読み通させるために。

「トム・ソーヤの冒険」（マーク・トウエン）5冊（角川文庫）
「宝島」（スチーブンソン）同上
「十五少年漂流記」（ベルヌ）同上
「ドリトル先生物語全集」（ロフティング）全十二巻各1冊ずつ（岩波）
「森の新聞」（ビアンキ）全四巻各1冊ずつ（理論社）
「岩波少年文庫――ヴィーチャと学校友だち・森は生きている・イワンの馬鹿・あしながおじさん・星の王子さま・小公子・家なき子・ロビンソン漂流 記など

4. 指導計画・指導過程上の留意点

国語科における読書指導は，自由に読ませる時間を，ただ無前提に設けるだけでは，益少ないのではあるまいか。個別に自由に，主体性をもって自己を向上させ得る適書を次々と選びとり，よいペースで読み進め，読みた

くわえられる者で満ちているなら，それでよい。けれども，中学１・２年となっても，読書に対する興味や意欲の開発されていない者がまだまだどっさりいる現状では，単元による動機づけ，単元別の目標と，その図書館の蔵書実態と見合った単元別図書目録（むろん次々とこれは更新・増加させてゆく努力が必要）による指導が待たれるのではなかろうか。何でも読みたいものを選んで，というのが，個々の生徒の読書を偏向させたり，浅い興味にとどまらせたりしないように。それが，私に以上のような計画を立てさせたひとつの大きな理由である。

また，この指導をすすめる中での，教師と生徒・生徒どうしの間での対話・交流はきわめて有効である。互いに読んだものについての感想文や紹介文を発表したり，話し合ったりして分かち合い，刺激し合う，そして，各人のものの考え方を拡大・深化させていくこと，読書傾向を反省・開拓させていくことは大切な営みである。

本校では，複本40冊以上の図書を数種備えているが，これは同じ学級のものが同時に同じ本が読めるということで，生徒たちには，特別の興味をそそるもののようである。「次郎物語」なども，とっつきはあまりおもしろくない。貸し出して２日ぐらいたってきいてみると，一気に読み終わった者３・４人，半分以上は読み進めたという者10人前後，最初の10数頁ぐらいでもたもたしている者数人とその中間多数者とに分かれてくる。そんなとき，読み終わった生徒の中での，成績は抜群といかなくても，自由によく話をする者をひとりは交えた３・４人と教師とが，くつろいだ調子で，読後の感想を対話して聞かせたりすると，目に見えて関心が強まり，ほとんどの者がその２・３日後には読み終えて，出す感想も豊かである。「友達みんなが同じ本を読むのって，とても楽しいと思う。」そんなことも書き添えてくる。

まだまだ食わず嫌いが多いのだ。私は，読後の深い感動を期待できる名作は，半強制的にかじらせてしまう。結局，大半の生徒が，（ひどく能力の低いものは別として）それに感謝し，「読んでほんとうに良かった。」という。前述の「次郎物語」や，「ビルマの竪琴」などその著しい例であった。

また，読みひたり専一に設けた時間の中で，図書館内での座席も自由に，それぞれに集中させるが，細長く切ったカードは何枚か渡して，読み進めている間にわいて来た感想が，後になってぼやけたりしないように，ちょっと書きとめるとか，しるしとして挟ませるとかさせる。ことに能力の低い，また，落ち着きを欠く生徒には本を選ぶときから特に気をつけて助言すると共に，読みにあきたり停滞したりしていると，鉛筆対談をやったりして，内容・感想をはっきりとらえさせ，さらにさきへと進ませるようにしている。

では，教科書教材の学習と読書との関連はどうか。教科書教材による読解や鑑賞能力の養成は，確かにある読書能力の部面をささえてくれるであろう。しかし，すでに述べたように，まず量がちがい，対し方が違う。読書指導には，読解指導へのプラスアルファがいる。長文の読み通す態度，能力を養うこと，自己の向上に役立つものを進んで選び読みできる態度・能力を育てることなど。さらにまた，創造的な読者への成長を期したい。すでに，鑑賞は再創造的活動であるとも言われるが，事実物語や評論などに対しても，作者・筆者が意図した主題・要旨を正確に理解したところで読みが達成されたとするのでなく，読者は，作者・筆者が創造的活動（創作・著作）をなしつつあったその場にまで踏み入って，人間的に対決し合う，そのような読み手であらせたい。このことは，読書指導の中で特にたいせつと思われると共に，ここからまた，従来とかく静態的・分析的・受動的であった教科書教材の読解指導も，見直されて来なければならないのではなかろうか。

私の今後の問題点としては，この読解・読書両域にまたがる指導法の模索がまずひとつ。それからまた，今日次々と出版されつつある多数の図書の中から，生徒とともに読んでいけるすぐれたものを発見し続けること，自分のよく知らない文学以外の分野の良書に親しんでいく機会を作り出すことである。未熟な私の経験や意図に御叱正・御助言を頂ければまことに幸いである。

読書指導の問題点とその対策*

東京都立日本橋高等学校

阿　部　敏　子**

前　書

高等学校で読書指導を小・中学校のように計画的に実践している所は少ないと思う。指導要領には特に「読書指導」ということばは用いてないし，又「読書指導」の特別な時間を，作文のように設けるという指示もない。しかし「読むこと」の１，アの項に，「目的に応じて各種の書物を選んで読み，教養を高める態度を身につけること」とあり，イの項に，「必要に応じて各種の参考文献を適切に利用する態度を養うこと」と指標を示しているのは，広い意味では読書指導を含んだ目標であるといえないこともない。

我々は読書指導の必要を感じてはいても，現代国語３ケ年７単位という時間で，計画的に読書指導の時間を設けたりするのは困難である。作文でさえ満足に時間をとることが出来ず，読解の一助として，初発及び読解後の感想文や，要旨等を書かせてお茶をにごしている現状である。従って「読書指導」はせいぜい良書紹介や，夏休みの読書感想文提出等にとどまる，ということになってしまう。

さて，「読書指導」なるものは高校でどの程度に必要なものなのであろうか。果して「指導」がなければ高校生は読書しないものであろうか。このような素朴な疑問をもちながら，私は，現任校の生徒の読書調査をすることによって，問題点をさぐり，私なりの対策を述べてみたいと思う。

読書調査

1　読書調査の方法

一・二年を対象にして，中学時代と高校一・二年間で読んだ書物を，(1)文学的な本（詩・小説・評論・随筆など）(2)科学的な本及び社会科的な本・雑誌 (3)参考書 (4)現在使用している国語関係の辞書の種類に分けて書かせた。次に読書の好きな生徒にはその動機又は理由を書かせ，読書の嫌いな生徒又はあまり読書しない生徒にはその理由を書かせた。

2　読書調査の結果

(1) 読書範囲が広く，一年男女200名の読書の種類は日本の作品約150種類，翻訳物約110種類に達する。（文学的な作品に限定した)。又一年生でニイチェの「ツァラトウストラ」やキルケゴールの「死に至る病」とか，小林秀雄の「無常ということ」や「考えるヒント」などを読んでいる生徒があるかと思うと探偵小説しか読まないという生徒があって，その個人差は甚だしい。

(2) 読書量もまた非常に巾がある。高校一年間に30冊も読んでいる生徒があるかと思えば，一年間に一冊という生徒もあって驚かされる。

(3) 統計的にみた全般の読書傾向診断

一年生200名からは中学時代に読んだ作品のリストを作り，二年生200名からは高校一，二年の間に読んだ作品のリストを作って，その%を出し，それぞれ男女別に表を作った。男女計10%以上のものだけを次に示した。

---

* Problems and Counterplans of Guidance on Reading.

** ABE, Toshiko (Tokyo Metropolitan Nihonbashi High School)

○中学時代に読んだ作品

〔外国の作品〕	男%	女%
嵐ケ丘	9	30
車輪の下	8	28
レ・ミゼラブル	5	19
アンネの日記	1	23
ジェーン・エア	2	22
狭き門	6	17
若きヴェルテルの悩み	5	12
ジャン・クリストフ	6	11
風と共に去りぬ	2	14
戦争と平和	5	11
星の王子様	5	10
聖書物語	5	7
罪と罰	5	7
アン・シリーズ	3	38
シェークスピアの作品	5	40
〔日本の作品〕	男%	女%
坊ちゃん	52	37
我輩は猫である	24	26
羅生門	22	23
鼻	21	23
伊豆の踊子	14	25
友情（武者小路）	12	18
路傍の石	11	16
ビルマの竪琴	11	15
次郎物語	8	14
二十四の瞳	2	18
高瀬舟	11	5
智恵子抄	3	10
その他の漱石の作品	30	15
その他の芥川の作品	28	29
石坂洋次郎の作品	15	18
太宰治の作品	7	10

○高校一・二年間に読んだ作品

〔外国の作品〕	男%	女%
武器よさらば	20	15
狭き門	6	15
老人と海	12	5
風と共に去りぬ	4	13
嵐ケ丘	5	11
罪と罰	8	8
若きヴェルテルの悩み	8	8
アンナ・カレーニナ	6	10
女の一生（モーパッサン）	0	14
ジェーン・エア	0	13
赤と黒	2	11
大地	2	9
〔日本の作品〕	男%	女%
三四郎	59	58
友情	11	15
暗夜行路	12	12
破戒	14	8
こころ	8	13
伊豆の踊子	6	13
智恵子抄	6	6
痴人の愛	0	10
愛の無常（亀井勝一郎）	7	3
芥川の作品	48	25
その他の漱石の作品	25	24
石坂洋次郎の作品	18	27
その他の武者小路の作品	12	15
鷗外の作品	8	10
太宰治の作品	7	8

上の表には，次のような特徴がみられる。(1) 作品によって男女の傾向が甚だしく違っている。中学の「アンネの日記」「ジェーン・エア」「風と共に去りぬ」「アン・シリーズ」「二十四の瞳」など，高校では「女の一生」「ジェーン・エア」「赤と黒」「痴人の愛」などは女がぐっと多くなっている。男の多いのは，中学では「坊ちゃん」など漱石の作品で，高校では芥川の作品，「破戒」「老人と海」「愛の無常」などがやや女より多くなっている。

(2) 中学より高校では読書内容が相当高まって来ている生徒が多いのは当然であるが，中学程度の読書力しかないものも大分あるということがわかる。

次に読書傾向を考察してみると，一般的には健全な方向にむかっていると思われる。又上位を占めているものの中には，次のような理由がうかがわれるものがある。

(1) 映画化されたものの原作を読む。

(2) 教材として扱われたことがきっかけになっている。

(3) ベストセラー等，本屋の宣伝によるもの。

(4) 筋だけを追う娯楽的なもの。

3　読書の好きになった動機，及び好きになった理由，嫌いな理由。

好きになった動機（数字は人数）	1年 男 55	1年 女 73	2年 男 46	2年 女 65	計
子供の頃から読む習慣がついていた	8	20	4	8	40
家に本がたくさんあったので	4	2	2	10	18

好きな理由	1年 男 55	1年 女 73	2年 男 46	2年 女 65	計
面白い	16	6	24	14	60
物語の世界に引き込まれて現在のすべてを忘れることが出来る	10	10	0	8	28
深い感動を受ける	0	10	0	0	10
新しい知識を得，国語の力がつき，教養が身につく	4	14	10	12	40
思考力がつく	2	4	1	3	10
心がおちつく	0	6	0	0	6
暇つぶしになる	6	0	0	0	6

嫌いな理由（余り読まない理由を含む）	1年 男 45	1年 女 27	2年 男 54	2年 女 35	計
本を読むのは面倒である	23	10	26	13	72
漫画の方が手っ取り早くて面白い	16	10	16	8	50
テレビを見るのに夢中である	12	10	12	9	43
本が多すぎて何を読んだらよいかわからない	5	11	9	12	37
クラブ活動のため時間がない	8	6	7	13	34
宿題や予習・復習で手一杯	4	5	5	10	24
図書館に読みたい本が少ない	3	6	5	1	15

上の表では読書好きな生徒のその動機が，子供の頃から読書の習慣がついているというのが多い。家族が読書の習慣をもっていたり，家に本が多いとか，小学校の図書館で読む習慣をつけられた等，小さい時の環境がいかに大切であるかを考えさせられる。又読書の好きな理由は，男女によって違ってくる。男子は「面白い」とか「暇つぶし」などの理由をあげているのが目立つ。この「暇つぶし」に読む生徒の読書傾向を調べてみると，SFものや娯楽の勝ったものばかりである。考えるのが面倒な生徒ではないかと思われるので，個別に追跡調査などをすれば，その生徒の性格の一面がわかり，指導の参考になるだろうと思われる。

嫌いな理由では，漫画がテレビより多く，映像メディアによる害は，テレビより漫画に移りつつある現今の学生の風潮が反映していると思われる。「本が多すぎて何を読んだらよいかわからない」という生徒には，色々な機会に個別に指針を与えるとか，何か対策を考えたいと思う。

読書指導の問題点に対する対策

1　対策の場と方法

(1)　国語の授業を通して，読解指導から読書指導へ発展させてゆく。

(2)　H・Rで，読書ノートを各自に作らせ時々読書感想文を書かせて，H・R・T が読むとか，年間計画をたてて，クラス全員同じ短編小説を読んで感想を話し合うとかの方法を考える。

(3)　図書館教育の読書指導計画とタイ・アップして方法を考える。

(4)　個別指導。国語の教師，H・R・T カウンセラー等が，生徒の中で問題のありそうなものに読書指導を通して何かの指針を与えたり，考えさせたりする方法。阪本一郎・室伏武両先生の著「読書療法」には非行少年少女が適切な読書指導によって，次第に心の歪みをとり除かれて行く過程が，実に生々しく描き出されている。少年のみならず‘大人でさえ，巧みに指示されれば，数冊の本を読むことによって，生活が一変してしまう実例を読み，私は深く心を打たれた。高校生に対してもこうした個別の指導が真剣に考えられなければならないと思う。

2　方法(1)と(3)についての実践例

(1)　国語の読解指導との関連

この問題を私は二つの観点から考えてみた。

(イ)　自分の問題として考える習慣をつけること（思考力の養成）

(ロ)　書物によって読みの速度を変えることが出来るような態度を養い，技術を身につけること。

(イ) について,

読書は一生を通じて行うものであるから，その基礎力を養う意味で，読解を通じて自分の考えを深めるという方向にもって行きたい。何かに感動して自分を深くみつめるという事に対して，高校生では評論よりも小説の方が影響が大きい。そのことは，夏休みの読書感想文などに，「若きヴェルテルの悩み」や「嵐ケ丘」・「友情」や「こころ」などが毎年常に生徒の読書のトップを占めているのをみてもわかる。授業ではこうした材料で深く読み味わう習慣をつけさせ，思考力を高める方向にもって行きたいと思う。以前，中島敦の「山月記」を扱った時，学習後の感想文に，生徒がそれぞれ自分に密着した問題として“うめき声”を出しているのを発見した。何に一番関心をもったかという観点から次のようにまとめてみた。（50人を対象にして）

1. 李徴の詩に対する執着について

イ あくまでも志をまげない李徴の異常な熱意に圧倒され，同感している（10人）

ロ 詩への執着だけではだめで，やはり愛情がなければ人の心を打つ詩は出来ない（4）

ハ 真の芸術は有名になりたいなどという心からは生まれない。むしろ名を思わずひたすら追求する姿からほんものは生れる（4）

2. 李徴の性格について

イ 尊大な自尊心の裏側にある羞恥心の問題は，まさに自分の苦しんでいるところのもので，結局は刻苦をいとう怠惰につながるものである事を知らされた。（13）

ロ 人間は猛獣使いだ。そして猛獣とは各人の性情である，というが，自分の性格に不安を覚える（3）

3. 運命に対する恐怖

何かわからぬものによって否応なく現在の生を受けとらされているという事に対する恐怖と不安が胸をうつ。しかし人間は運命を知らぬから生きていられるのであろう。そうした恐怖に打ち克たねばならない（5）

その他，人間性の限界を考えているもの，利己心と孤独の問題，才能に対する自嘲，詩人の宿命的な悲しみに共鳴する…等。

こういう教材は言語抵抗が相当あっても，色々な面で思考力を養うことが出来るので，大いに利用したいと思う。

(ロ)について,

次に書物によって読みの速度を変えることの技術指導を通して，熟読玩味するものと，通読するものとを読み分ける力を養いたいと思う。速読は或る程度，読書量とも関係してくる。理解の早い生徒は多読している生徒に多く，目的意識をもって意欲的に読書している生徒は深く読みとることが出来るようである。記録・報告・説明などは一読して主旨を把握出来るよう，冒頭・キーセンテンス等に注意して読ませている。しかし速読して内容を読み取ることは，技術指導だけではどうにもならないように思う。

先般「三四郎」を完本として授業で扱うつもりで休み中に一読させて感想文を提出させた。その結果，内容を各方面から読み取っているものは，50人中12人，一部分はよみ取れない所もあるが，或る問題については相当考えていると思われるもの28人，まるっきり読みとれないもの10人，という次第であった。その原因の一つを私は次のような所から見出すことが出来ると思う。

日本橋高校の図書委員会では毎年何回か「書窓」という小雑誌を出して，色々な統計・新書紹介・読書感想文などを掲載しているが，その中の昨年の統計に生徒の利用冊数を調べたのがあった。最高は，一年間に76冊借りている。利用者の58%は，年間に1～5冊を借りている。ところが1冊も借りない生徒が，全校生徒の半数もある。この半数の生徒は教科書以外の本には読み慣れていないという事になる。ここに読解指導の限界もあると思われる。

(3) 図書館利用及び図書館指導と読書指導との関連

上述のような状況を何とか打開したいと思い，授業の前になるべく図書館へ行くような方法をとっている。詩の教材が出て来る時，今までなら私が他の詩をプリントして渡して来たのであるが，グループ毎に，詩人をそれぞれ分担して，図書館で調べさせ，それをプリントにする。又，作者についても，図書館で年譜数種を調べさせて，プリントして説明する。さらにその年譜をみて各自

の感想をいわせ，作者に対する関心を呼び起す，というようにしている。

また図書館委員の先生が一学期に一・二回読書会を催したり，二年の講習では毎週一回まとまった評論などを読む「講読」をしたりしているが，これらは受ける生徒が少なく，殆んどの生徒は関心を示さない。そこで前任校では国語の先生の数も多かったので（9人）読書感想文のコンクールを年二回行った。数年前までは自由応募にしたが，毎回一学年数名しか作品を提出しない。そこで全員に宿題として課し提出させた。先ず図書館委員の先生が中心となって全学科の先生から推薦図書を提出してもらい表にして全員にくばる。何を読んでいいか迷う生徒にはその中から選ばせる。（よく文学百選とか千選とかが出版されているが，小説だけで百選などというのも片寄るし，あまり数が多いと，迷ってしまうことになる）読書感想文を提出させて，国語教師全員が，分担して一組から五・六編を選び，第二回目は，一回目に読まなかった先生が回覧して，作品毎に選評を書き，学年別に順位をきめる。最後に図書館委員の先生が一・二・三位に当る作品の批評を書き「読書感想文集」が出来上る。こうしたコンクールには色々な問題が出て来るが，担当教師一人の批評で返したり，グループ批評をする以外に，多くの人の目を通したものを文集として出すこともたまにはよい事であると思う。後々国語の時間やH·Rでも利用出来るし，生徒にも多少の刺激になろうと思う。次に41年に行った時の推薦図書を示したい。（前任校，都立葛飾野高校図書館部発行）（82冊を紹介したが，5冊を除いては図書館にあるものであった。生徒には出版社名をも示した。）

河　童	芥川竜之介
大和古寺風物誌	亀井勝一郎
天平の甍	井上靖
太陽の誕生と死	J．ガモフ 白井後明訳
モゴール族探検記	梅棹忠夫
生物と無生物の間	川喜田愛郎
伊豆の踊子	川端康成
アラビアのロレンス	中野好夫
楡家の人びと	北杜夫
竹沢先生といふ人	長与善郎
ピエル・キュリー伝	キュリー・マリー 渡辺慧訳
こ　こ　ろ	夏目漱石
若きヴェルテルの悩み	ゲーテ 高橋健二訳
十五年戦争	日本戦没学生記念編
どん底	M・ゴーリキー 湯浅芳子訳
迷　路	野上弥生子
萬葉秀歌	斎藤茂吉
コンティキ号探検記	ハイエルダール 水口志計夫訳
風土病との闘い	佐々学
ゴ　ッ　ホ	ゴッホ 針生一郎解説
暗夜行路	志賀直哉
アメリカ人民の歴史	レオ・ヒューバーマン 小林・雪山共訳
夜明け前	島崎藤村
ファーブル昆虫記	J・ファーブル 平岡昇訳
水と原生林の間で	シュヴァイツアー 浅井真男訳
福翁自伝	福沢諭吉
怒りのぶどう	J・スタインベック 石　一郎訳
嵐　ケ　丘	E・ブロンテ 河野一郎訳
赤　と　黒	スタンダール 富永明夫訳
ボールベァリング物語	N・ベシキン 長谷川淳訳
月と六ペンス	S・モーム 中野・上田共訳
シルクロード	S・ヘディン 長尾宏也訳
中国の赤い星	エドガー・スノー 宇佐美誠次郎訳
武器よさらば	A・ヘミングウェイ 瀬沼茂樹訳
智恵子抄	高村光太郎
娘　時　代	ボーヴォワール 朝吹登美子訳
富嶽百景	太宰治
チボー家の人々	マルタン・デュ・ガール 山内義雄訳
李家荘の変遷	趙　樹　理 岡崎俊夫訳
風と共に去りぬ	M・ミッチェル 大久保，竹内共訳
昨日の世界	S・ツヴァイク 原田義人訳
日本列島	猿　正雄 井尻正二他
マゼラン	S・ツヴァイク 関・河原共訳

播州平野	宮本百合子
罪と罰	ドストエフスキー 池田健太郎訳
友情	武者小路実篤
白鯨	H・メルヴィル 阿部知二訳
春	島崎藤村
フレミングの生涯	アンドレ，モロワ 新庄・平岡共訳
少年の悲哀	国木田独歩
物理の散歩道	ロゲルギスト
青年	森鷗外
ベートーベンの生涯	ロマン・ロラン 片山敏彦訳
思い出の記	徳富蘆花
ジャン・クリトフ	ロマン・ロラン 片山敏彦訳
永遠なる序章	椎名鱗三
余は如何にして基督信徒となりしか	内村鑑三
インドで考えたこと	堀田善衛
続思索と体験	西田幾太郎
ミッシングリンクのなぞ	レーモンド・ダート
三人姉妹	チエホフ
日本の思想	丸山真男
戦争と平和	トルストイ 米川正夫訳
石川啄木全集（特にローマ字日記）	石川啄木
女の一生	モーパッサン 杉捷夫訳
ベルツの日記	ベルツ
阿部一族	森鷗外
木綿以前のこと	柳田国男
愛の無常について	亀井勝一郎
梨の花	中野重治
考えるヒント	小林秀雄
日本文学の古典	西郷・永積・広末共著
デスク日記マスコミと歴史	小和田次郎
源氏物語	谷崎潤一郎訳
旅人	湯川秀樹
戦国乱世の文字	杉浦明平
歎異抄	梅原真隆訳註
終りなき鎮魂歌	藤井重夫
正法眼蔵随聞記	古田紹欽訳註
シュリーマン伝	エーミール・ハードヴィヒ
日本中が私の劇場	真山美保
沈黙	遠藤周作

終わりに

読書は個人の作業であるので，読書能力の差のひどい本校では，個別の指導が望ましい。今後調査カードを利用して，機会をみつけて個別指導（むしろ相談）をしたいと思っている。生徒の中には相当の読書量もあり，高い程度のものを読んでいるにもかかわらず，現代国語の成績はかんばしくないものがある。それは読書の理解の程度によると思われる。又，評論・随筆などを読む生徒は全体的に少ないので，読書指導に到る前提として，やはりで本校は読解指導で基礎の力を十分つけておかなければならないと痛感した。

資料

読書療法の事例研究

「経営的にはあくした生徒指導」より

東京都開進第二中学校　半田茂雄

1　不純異性交遊

＜問題少年＞12才，中学1年男子。割合に神経質，好きなものには熱中するが，まわりからおしつけられるとソッポをむく。運動や機械いじりは好きだが勉強ぎらい。小学校時代は万才のまねをしたりして，級友からタッチャンの愛称でよばれ，ひょうきんところが女子にも好感をもたれていた。中学に入ってから，本人にとっては学習内容が急に高度なものとなり，興味のもてぬ学科には全く意欲を示さず，怠学の傾向が目立ち，服装，言動もややくずれてきた。一学期のおわり，別の軟派暴力少年とケンカをしてなぐりあったことがある。夏休み臨海学校で班編成の関係上その少年たちの班と同室になり，それをキッカケとして急激に，その少年の方に傾斜していき，女の子に興味をもちはじめ，軟派風になってきた。

<家庭環境> 母親は少年の幼時に病死，父親が生計を立てているが，事件がおこるまで学校には一度も出たことのない父親である。兄1人姉3人いるが，4人とも少年の在学する中学を出身，それぞれ問題行動があった。その中2人の姉は，家出や異性との不純交遊で警察の世話になったことがある。しつけは全くの放任で小遣いは700円くらい，大体飲み食いに使っている。父母会などには母親がわりに家事をとりしきっている長姉が出てくる。

<問題行動> 中学1年の9月初旬より，前述の少年を主謀者とするグループに入り，その少年と全く同一行動をとって小学校低学年の少女にいたずらをしている。前述の少年は，いたずらをするのに，ナイフをちらつかせたり，手をうしろにねじりまわしたりの暴力的威圧的行為をとったが，この少年は暴力的なことはせず，もっぱら甘言を弄して，ねこなで声で少女たちにのぞんでいる。従って少女たちは，前述の少年を「こわかった」という反面，この少年のことは「やさしい」といっている。知能的な計算がはたらき，策師的にこまかいところまで考える小ズルイ態度がある。

<指導審議表による考察> 知能偏差値は42，標準学力検査は数学51，国語56，学習法偏差値は51。まじめにやればある程度の成績がとれるのに，家庭内の不安定な雰囲気と，交友関係の悪さから，中学に入って急に非行化してきた。父親は事件後，深く反省し，学校にたえず連絡をとり，呼び出しがあれば必らず自分自身が出るし，父母会にも必らず出席，親子の話しあいも持つようになってきた。学校内における交友関係の整理と，良き友人による指導，学級活動に対する協力，体育委員としての責任と参加，更に異性愛の正しい認識——すなわち学校生活や交友関係における適応性を函養することを目標として読書療法を行なうことが望ましいと指摘されている。

<読書療法> 友情，教師，学校，異性愛などにつき，学校生活や交友関係における適応性を養うため「風の中の瞳」（新田次郎，東都書房）によって治療を行なうこととし，11月1日より読書療法を行なった。

<経過> 第1回面接（昭和41年11月1）「日風の中の瞳」を与えて，読書興味の動機づけを行なう。読書ノートに感想文を書かせ，1週回提出させ，提出時に面接，話しあうこととした。

第2回面接（11月7日） 「寺島先生のようなザックバランな先生は，いいと思う“青春とは何だ”の夏木陽介のような感じだ。兄さんのようで，すごく親しみやすい」，先生に対する不満とか希望をきいてみたが，かれは「みんないい先生だと思います」というだけで，ホントの気持ちを出そうとはしなかった。

第3回面接（11月15日） 「荒木さんのような女の子は人気があるつて書いてあるが，ぼくはそうは思わない。なんとなくゆう等生のようで，いやな気がする」少年に「きみの好きな女の子は？」と聞くと，同級生のT子のナマエをあげた。（入学してすぐT子は少年からラブレターめいた手紙をうけとり担任教師に相談，少年はそのことで指導されたことがある）T子はどちらというと線のほそい，ヒョワな感じのする，いかにもういういしい少女らしい感じの子であった。

第4回面接（11月22日） 「澄田千穂は，はずかしかったのだろうが，よく言ったものだ。（寝言と歯ぎしりのこと）人に自分のことをいうのは，いやなものだ。ねごとなんかだからまだいいが，ぼくのようなことだったら，なかなか，先生にもいえない。けれども，かくしてはいけないのだ。これからはけっして嘘をつくのをやめようと思った。それに嘘はぜったいにばれるし，とりかえしのつかないことをおこしてしまうということがわかったからだ」

この数日前，少年は，上級生の問題少女と，家人，教師に嘘をついて公園にいったり，ローラースケートに行ったりしたことが，友人から生活指導担当の教師に報告され，関係の教師からきびしく叱責，注意されている。その翌日担任の教師に出した生活日誌に少年は次のように書いていた。

「ぼくのことでほかの4人に迷惑をかけたことは悪いと思う。でもあやまってすむ問題じゃあないと思う。ぼくはどんな専門の機関へ連れていかれてもいい。どんなことをされてもいい。早くこの心の病気を直したい。でないとぼくは立ち直れないと思う。そしてこの病気が直り，これからしっかりやっていくといえる時がくれば，ぼくの気持ちがわかってもらえるだろう。こんなことを言っても信じてもらえないと思うが，先生どうかこれだけは信用して下さい。たのみます。」

この面接の時の少年の態度は，きわめて素直で，また真面目であり，信頼してくれていた親や教師を裏切った結果になったことを深く悔い，それだけに澄田千穂の勇気に心から感心したと述べている。相談室を出て行く時の少年の態度は，明るく真摯であり，今後に期待をいだかせるものがあった。

第5回面接（11月29日） 「（川村と宮崎の）2人がけんかした時の先生のさっぱりした態度，女の子が修学旅行の感想文の書けない時の注意のしかた，寺島先生はりっぱな先生だと思う」と書き，「君のまわりで最近，先生に感心したことなどないの？」と聞いた時，きわめて素直に「社会科の時間，教科書を忘れた時，先生が貸してくれた。親切な先生だと思いました」と答えている。

第6回面接（12月6日） 「旅行中，千穂がのびてしまった時，男子の日野が座席をゆずってやったというのは，なかなかできない。ふつう，そんなことをしたら，みんながひやかすと思う。勇気がなければできないだろう。先生が話してくれたように，みんなの前で，正々堂々と明るい，男女の友情がもてなくてはいけないのだ。ぼくが先生にも嘘をついて，みんなに分らぬようにこっそりとローラースケート場の前でSさん（前記，上級の少女）と待ちあわせした時の気持ちといったら，それはいやなものだった」（読書ノート）

第7回面接（12月13日） ノートに書いてないので，理由を聞くと，山の中で遭難しそうになった時の，先生と級友たちの

思いやりとはげましあいに，すごく感動して，どうまとめてよいか分らぬので書かなかったという。だれのどんな行動がいちばん感動したか聞いたところ，「だれとはいえない，みんなです。」と言い，しばらくして「いちばん感心したのは荒木さんと小牧君」と答えた。ことに，荒木雪子に，男の子以上の正確な判断力と卓越した統率力があるということに，驚異と尊敬の念を覚えたようである。

第8回面接（12月20日）　寺島先生の辞表提出について，ホームルームで荒木雪子と澄田千穂が発言，先生を守ろうとしたこと，弱い感じのする千穂が，運動会の女子リレーでがんばってB組を優勝にみちびいたことなどについて書きしたためたのち，「女だからといって，ゆめが持てないとか，外に出て働けないという考えはまちがっていて，けっしてそんなことはないと思う。ぼくたちがおとなになったら，女と男も一緒にはたらける世の中にしていきたい」とハッキリ書きしるしている。（この頃と前後して教育相談所のカウンセリングもうちきられ，情緒安定が報告されている。）

第9回面接（12月24日）　（日野と岩井，澄田の異性愛にふれて）「先生が澄田千穂に“好きだということは不良ではない。みんな，だれにでもそういう気持ちがあるのだ。それはきみが成長したしょうこだ”と言ったが，その上に先生方がいつもいう，好きなのはわるいことではない，けれども親や先生をごまかして，二人だけでこっそり行動するようなことがいけないのだということを，ぼくは考えました。」（読書ノート）

第10回面接（1月9日）少年は「風の中の瞳」の中学生群像にたいへん共鳴を覚えたようだ。「（まとめとして）みんなが女の子をバカにしないのにもおどろいた。女の子で男の子よりりっぱな人がいると思った。それからみんながよく助けあっている。川村なんか一つもひがんでいない，えらいと思った。ぼくだってひがんではいけない。この間，中央委員のT君から，この頃N君の態度が大きくなったから注意してくれといわれた。ぼくはT君から信用されているようなので，うら切らないようにしたい。」（読書ノート）

同日担任教師に提出した生活日誌にも，「風の中の瞳」をよみおわったことを書き，更に自分の一年を反省して「最初の半年はやや失敗もあったが，大体よかった。後の半年は校外や校内でいろいろな事件をおこし，先生やケイサツのおせわになってしまった。このことは一生忘れないだろう。来年こそ自分自身の信用をとりもどし，善悪の区別をしっかりつけて，おちついて行動していく」と結んでいる。

このあと「サムライの子」，「君たちはどう生きるか」をあたえて，3月末に治療をおわっている。2年生になって，かなりおちつき，時々服装の乱れがみられる程度で，問題行動をおこすようなことはなくなっている。異性問題でも，何等問題となることもなく，先生に対しても自分の言動に気をつけているし，級友およびクラスに対しても積極的な協力の姿勢をみせ，球技大会ではサッカーの主審として，みちがえるような生き生きとした態度で活躍するようになった。

2　個性の伸長

＜軽問題少女＞　13才，中学2年生の少女。知能偏差値60。幼少時はやや虚弱だったが，現在は普通。成績は40名中，7，8番くらい。教科は万遍なくこなすが，スポーツは苦手。内省的傾向つよく，国語などが得意。読書ことに文学書をこのみ，作文などが好きである。

＜家庭環境＞　実父母健在。中流商社の役員をしている父親は，寛容な，温厚な人がらである。母親は読書を好み，なかんずく文学書をよく好む。茶道，生花のたしなみがあり，能筆，文章も巧み，教養のある婦人である。本人の幼児期に兄が病没した他，現在は妹1人，弟1人の3人姉弟で，家庭環境は物質面，精神面，両面ともに充分恵まれていて，何等問題はない。但し，兄が死んでから2年後に生まれた少女に，兄に対する両親の情愛をそのまま注ぎ込んだとみられ，やや過保護的な甘えと引込み思案，わがままがみられる。

＜問題点＞　いわゆる問題行動は一つもなかったが，担任教師は，この少女の比較的優れた素質と成績，それに恵まれた家庭環境から考えて，少女の好きな読書によって，更に自己を向上させる積極的な意欲と，少女の長所短所を自覚して，よき個性を伸長させ，自律性の育成をはかるべく，相談があった。

＜読書療法＞　個性の伸長をはかり，自律性を成長させることを目標として「あり子の記」（香山美子，理論社）を与え，読書ノートを提出させ，適時話しあうという形式をとった。

＜経過＞　第1回面接（昭和42年4月13日）　「この一家は4人で，働ける人は兄，順だけ。順の給料だけで，ようやっと暮らしていけるような貧しさである。ここまで読んで，私は“キューポラのある街”での母が一家を支えていくために苦労していくところを思いうかべた。順は朝早く起きて仕事をやり，夜は夜学に通うという生活，決して片一方にかたよらず，二つの生活を両立させていく順につくづく感心させられた」（読書ノート）

きわめて適確なよみとり方をし，順の真剣な生き方に対する共鳴をのべている。

第2回面接（4月21日）　「あり子の父が死んだから勉強がおくれたといって，いらいらする気持ちは私にもわかるような気持ちがした。けれども，とうちゃんが死んだりした不幸のあとだから無理もないという慰めはうけたくないといったあり子の言葉にすっかり感心してしまった。私はこの本をよんで不幸を理由にして勉強をおろそかにしてはいけないのだとつくづく思った。」（読書ノート）

少女がこのノートを持ってきた時，感想をきいてみると，「先生，人生って，むずかしい問題ですね。わたしたちの勉強って，ずい分甘いものがあるんですね」と言っていた。そして「今までの小説とちがって大変身近かな気がするので，ひとごとと思えぬ気がします」とも言っていた。

第3回面接（4月27日）「順が仕事をやめてまで心配しているのに，あり子は平気な顔をして帰ってきた所に腹が立った。親にしてみれば，子供は一番の宝なのに信頼を裏切るような事をして平気な顔をする。親に心配をかける事が一番親不幸じゃないかと思う。家出してからのあり子は全然ちがっていた。そろそろ，あり子は悪い方へひっぱられていくようだ。私は，もしかしたら，この先，悪い方へいくんじゃないかしらと思って，何だかこのあとをよむのがこわいなと思った。」（読書ノート）

親に心配をかける事が一番わるいということを，しみじみと知ったという感想は何よりのものであった。少女にしては，今まで分っていても，これほど痛切に感じたことはなかったと思う。10日程前，母親が，少女の忘れたＰＴＡ会費をわざわざ持ってきたことがあった。担任の教師が，そのことを少女に言っても少女はむしろ当り前という表情であった。この感想文のあとに，そのことを聞いてみると，恥ずかしそうに，自分自身が親に甘えすぎていたということを知ったと述懐し「あり子がみち子をどなったり，みち子の出ていった後に，あり子の手に一箱のタバコがのっていた，というのは，あまりにも，あり子のわがままがひどすぎると思います」と言っている。少女は，次第にあり子に自分の投影を見出しているようである。

第4回面接（5月4日）「はっきりとはいえないが，あり子はなぜ悪い方へいくようになったのだろう。何かといえばすぐあたりちらす，なぜこんな子どもになってしまったのだろう。今までのあり子はとっても明るく素直だったのに，その上，私に大切な事を教えてくれもしたのに。私は，あり子にあって，２人で話しあいたいという気持ちでいっぱいなのだ。家族の人たちのためにも，ぜひとも，もとどおりのあり子になってほしいと思わずにはいられなかった。」（読書ノート）

少女ののべている「私に大切な事を教えてくれもした」とは何であったろう。最近，少女は，家庭ではやや無口，何か考えているようで，話す時にはキッパリいうようになったとの母親のことばを，担任教師から聞いた直後であったので，少女が何か「大切なことを」考えているということは，かの女に深い意味をもっているということがうかがい知れよう。

第5回面接（5月11日）「結局いままでのあり子は意志が弱かったのではないかと思う。悪い友達から，ああしろ，こうしろといわれると，こわくていやだといえなかったのだろう。しかし，あり子はだんだん，もとどおりの姿になっていく。いや，もとどおりよりもずっと自分の意志をつよくしたあり子になっていくのだ。家族の人だってもっと応援してくれるだろう。あり子，がんばれ！　もう少しだ」（読書ノート）

あり子の意志の弱かった姿に，少女は，自分自身の姿を見出し，それをのりこえねばならぬと思うからこそ，力強く「あり子，がんばれ！　もう少しだ」と書いているのだ。授業中ならびにホームルームにおける少女の発言が，次第に自信にみちたものとなりつつあると，担任教師や教科担当教師から報告されるようになったのもこの頃であった。

第6回面接（5月15日）「もう少しで，あり子は立ち直ると応援しているのに，期待どおりにはならなかった。また順や母にあたりちらしたのだ。少し怒りがこみあげてきた。しかし，今，私がおこったら，私の負けだ。もう少しで，この本をよみおわる。最後には，きっとあり子がもとどおりになっていると信ずる。こう考えると，この先，本をよむのが楽しくなってきた。あり子は，まじめに働らき，母の手助けをすることだろう，きっと」（読書ノート）

自分自身と戦いながら「あり子」をよんで，おこり，励ましている少女のひたむきな気持ちがよくくみとれるではないか。「今，私がおこったら，私の負けだ」ということばに，本当に少女の，真剣な，切実な心の叫びをきく思いがするのである。

第7回面接（5月18日）「この本をよんで，つらい時や困っている時，一緒になって考えてくれる友達，肉親というものは本当にいいなあと思った。あり子も足にケガをして，まわりの人達の愛情や親切がわかってもとのあり子になりつつある。父が死んで以来，はじめてあり子は，今，泣いた。院長先生をみていたら，何か分らない涙が出てきたのだ。この涙は，みんなの親切が身にしみて分り，その上に立って自分を積極的に伸ばしていくことが何より大事なのだということの分ったという涙だと思います。（この本をよんで）本当によかったと思うだけです。」（読書ノート）

学年はじめに選ばれた学習係委員の仕事も最近では積極的であり，自分から進んでガリキリ，印刷をして問題集を作って級友にやらせたり，また所属する読書クラブでも新しく入った多くの一年生をまとめてテキパキとリードし苦手の体育でも球技大会のバレー試合に出場，活躍するなど，学習態度，生活態度の両面においてきわめて明るく，意欲的になってきている。

その後，「君たちの天分を生かそう」「車輪の下」などをあたえ，個性の伸長を目標とした自律性の育成に，ほぼ成功し，治療をおわっている。

追　記

(1) 治療の前と後とで種々の検査を行い，治療の効果を客観的に確めたかったが，担任のほかに24～27時間の授業を持っている現状では，それができなかった。

(2) 「読書感想ノート」と併行して問題少年少女に「生活記録ノート」を（親ぐるみ）書かせるようにしたことは，現場の教師として問題行動のある生徒の生活実態をとらえ，読書治療の反応を確める上で割合やりやすいし効果的であったように考えられる。

(3) 現在の複雑多岐にして広範囲にわたりすぎる教育制度の中にあつては，問題行動はないが，ともすれば埋没（？）しがちな内向的性格の比較的素質のいい少年少女に，この読書療法はよりいつそう効果的であるように思う。

文献紹介

岡田明著　読書教育の心理

この本は，著者がはしがきでも述べているように，「読みの教育」の心理学的研究を意図したものである。本来，読書科学において，「読書教育」(teaching of reading)は，主として国語教育の「読み」の指導をさしている。したがって，おそらく著者が「読みの指導（教育）」という言葉を使用しないで，「読書教育」という用語を用いたのは読書科学の体系の中で，この問題を考えようとしたからであろう。

こうした著者の「読みの教育」心理学の姿勢は現代の読書科学の学問的成果を豊富にとりいれたということである。これまで，ややもすると「読みの教育」は，国語教育の枠組みの中でだけ考えられがちであり，その理論や実際が硬直しがちであるが，それを十分に克服している。しかしながら，こうした傾向の著作は，外国の理論や実際の紹介に終始しがちであるが，単なる紹介に終らないで，それらの理論的研究に基づいて，著者自身の実践報告や日本での理論的研究をも十分にとりいれていることはこの本の価値を高からしめている。

本書は，読書教育の必要性と指導領域を明かにした第一章からはじまり，第二章では読書教育史，社会と教育の変化と読書教育，読書教育の最近の概観を述べて，子どもの発達と読書教育，読書能力の発達とその指導などについて詳述されている。第三章では，読解の過程や技能，グレイの理論の著者の実践化報告があり，第四章では，読解指導の心理，第五章で読みのレディネス，第六章では読書教育計画，第七章では治療的指導，第八章では，個人差に応ずる読みの指導，第九章では，速読の心理と指導，第十章では，読書による人間形成として読書興味と読書感想文の指導をとりあげ，第十一章で，評価をとりあげ，読書能力の一般的水準の決定，黙読と音読の評価，ITPA などにふれている。そして，第十二章は，読みの研究法を述べて終っている。したがって，この本は国語教育における「読みの指導」の理論的研究や実践のための資料や示唆を与えてくれるコンパクトな実務者や研究者の参考書としての役割を持つものであり，また，広く読書教育や読書科学を研究する手びきとなるものであるといえよう。そしてまた，本書が，読書教育の心理学の一つの体系を示し新分野を開拓したものとしても，きわめて有意義なものであることを重ねて強調しておきたい。

しかしながら，「読み」ないしは「読書」教育における心理学的研究の理論的な確立という視点から本書を読むときい，くつかの問題点が指摘できよう。

(1) 読書教育の心理学的研究が，「読みを教えることによって読書行動がどのように変化するかを研究する科学」（まえがき）であるという場合，その対象である「読みの教育」の領域を「読解の指導」だけではなしに，「読書の指導」をも含めるのか，否かという，「読書科学」における読書教育とその心理学の位置づけがなされてほしかった。

(2) 「読みの教育」の科学的研究という本書の意向に沿って，書かれてほしかった。科学と実践の処方箋とが混在していて決していけないというわけではないが，もちろん，それはそれなりに実践者の手びきとして価値を有するものではあるが，それは科学の領域ではないといえないだろうか。この本を基に，読書教育の心理学の確立を期待する。

読者として，この本を読むとき，外国の研究や実際の紹介が，主要なものを選び，それらについてもう少し詳しく扱ってほしい。初めてこうした分野を学ぶ者にとっては少し不親切な資料の扱い方がめだっている。その点，この本の全体的な批判として，記述が荒いのが残念でならない。しかし，こうした私の批判も，「コロンブスの卵」のたとえのようなもで，著者の労作に心から拍手を送りたい。協同出版KK，A５版 254 ページ，昭和42年10月刊，950円。　（室伏　武）

大久保愛著　幼児言語の発達

著者が自分の女児の１歳から６歳までの言語の発達を時間見本法で記録した巨大な資料をまとめたもの。わが国では久保良英の「幼児の言語発達」(1914) に次ぐ貴重な文献となろう。第１部は，①語彙，②助詞，③活用語，④疑問表現，⑤文構造の各発達を見ている。統計的処理がいささかあまいのと，総括的な法則性の把握がじゅうぶんとは思えないうらみはあるが，細部についてはゆきとどいた考察がほどこされ，かずかずの新しい発掘も提供されている。

第２部は日記ふうに記述されたその子の言語生活の記録である。その中に読書のレディネスがどのように発達しているかの資料が編みこまれているのが，われわれには興味ぶかい。たとえば絵本との交渉がどのように始まり，どのような過程を経て，自分で読むようになっていったか；お話の理解や再話，経験の話やつくり話の発達；文字の読み書きの学習過程など，実例が豊富にあげてあるので，読書入門期以前の指導にたいへん参考になる。まだ採録してない資料もあるようなので，もし著

者がこのような観点からまとめ直してくれたらと念願せずにはおれない。

だが本書は言語学的な研究に徹している。第3部には，幼児言語の研究法を解説して後進の同志を誘っている。それもむろん結構だが，私は上記のような期待を持つ者として，ついでに，読書への導入につづく発達過程を軸にした研究の続出することを切望する。そうした追跡的研究がほとんどないからである。

ちなみに著者は国立国語研究所勤務。言語学者大久保忠利氏の夫人である。（東京堂出版，昭42—11月刊，A5　406ぺ，2800円）　（阪本一郎）

今村秀夫著　子どもをみつめる読書指導

著者の「子どもに本をおしつけたり，読書を教えこもうとするのではなく，子どもたちの生活をみつめ，子どもを理解し，子どもの問題を考え，本を持って，それととりくむのが，私たち一般の教師の読書指導である」という読書指導観に立って，著者が中学の教師として長らく読書指導を実践してきたあいだに，「子どもたちから教えられてきたことの記録」である。第1章では本を読まない子をどうして読むようにするかの問題を扱い，「朝の10分間読書運動」を提唱している。そこでは，中学生のころが重要な脱皮期であること，したがって名作や文学作品ばかりではなく，知的な欲求，生活的・行動的な欲求にこたえていける読み物を用意してやらねばならないこと，そして，「なによりも，若い教師が，その若々しい心で胸をときめかせ，全身で読みとった本」が，生徒たちにすすめられることがだいじであることなどを説いて，サジェスションに富む。

第2章では子どもの読書生活を阻害する今日の環境のひずみを分析し，それを是正する対策を論証し，第3章では，集団的読書のあり方を実証してみせる。そして第4章では，真に子どもの生活に根ざした読書のすがたを浮き彫りにして，人間形成への寄与の仕方を具体的に説く。資料は豊富だし，すべて教室やホームルームの実験を経たものであるので，実践の場で問題に当面している教師たちに納得のいくアドバイスとなろう。また学究にもキタンのない現場の声を用いて参考にする貴重な窓口となろう。新書版204ぺ。国土社，昭42・7月発行。320円。

（阪本一郎）

長野県蘇南高等学校
読書グループを通して自主性をいかにして養うか

文部省指定生徒指導研究推進校として2年間とりくんだ実践記録で，後半は“教育相談を通して”が収載されている。

学校は木曾川沿いの山間地にあって地域の文化水準が低く，そのため生徒は知的な意欲に欠けているうえに一般に積極性・自主性が乏しいという。そこで①「読書により，時間的にも，空間的にも，より広い世界を知的・感覚的に体験させ，それによって自主的行動への意欲と価値判断が生まれる」，②「読書を媒介とするグループ活動により，人と人とのかかわり合いを深め自主的行動への意欲を高める」との二つの仮説を立て，読書グループの実験にはいった。

読書グループは，1～2学年のホームルーム(長)の時間（毎週火曜第7時）に，生徒指導の観点から組みかえられた小人数のグループ（5～6名ずつ）で行なわせる。まず選書についてはブック・リストが用意されているが，これは生徒各自が購入できるように新書・文庫本より選ばれている。そして1年では伝記的なもの，2年では歴史的なもの，3年では哲学・宗教的なものに重点が置かれる。グループで何を読むかの選書の過程を重視し，まず問題意識を育てることが前提となる。各自家庭で読んできて，話し合いをさせる。あと記録・評価の方法が定められている。

全体として非常に意欲的で，全校の協力体制の確立がすぐれている。まだ実験仮説を実証する段階に来ていないというが，指導方法の改善には適切な反省が加えられている。読書グループのあり方に一つの貴重な資料を提供するものと言えよう。ほかに読書実態調査の結果も収録されている。A5判　231ページ　非売品。　（阪本一郎）

受贈文献

大阪府高等学校図書館研究会「図書館研究」第4号（1967）
鎌倉市立御成小学校“国語科における読書指導を求めて”（「こどもに考えさせる国語学習指導の研究」収載）1967。
境忠一“宮沢賢治と『アザリア』”（「有明工業高等専門学校紀要」第3号収載）1967。

会　報

常任理事会（12月11日）

1. 機関誌の発行について——「読書科学」10巻4号（3月発行予定のもの）がやっとできた。11巻1・2号は印刷中。3号はかならず年度内に出し，発行遅延をとりもどしたい。
2. 標準読み物目録の発行について——本会の特別委員会で編

集した「人間形成の標準読み物目録」は学芸図書株式会社から発行された。定価800円。会員には1割引で頒布する。

3. 公開研究会について――別掲のごとく予定した。なおドーソン博士の講演会は既報のごとく盛会であった。
4. 読書指導委員会について――この委員会は発足以来およそ毎週会合を重ね，小学校の新しい教育課程における読書指導のあり方について審議してきたが，その結論を要望書にして文部省へ提出する。
5. 明年度大会について――前回の決議により大阪で開催の可能性を打診中であるが，まだ回答が来ない。
6. IRA 関係について――年次大会は1968年4月24日～27日ボストンで開かれる。なお機関誌等への論文発表も期待されている。
7. 年報編集について――機関誌11巻4号(No. 42)は例年どおり「年報」とすることに決定。
8. 公開研究会の計画について――これは毎月第3土曜日に開催することとし，開催が困難な月は休止することにする。案内は東京近辺の会員には葉書で，都内の学校には交換便で，その他は新聞等に掲載してもらう。2月17日には治療指導をテーマとすることに決定。

研究談話会（12月11日）

標準読み物目録の選定について　　阪本一郎氏

読書指導に関する要望書提出（12月11日）

読書指導研究委員会の結論を要望書として文部大臣に提出した。

公開研究会（1月20日）

「学校における読書療法の実際」を主題として千代田区教育センターで開催。講師は半田茂雄（練馬区開進中学校），室伏武，阪本一郎の3氏。盛会であった。

常任理事会（1月22日）

1. 明年度研究大会について――尾原理事から大阪で開催することを受諾するむね回答があった。これに対して，会期は8月上旬とし，日程は2日間とすることなどの提案をすることにした。
2. 年報編集について――「読書科学」No. 42は例年どおり年報とすることにした。
3. 国際読書会議について――8月1～2日にコペンハーゲンで開かれる IRA 主催の会議に室伏武氏が出席されるので，氏を本学会の代表と認めることにした。

日本読書学会第12回研究大会予告

期　日　　昭和43年 8 月9・10日

会　場　　大阪厚生年金会館

予　定　　第1日　学会員研究発表会

第2日　公開講座

「読解指導と読書指導」

発表申込〆切　　5月20日

申込方法　　学会本部へ題目と所属・氏名をハガキで郵送

なお，会場の都合により参会は300名で〆切ります。参加申込方法は追ってお知らせします。

Vol. XI, No. 3 March, 1968

昭和四十三年三月十日発行（年四回発行）

THE SCIENCE OF READING

Edited by The Japanese Society for the Science of Reading
President : SAKAMOTO, Ichiro
c/o Department of Child Study, Japan Women's University, Japan.

CONTENTS

Original Articles

Psychological analysis of the children's comic ; "Norakuro" ..... *SAKAMOTO, Ichiro* 1

Effect of training rate of reading in college students ..... *SATO, Yasumasa* 12

Developmental study on the factors of the difficulty in reading "Kanji" (ideographs in Japan) ..... *FUKUZAWA, Shūsuke* 16

A study of bibliotherapy on the delinquent (9th report) ..... *OOKAMI, Sadao* 22

Development of young children's ability to hear/tell stories ..... *SAKAMOTO, Ichiro ; IMAI, Michiko ; SHINOHARA, Hiroko* 29

Perfomances

A practice of corrective program in class-room ..... *YOKOMIZO, Shohei* 34

Reading guidance in the language room ..... *KANEKO, Yuriko* 39

Problems and counterplans of guidance on reading ..... *ABE, Toshiko* 44

Materials 49

Official Notes 54

第11巻 第3号
<通巻 第41号>
昭和43年 3 月 9 日 印刷
昭和43年 3 月 10 日 発行

会員頒布（会員外頒価 300円）

東京都文京区目白台2—8—1
日本女子大学家政学部阪本研究室内
振替東京3213番

編集・発行者 日本読書学会
代表 阪本一郎

発行所 日本読書学会

印刷・第一印刷株式会社